

令和七年九月

六十周年記念誌

岩手県公立学校退職校長会

岩手県公立学校退職校長会

六十周年記念誌

声 明 書

義務教育に生涯を捧げ、学校経営の重責を担った者が、かつて校長会を組織して、同感同憂、互いに励まし、互いに切磋してその責に任じたのであったが、第一線を退いた後再び組織を新たにして大同団結し、ここに岩手県公立学校退職校長会の結成を見るに至った事はまことに欣快に堪えない。

教育を愛し教育のため献身努力した者は、退職後といえども教育界或は教育そのものに無関心ではあり得ない。また教育者という特殊な職業に終始した者は、退職後の生活に多くの問題を抱えている。幾度か教育界の困難な諸問題を、相互に協力してその解決にあたってきたわれわれが、ここに相集って教育を語り、旧交を温め、研修を重ね、生活の向上を図り、われわれの大地であった教育界に直接間接に寄与しようとすることは、きわめて意義深いことと信ずる。

感激に満ちたこの輝かしい県結成大会の日を迎え、所信を披瀝して、左記の通り本会の使命達成を誓うものである。

- 一、常に研修を怠らず、教育者たりし者の権威を確保する。
- 一、生活の向上を図り、福祉の増進に努力する。特に恩給並びに年金のスライド法制化の実現を期する。
- 一、教育尊重の精神を重んじ、不偏不党で正大な民主教育の推進に寄与する。

右 声 明 する

昭和四十年十月二十三日

岩手県公立学校退職校長会結成大会

挨拶 · 祝辞



60周年記念誌の発刊にあたって

岩手県公立学校退職校長会 会長 吉川 健次

岩手県公立学校退職校長会は、昭和40年結成以来、「研修・親睦・社会貢献」を合い言葉に、会員相互の親交を深め、連帯意識の高揚と一人ひとりの生きがいの創出を目指し、豊かな生涯学習社会推進への貢献と本県及びわが国教育の振興に寄与することを期して活動を展開し、本年、60周年を迎えました。

この秋、60年間の会の歩みを顧み、結成や活動に力を尽くされた先輩各位と、ご指導ご支援いただいた関係機関・団体に感謝すると共に、本会活動の更なる充実と発展を期し、新たな決意と意欲を高める機会として、結成60周年を祝う記念事業と、併せて、第51回県研修・親睦会「盛岡大会」を行うこととしました。

大会内容は、記念式典・開会行事、記念講演会、記念祝賀会・親睦会、見学研修の開催と、本誌「60周年記念誌」の発刊です。

本誌「60周年記念誌」は、10年前に、先輩各位が編纂・刊行された「50周年記念誌」をベースにし、特にその後の10年間の本会の活動の記録として作成いたしました。

特に心に残った出来事を記述します。令和2年、退職校長会始まって以来の出来事・新型コロナウイルス感染症の世界的な流行です。三密（密閉・密集・密接）の厳禁や外出自粛が叫ばれ、県研修・親睦会「宮古大会」が延期。令和3年開催要項など準備万端整っていましたが、東日本大震災で中止となった経緯があり、是が非でも開催したかったのですがコロナには勝てませんでした。

令和4年「和賀大会」は1日開催。令和5年「一関西大会」からコロナ禍前の一泊二日に戻りました。

また、令和2年は、岩手県が「東北地区退職校長会協議会」の開催県でしたが、延期。令和3年も延期。令和4年は、宿泊に難色を示す県もあり、一日開催で「岩手大会」を実施しました。講話講師は全連退の会長でしたが、当日の朝、怪我をして来県できなくなり、急遽、本県木村幸治会長が「宰相原敬の魅力」と題して講話を行いました。見事にピンチヒッターとしての役割を果たし、驚嘆の声が上がりました。親睦会が出来ない代わりに、昼食時に各県の近況を発表する場を設けるなど中身の濃い会となりました。

令和2、3年は、県、各地区会の活動はほぼ停止した状況でしたが、「退職校長会だより特別号～未来につなぐ～」(第1部東日本大震災から10年を迎えて想う、第2部コロナ禍に生きる)を発刊し、会員の心をつなぐ交流の一つとなり、非常時の校長、副校長等の判断・対応のあり方を大いに学ぶことができました。

また、情報共有として16地区会の活動状況について、地区会の運営の概況や研修・親睦、福利厚生等、各事務局から寄せられました。それぞれの地区会の創意に満ちた特色ある活動に感謝申し上げます。

この度の60周年を契機に、改めて成果と課題（会員数の減少、県研修・ブロック研修の見直し、物価高騰による事業の見直し）を確認し、「退職校長会の会員でよかった」、「生きがいをみつけられてよかった」と実感できるような存在感と魅力ある会となるよう一層努めてまいります。

終わりに、これまでの本会の活動推進にご指導ご支援を賜りました関係の皆様、重ねて心から感謝を申し上げ、記念誌発刊の挨拶といたします。



祝 辞

岩手県教育委員会 教育長 佐藤 一 男

このたび、岩手県公立学校退職校長会が創立60周年を迎えられ、「60周年記念誌」を発刊される運びとなりましたことに対し、心よりお祝いを申し上げます。

昭和40年の貴会の発足以来、会員の皆様におかれましては、その豊かな教職経験と人生経験、確かな見識を生かし、県内の各地域における学校教育の充実や教員の資質向上、「いわての復興教育」推進への御理解と御協力など、本県教育の充実と振興に多大なる御支援をいただいておりますことに、心より感謝を申し上げます。また、東日本大震災津波の発災以降、継続的に被災地への支援に取り組んでいただいておりますことに深く敬意を表します。

さて、少子化・人口減少、グローバル化の進展、地球規模の課題など、社会情勢が大きく変化する中、「持続可能な社会の創り手の育成」と、「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を目指す教育の役割はますます重要となっており、誰一人取り残されず、全ての人の可能性を引き出す共生社会の実現に向けた教育が求められているところです。改めて、子どもが権利をもつ主体であり、一人の人間として基本的人権を有することを理解、尊重したうえで、多様性と包摂性のある学校文化の醸成を基盤としながら、各学校における教育活動がより一層充実することが期待されております。

本県の教育は、多くの教育関係者のたゆまぬ研鑽の積み重ねによって培われてきた優れた伝統と基盤を継承しながら、時代とともに変化する様々な教育を取り巻く環境や多様なニーズに対応するための取組を進めてきました。特に、教育振興運動は、令和6年度に60周年を迎えましたが、学校・家庭・地域が連携・協働し、子どもの学びや育ちを支える持続的な取組が展開されているところです。また、子どもたちや教育をめぐる環境が大きく変容している中、本県においては、東日本大震災津波やコロナ禍という未曾有の事態を経験しながらも、県内各地で未来に向かって前向きにがんばる子どもたちの姿が見られ、世界や地域で活躍する人材が続々と輩出されていることは、県民の大きな希望となっています。

どのような時代にあっても、岩手の子どもたち一人ひとりの夢の実現を支え、岩手の未来の創り手として社会全体で育てていくことが岩手の教育の使命です。県教育委員会では、現在、「岩手県教育振興計画（2024～2028）」のもと、「学びと絆で夢と未来を拓き 社会を創造する人づくり」を基本目標に掲げ、新たな時代の中で、誰一人として取り残されず、県民一人ひとりの個性や能力が発揮され、自分らしくいきいきと活躍できる社会の実現に向けて、様々な施策を推進しています。

岩手の子どもたちが、自分らしくいきいきと学び、夢をはぐくみ、希望あるいわてを創造する「生きる力」を身に付けられるよう、学校、保護者、地域、行政が一体となって岩手の教育の充実と発展に取り組んでまいりますので、引き続き御協力と御支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

終わりに、貴会のますますの発展と会員の皆様の御活躍を祈念いたしまして、祝辞といたします。

目 次

岩手県公立学校退職校長会結成時の「声明書」

あいさつ 岩手県公立学校退職校長会 会 長 吉 川 健 次
祝 辞 岩手県教育委員会 教育長 佐 藤 一 男

1 本会の歩み	1
(1) 歴代会長 (写真)	
(2) 本会成立から60年の歩み	
① 本会の成立	
② 結成から50周年までの歩み	
③ 結成50周年以降の歩み	
④ 歴代会長が振り返るこの10年	
2 本会の活動	11
(1) 研修活動	12
① 県研修・親睦会	
② ブロック研修会	
③ 研修事業の新ローテーションについて	
④ 現職校長会との教育懇談会	
⑤ 東北地区退職校長会協議会	
(2) 福利厚生活動	18
① 活動の概要	
② 講演会	
(3) 会報の発行	18
(4) 理事会・事務局長会議	19
① 理事会の構成と任務	
② 常任理事	
③ 臨時理事会	
④ 事務局長	
⑤ 事務局長会議	
(5) 関係機関・団体との連携	19
① 岩手県教育委員会	
② 市町村教育委員会	
③ 関係団体との連携	
(6) 会費納入免除会員について	20
① 問題の所在と経緯	
② 会費納入免除会員の要件	
③ 会費納入免除会員の権利等	
④ 会費免除の実施に当たって	
⑤ 確認事項	
(7) 「いわて教育の日」の推進活動	20
① 推進協議会の設立	
② 情報紙の概要	

(8) 新型コロナウイルス流行禍での会の運営	24
① 国内の様子	
② 本県の感染状況及び感染症対策の概要	
③ 退職校長会の事業の中止や延期	
(9) 役職定年制の導入に伴う加入体制の強化について	26
(10) 東日本大震災を語り継ぐ	27
① 「3・11」を忘れない	
② 歌い継ぐ「鎮魂の歌」	
③ 会報で語り継ぐ	
3 この10年を振り返って～各地区の活動を振り返る～	31
盛岡地区会	32
岩手地区会	34
紫波地区会	36
花巻地区会	38
遠野地区会	40
和賀地区会	42
胆江地区会	44
一関西地区会	46
一関東地区会	48
気仙地区会	50
釜石地区会	52
山田地区会	54
宮古地区会	56
岩泉地区会	58
九戸地区会	60
二戸地区会	62
4 今後の課題と展望	65
附：資料編	67
1 岩手県公立学校退職校長会会則	
2 岩手県公立学校退職校長会 令和7年度基本方針並びに事業計画	
3 令和7年度 岩手県公立学校退職校長会県本部役員	
4 歴代役員名簿	
○ 県本部	
○ 理事・地区会長	
○ 地区事務局長	
5 平成27年度～令和6年度までの県研修・親睦会及びブロック研修	
6 新入会員の加入状況と会員数の推移	
7 財政の移り変わり	
8 熊本地震と能登半島地震への取り組み	
編集後記	88



平泉 中尊寺金色堂

1 本会の歩み



1 本会の歩み

(1) 歴代会長



初代会長 潮田 斌
(昭和40～47年度)



第2代会長 朝倉 孫一
(昭和48～51年度)



第3代会長 千葉 寛
(昭和52～56年度)



第4代会長 早坂 健
(昭和57～59年度)



第5代会長 千葉 佑
(昭和60～61年度)



第6代会長 八重島 実
(昭和62～平成2年度)



第7代会長 吉田 榮
(平成3～5年度)



第8代会長 清野 守
(平成6年度)



第9代会長 小林 正吉
(平成7～11年度)



第10代会長 佐々木竹夫
(平成12～16年度)



第11代会長 大崎 弘一
(平成17年度)



第12代会長 小嶋 久人
(平成18～22年度)



第13代会長 吉村 暢夫
(平成23～26年度)



第14代会長 西村 倬郎
(平成27～28年度)



第15代会長 佐瀬 壽朗
(平成29～30年度)



第16代会長 木村 幸治
(令和元～4年度)



第17代会長 吉川 健次
(令和5～現在)

② 本会成立から60年の歩み

① 本会の成立

昭和40年10月23日、盛岡市立桜城小学校において「岩手県公立学校退職校長会」の結成総会が開催されて本会が発足した。

初代会長には、潮田 斌氏が選出された。副会長には、武田官平、及川公夫、金野菊三郎の諸氏が選出された。

総会では、規約、予算、全連退加入等が議決された。最後に本会結成の趣旨を盛り込んだ声明書が決議され、ここに「岩手県公立学校退職校長会」がスタートしたのである。

② 結成（昭和40年）から50周年（平成27年）までの歩み（50周年誌から抜粋）

本会の歩みを10年の区切りで振り返ってみたい。なお、詳細は、40周年誌、50周年誌などを参考にされたい。

昭和40年から昭和50年

会員数は200～1,000名に。会の予算額は、年平均30万円であった。予算が少なく活動に苦勞した。

その中でも注目すべき活動は恩給・年金の改善と増額運動であった。

■主な活動・出来事

- 昭和47年9月、東北地区退職校長会協議会結成大会（松島）に参加。
- 昭和48年2月、現職校長会との第1回教育懇談会の開催。
- 昭和48年7月、第1回県研修・親睦会開催（八幡平ハイツ）。
- 昭和49年、予算増、事業増に対応して規約改正をし、執行体制を整備確立する。

現在の活動において大きな意味をもつ活動がこの時期から始まった。

昭和51年から昭和61年

会員数が1,000～1,500名に増加。それに伴

い、予算も110万円から257万円となる。

この時期は、活動内容に創意がなされ、運営が活性化される。

■主な活動・出来事

- 昭和51年、会報を年3回発行し、情報交流の強化を図る。
- 事業量を勘案し事務局を独立させる。
- 会報26号において、千葉 寛会長が「本県教育への寄与」の重要性を強調しそれに対する地区会の意見を求めた。その意見を様々な角度から検討・集約し、会報30号において「本県の生涯学習の確立を目指して」として掲載し、会員の積極的対処を期待した。この後、会報32号から48号（昭和61年）まで「生涯学習教室」のページを設け、実践交流を図った。
- 昭和59年から米寿祝賀会を開催した。平成7年までに180名の会員が慶祝された。

この時期は、会員の増加に伴い、財政の好転と安定に支えられ、事業が順調に進み、定着と充実の時期と言える。

昭和62年から平成7年

会員数は1,500～2,000名以上になり、予算額も300万円から525万円の大きな組織となった。

■主な活動・出来事

- 会報が昭和63年から年4回の発行となる。
- 平成4年から会員名簿を全会員に配付した。また、会の活動の見直しのため、会の活動目標、活動方針、活動内容について検討し、平成5年度より実施された。
- 平成5年には本会初めて会員の「社会参加活動実態調査」を実施した。
- 平成7年9月28日、ホテルメトロポリタン盛岡で県教育委員長ほか来賓のご出席のもと、本会結成30周年記念式典及び祝賀会が盛大に開催された。記念事業として、記念誌の発行及び会旗の制定等が行われた。
- 「県退会報」の名称で発行していた会報を平成7年10月10日発行の「創立30周年記念特集(83号)」より「退職校長会だより」と改題した。

- 平成7年11月、23回目の「現職・退職校長会教育懇談会」が行われた。同懇談会は、話題提供等の仕方に工夫を加えながら現在に至っている。
- 平成7年からは、地区活動の充実・発展とブロック内の交流を図るため「ブロック研修会」を実施している。

この時期は、新会員の加入増により事業費が累積し、事業内容が充実した時期である。また、会報の名称変更であったり、「ブロック研修会」を新たに開催したりするなど、30周年を機に改善や創造の時期でもあった。

成13年9月10日、「いわて教育の日」（仮称）制定準備会を開催し、趣意書等について協議した。そして、平成14年9月27日、「いわて教育の日」制定推進協議会が設立された。その後、県への請願、陳情活動を行い、ついに平成17年、県の3月議会最終本会議において全会一致で可決され、公布された。なお、このことについては、40周年誌でその思いや経緯について詳細に記載されているので参照されたい。

この時期は、組織運営面の改善と事業（活動）の充実に力を注いだ時期である。

平成8年から平成17年

会員数は、平成7年度は2,126人、平成16年度は2,439人であった。予算額も約525万円から578万円に増額された。そのため、事業（活動）も年々増加し、内容も充実した。

■主な活動・出来事

- 平成8年9月、「東北地区退職校長会協議会」総会が、本県が当番県となり盛岡市繋の愛真館で開催された。
- 平成9年度は、「役員への感謝規定」を全国連合退職校長会の規定にならい5年以上から4年以上に改めた。また、「会員履歴書」の記入や活用の仕方について検討した。名称を「会員原簿」と改めた。
- 米寿者への慶祝は、平成11年度までは県本部の事業として盛岡で行っていたが、各地区内での親睦・交流をより深めることを考えて平成12年度からは各地区ごとに行うことになった。賀詞、記念品は県本部から各地区へ届けることとした。
- 平成13年から「県研修・親睦会」と「ブロック研修会」の事業の関連を考えたローテーションで開催することとした。その初年度に当たる平成13年度は「県研修・親睦会」を東磐井地区会で、「ブロック研修会」はA、B両ブロックの地区会で実施した。
- 「いわて教育の日」の制定推進については、平成12年度の定期総会において「『教育の日』の推進」が決定された。その後平

平成18年から平成27年

会員数は、平成17年度は2,471人、平成27年度は2,313人であった。財政面では、平成17年度はおよそ599万円、平成27年度はおよそ593万円となった。

■主な活動・出来事

- 県研修・親睦会が開催されるようになったのは昭和48年からである。県下各地区から会員が集い、研修、情報交換、旧交を温める等大変有意義な会となっている。
- 第32回県研修・親睦会山田大会において、本会結成40周年記念式典が県下各地区から会員190名を迎え、盛大に開催された。平成23年度の大会は宮古大会であった。準備万端であったが、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により中止を余儀なくされた。
- ブロック研修会は、地区活動の充実・発展を目的として、平成7年度にスタートした。平成13年度からすべての地区会も1回は実施することとし、前期・後期それぞれ8年間でブロック計画を立て、実施してきた。平成21年は後期スタートの年で、平成28年を目途に全地区で終了することとなる。
- 平成20年10月、盛岡市繋「ホテル紫苑」において、本県が主管となり「東北地区退職校長会協議会」が開催された。来賓含め70名ほどの参加のもと、各県の現状と課

題について報告があり、その後意見交換を行った。

平成26年10月、第42回「東北地区退職校長会協議会」が盛岡市繫「ホテル紫苑」で開催された。「教育情報を交換し、親睦を図り東北地区の教育の振興の資にする」という大会趣旨の全うされた大会となり、本県の運営について「岩手の底力を見た。」との声もいただいた。

- この10年間で最も大きな出来事は東日本大震災の発生とその対応である。これまで経験したことのない大地の揺れと津波は、私たちの何気ない日常をあっという間にのみ込んだ。これにより、本会会員16名が犠牲となった。また、住居の流失、家屋の全壊・半壊が70数名であった。本会として、この大震災にどう立ち向かったのか、詳細は50周年誌に譲るが、平成23年度総会において、「被災地区会の支援及び被災会員への弔意並びに見舞」「被災小中学校の教育活動に対する支援」を掲げ、会員からの義援金募集、財政基金の取り崩しで対応することを決定した。県内会員から寄せられた義援金はもとより全国各地から寄せられた多額の義援金について臨時理事会で配分に関する協議が行われた。
- この震災で犠牲となった方々の御霊を慰めるとともに、津波の悲惨さを後世に伝えたいとの思いから、「鎮魂の歌」を作成し、平成24年度の花巻大会において「鎮魂の歌」の発表、CDへの収録、関係機関への寄贈と配付を行った。
なお、作成の経緯については、50周年誌に詳しく述べられている。
- 平成19年度、岩手県教育委員会から「いじめ相談電話」の対応を引き受けることとした。これは24時間体制でいじめ相談に対応するもので、本会は、勤務時間外、土日、祝日を8名で分担し相談に応じている。
- 退職校長会だよりは昭和41年創刊号が発行されて以来、平成27年3月までに161号が発行されている。

③ 結成50周年以降（平成27（28）年～令和7年）の歩み

元号が平成から令和へと変わった。この10年間、教育をはじめ私たちを取り巻く社会の変化は大変激しいものがあった。その中での本会活動の主なものを記す。

○ 県研修・親睦会

会員の研修と相互の親睦という大きな目的のもと、昭和48年から始まった全県的な研修会も令和6年9月に東日本大震災からの復興・創生をテーマとして開催された

気仙大会で50回の節目を迎えることとなった。

しかしながら、この間、予想だにできなかった新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大は、本会事業にも大きな影響を及ぼした。

令和2年度開催予定の第47回「県研修・親睦会」宮古大会は、令和3年度に延期された。しかし感染拡大は収まらず、やむなく令和3年度開催予定の会も、苦渋の決断のもと中止となった。

令和4年9月、第48回「県研修・親睦会」和賀大会を1日開催で3年ぶりに開催した。

○ ブロック研修会

地区活動の充実・発展を目的として、平成7年度から行われている。平成13年度からは16年間ですべての地区会において開催できるよう実施し、平成28年度をもって全地区会のブロック研修が修了する予定であった。

しかし、平成28年の岩泉地区会を主管として開催予定のEブロック研修会は台風10号による記録的な豪雨に見舞われ、甚大な被害を受けた。そのため、やむなく中止の判断を行った。

岩泉地区会のご努力により台風10号の被災を乗り越え、平成30年9月にEブロック研修会を開催した。

○ 研修事業の新ローテーションの作成

会員数減少に伴う研修事業の見直し、及び新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、研修事業に関り、新しいローテーションを作成した。（「本会の活動」の項参照）

○ 東北地区退職校長会協議会総会

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、中止・延期された岩手大会が令和4年10月に開催された。より一層魅力あふれる退職校長会の確立という私たちの目指すべき指標を明確に認識しあえた。また、この大会では、急遽木村幸治会長が「宰相原敬の魅力」と題して講話を行い、大きな感動と共感の拍手が会場を埋め尽くした。

○ 被災地支援（災害への対応）

この10年を振り返り国内を見渡した時、大きな自然災害の発生が心に残る。

平成28年4月14日、熊本県において震度7の熊本地震が発生し、甚大な被害が報告された。また、令和6年1月1日には、石川県能登半島地方を震源とする同じく震度7の能登半島地震が発生した。この二つの巨大地震により多くの尊い命が奪われ、あたりまえの日常が一瞬のうちに奪われた。私たちは、東日本大震災で筆舌に尽くしがたい被害を受け、希望を見失いかけていた時、多くの支援を寄せていただいたことを決して忘れるものではない。そこで常任理事会並びに理事会に諮り、承認を得ながら募金についての趣意書を作成し、それに基づき、会員から義援金を募り、両県退職校長会に送呈した。

さらに、平成30年7月の西日本豪雨大災害、同年9月北海道胆振地方地震災害発生の際は、宮城・福島・青森県退職校長会へ県本部が働きかけ、広島・岡山・愛媛県と北海道退職校長会へ東北4県がそれぞれお見舞状を差し上げた。

○ 新型コロナウイルス感染症拡大防止

令和2年スタートし、新年度計画の作成に取り掛かるころ新型コロナウイルス感染症の拡大が猛威を振っているという報道が、連日なされていた。そして、首相要請により3月早々には全国的に小中学校が臨時休校となり、学校現場では大きな混乱が生じた。

本会活動においても、この影響は大きく定期総会や各種会議等の中止、各種研修会・懇談会の中止や延期などその対応に大変苦慮した。

令和5年5月より、この新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことにより、感染対策に十二分に配慮しながら通常の活動を行うことができるようになった。

○ 現職校長会との教育懇談会

現職校長会と退職校長会の連携・相互理解を深めるための「現職・退職校長会懇談会」は令和7年度で53回目を迎える。

現職の小中学校長会並びに中学校長会から交互にその時々の教育の課題について話題提供いただいた。しかし、ややマンネリ化の傾向が強くなり、これを打破するため、令和6年度は退職校長会から退職後の暮らしについて話題を提供し、大変好評であった。

○ 退職校長会だよりの発行

昭和41年1月に創刊号が発行されて以来、令和7年1月1日号で200号を超え、3月31日号で201号が発行されている。

また、令和3年には、「特別号—未来につなぐ」を発行した。

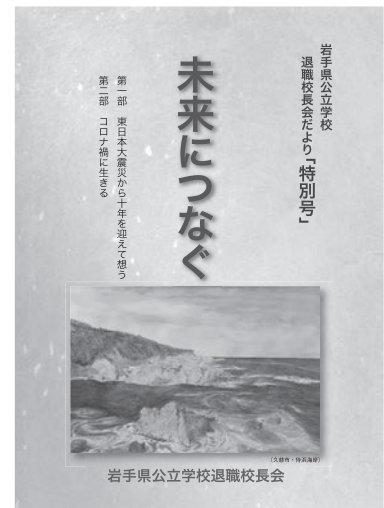
これは、東日本大震災から10年が経過して思うことや新型コロナウイルス感染症拡大の中で会員がどのように過ごしているのか、また、学校現場ではコロナ禍において、児童生徒の命を守るとともに教育の充実をどのように図っておられるかなどを掲載したものである。

会報の発行に際し、貴重な原稿をお寄せいただいた皆様に心より感謝するものである。

○ 「いわて教育の日」

情報誌を発行するなど、事務局として、「いわて教育の日」の啓発普及のため、努めるとともに、条例に基づき県が行う活動への推進並びに協力を目的として活動を進めてきた。

そして、本年度、当協議会は設立20周年を迎える。この10年間の活動をまとめた記念誌を発行し、主な事業と先達の思いや願いを記録に残したい。



④ 歴代会長が振り返るこの10年



本会結成50周年を祝う記念事業の実施と東日本大震災での初の県研修・親睦会「気仙大会」開催

第14代会長 西村 倬郎

会長に就任した平成27年度は、本会が昭和41年秋結成以来ちょうど50年という節目の年にあたりました。

50年の歩みを顧み、活動に力を尽された先輩諸氏と指導支援いただいた関係機関・団体の皆様に感謝し、併せて会の充実発展を誓い、新たな意欲と決意を高める機会として50周年を祝う記念行事を行いました。

第42回岩手県研修・親睦会盛岡大会を「結成50周年記念大会」として開催し、記念講演会（演題「環境世界が培う力」、講師、奥州市江刺御出身の東京学芸大学名誉教授佐島群巳先生）、記念式典及び祝賀会の開催、並びに50周年記念誌の発刊の4事業をいずれも成功裡に終えることができました。

企画立案にあたった副会長兼総務部長佐瀬壽朗さん、研修部長木村幸治さんをはじめ常任理事の皆様、大会を主管して運営万般に力を尽くしてくださった盛岡地区会の皆様200名近い参加者をいただいた各地区会の結束とご協力に心から感謝申し上げます。

「50周年記念誌」は、50年という節目にふさわしい充実した内容とするよう努めました。

特に、平成23年3月11日の東日本大震災については、被災した小中学校の現況、義援金の募集や1,000万円を超えた義援金の配分など本会の支援活動の詳細を、翌24年の「鎮魂の歌」の制定を含め、できるだけ詳しく記述しました。

また、会員の生きがいや社会参加活動、会への願いや要望など、全会員へのアンケート結果をまとめ、今後の会運営に資することにしました。

これまでの会の在り方や今後の展望について

示唆を得るため、地区会長や副会長、事務局長有志による座談会を開き、その記録を載せました。

「結成50周年にふさわしい立派な記念誌だ」と多くの方々からお褒めをいただきました。ありがたいことでした。

会長2年目の平成28年秋。第43回県研修・親睦会「気仙大会」を行いました。

東日本大震災から5年半、復興途上での「気仙大会」でした。本会会員は16名が犠牲になりましたが、うち14名が気仙地区会員でした。

主管していただいた気仙地区会の皆様の中には、床上浸水、家屋の全半壊、消失等甚大な被害を受け、仮設住宅で不便な生活を余儀なくされている方、肉親や親族、隣人、友人知己との突然の別れなど、深い悲しみを抱きながら今日まで歩んでこられた方々が大勢おられました。

そういった中で、大震災後初めての被災地区での県研修・親睦会に取り組んでいただいた佐藤善士会長をはじめ気仙地区会員の全ての皆様のご努力に心からお礼申し上げます。

「気仙大会」が、「いわての復旧・復興、防災教育」と「ふるさと再生」にしっかりつながる誠に意義深い大会になったと確信したのでした。ありがとうございました。

私は、盛岡に住んでいますが気仙で生まれ育ちました。大船渡町の生家は屋根まで水に浸かり全壊、おじ、おばなど親戚5人、綾里中学校の同級生4人を失うなどの背景もあり特に感慨深い大会となりました。



共同体としての多彩な事業の推進 —地区会の結束力と実行力の賜物—

第15代会長 佐瀬 壽朗

本会が結成60周年の節目を迎えたことを心からお祝い申し上げます。

私は平成16年度以降、常任理事、副会長、平成29・30年度には14代西村倬郎会長の後任を務め16代木村幸治会長へ引き継ぎました。

在任中は、本会の目的である「会員の親交の深化、連帯意識の高揚、生きがいの創出、教育振興への貢献」を具現するため、「研修・親睦・貢献」を柱に、県本部と県下16地区会が連携して多彩な事業を推進しました。自然災害や感染症などの困難に見舞われることなく総会決定事項を着実に推進できましたのは、会員の皆様のご支援のお蔭です。

各地区会では、歓迎会や研修会、長寿・叙勲者慶祝会、教育懇談会、会報・会誌発行、現職・退職者交流会、逝去会員への弔意など地区会の実情や会員のニーズに即した創意ある多彩な事業が実施されました。

県（一関東・遠野地区会）やブロック（紫波・釜石・岩泉・二戸地区会）の研修・親睦会では、それぞれの主管地区会が綿密な準備を重ね、各地区会から多数の参加者を迎えての研修と親睦が深められました。

また、各地区会長による理事会、事務局長会議を通じ、情報の共有と連携が図られ、地区会活動の実態や課題も明らかになりました。

理事会での事業の更改事案は、本部から会員のご遺族への弔電対応を各地区会へ移管すること、理事と事務局長の隔年ごとの泊を伴う研修を兼ねた会議を通常の会議とすることでした。いずれも議定いただき、経費の大幅な削減を図ることができました。

事務局長会議では、「県本部事務局との連繋、地区会の運営・連絡・調整を図る命綱であるプ

ロデューサーとしての日頃の創意と在り様」が交流されました。

県本部役員は、盛岡地区会や「いわて教育の日」推進協議会の役員を併任していますので事業の手立てには多くの時間を費やします。副会長・4部常任理事・事務局長の連繋による綿密な事業の推進は見事なものでした。

本会の多彩な事業推進の原動力の源泉は、県本部と各地区会執行部との連携、会員相互の結束力と実行力による協力です。一関西地区の藤堂隆則会長は「会員の協力には感謝しきれない。地域の大先輩方が築き上げて来た組織帰属意識の賜物」と述べておられました。

本会の組織は、企業や官公庁のような機能体ではなく、家族や趣味の会のような共同体です。共同体では目的と構成員の願いが重なります。構成員が「楽しさ」を感じずる基盤となる「心地よさ・満足感・仲間意識・結束感・情報の共有」などが帰属意識を醸成するのではないのでしょうか。機能体では目的達成の実績や効率、人的資質が外部的に厳しく評価されますが、共同体では活動の評価には内部的な温かい「内輪褒め」が優先されます。

本会は、2千名を超える校長経験者によって構成されている共同体であり、結束が固く実行力の高い人材宝庫の集団です。

今後も、共同体としての本会が、会員の結束、16地区会の多彩な事業、関係機関との連繋を根幹に、地域社会と教育界に貢献し続けることを願っています。



コロナ困難の乗り越え —会員の支え・絆に感謝—

第16代会長 木村幸治

私の会長は令和元年度から令和4年度です。平時とコロナでの非常時での活動でした。

1 普通の日常・令和元年度・・・平時

会員と交流し活動出来る普通の日常でした。第46回県研修・親睦会岩手大会は岩手町で仲間との懇談で盛り上がり大成功でした。

2 コロナ異常事態・令和2年度～4年度

令和2年2月頃からコロナが警戒され、コロナウイルス感染症拡大で令和2年4月7日緊急事態宣言（第1回）が発令されました。世界中コロナで異常事態です。国あげてのコロナ感染防止策は、三つの密（密閉空間、密集場所、密接場面）を避ける。不要不急の外出はしない。都道府県をまたいだ移動はしないことが示されました。マスク、うがい、手洗いの励行です。会場には手指の消毒液設置。大変な時代になりました。会員との直接交流をしながらの活動が出来ないのです。

3 コロナ異常事態での活動・・・非常時

県退職校長会は覚悟して方針を決めました。今をコロナ非常時ととらえ、「会員の命と安全を守る」ことを最優先にして活動する。

令和2年度、3年度は「定期総会」や諸事業は中止か延期です。会の原動力の「県の常任理事会」は感染防止対策をして実施し活動案を練りました。県理事会と事務局長会議も感染対策を厳にして実施しました。会員の交流・連携を図る手段として「県会報退職校長会だより」の充実に努めました。地区会では電話等で会員の交流を心がけ、特にも慶弔時を大切にしました。令和3年10月1日県会報「特別号—未来につなぐ」を発行して情報の交流をしました。内容は東日本大震災10年目の節目の年であり「いまだから話せる」こともあるので震災時の学校

のリーダーとしての対処と現況のコロナ禍での生き方です。定期総会中止のため決算、予算、活動方針等が決定できないので会則の一部を改正して総会中止に備えました。令和3年9月14日は延期された第47回県研修・親睦会宮古大会です。会場は宮古市。既に大会要項は出来上がり当日を待つだけでした。8月6日、7日宮古市のデパートでコロナのクラスターが発生し宮古地区会長宮城忠芳氏から急報があり相談し安全と安心を考慮し急遽「中止」と決定しました。中止を全会員（2,224名）にハガキで伝えることにして県常任理事全員で書きました。令和4年5月11日（水）待ち望んでいた定期総会が実施出来ました。総会出席の皆さんの顔がうれしくありがたく感謝でした。諸活動が少しずつ復活しました。9月15日第48回県研修・親睦会和賀大会は北上市さくらホールで開催し会員220名の参加で感激でした。親睦会は中止しました。延期されていた第48回東北退職校長会協議会岩手大会は宿泊はコロナ感染が心配の声を重視し盛岡で一日日程で開催し好評でした。

会の活動は、テレビで毎日発表される岩手県内10地区のコロナ感染者数や特に盛岡の数を分析して会議が可能かを判断しました。活動は柔軟な発想と決断で実施し会員相互の生き方の支えの一助になったことがうれしいです。なおコロナは令和5年5月8日感染症法の5類に移行され種々の制限がなくなりました。普通の日常生活が出来ることのありがたさを実感しました。非常時を乗り越えられたのは役員の努力と会員皆様の信頼・支えのお陰です。衷心より感謝申し上げます。



一戸町 御所野縄文公園

2 本会の活動

2 本会の活動

本会の会則第3条に「本会の目的達成の事業」として次の事項が規定されている。

- 1 会員相互の親睦及び研修に関すること。
- 2 教育の振興及び関係団体の協力に関すること。
- 3 会員の福祉及び慶弔に関すること。
- 4 その他、会の目的達成のため必要な事項。

この規定を踏まえ、これまでの主な活動状況を振り返ることとする。

(1) 研修活動

① 県研修・親睦会

本会の会員研修は、当初、地区会ごとに親睦を兼ねて、それぞれに実施されたが昭和48年度から、全県的規模で開催されるようになり、以後、毎年1回、各地区が輪番に主管することにより運営されてきた。

この目的は、「生涯学習充実のため、岩手県各地の文化や歴史などに触れた研修を行い、地区活動への参加・貢献に努める」となっている。

これまでの県研修・親睦会については、第1回（昭和48年）から第22回（平成6年）までは「10周年記念誌」に、第23回（平成8年）から第31回（平成16年）までは、「40周年記念誌」に、第32回（平成17年）から第42回（平成27年）までは「50周年記念誌」を参照していただきたい。ここでは平成28年以降についてその概要を述べることにする。

第43回【平成28年9月15日（木）・16日（金）】

主 管 気仙地区会 参加者 230名
会 場 大船渡市 大船渡プラザホテル
講 演 「震災時の医療と地域医療」
講 師 （前岩手県立高田病院院長）
国保二又診療所
所長 石木 幹人 氏
見 学 大船渡市立博物館

第44回【平成29年9月14日（木）・15日（金）】

主 管 一関東地区会 参加者 250名
会 場 一関市東山町 東山地域交流センター
講 演 「ILC と人類の未来
～ ILC の目指す物理、そのための
ツール・超電導加速器とは」

講 師 高エネルギー加速器研究機構
教授 早野 仁司 氏
見 学 東北砕石工場
石と賢治のミュージアム

第45回【平成30年10月4日（木）・5日（金）】

主 管 遠野地区会 参加者 203名
会 場 遠野市 遠野市民センター
講 演 「おんな大名・清心尼と遠野」
講 師 遠野文化研究センター
副主幹 前川 さおり 氏
見 学 遠野市立博物館、とおの物語の館、
遠野城下町資料館

第46回【令和元年9月12日（木）・13日（金）】

主 管 岩手地区会 参加者 188名
会 場 雫石町 雫石町中央公民館野菊ホール
雫石プリンスホテル
講 演 「宝塚の華 未完の大女優 園井恵子の生涯」
講 師 岩手県芸術文化協会
会長 柴田 和子 氏
見 学 小岩井農場21棟

第47回【中止】

令和2年度開催予定の宮古大会は、新型コロナウイルス感染症拡大により次年度へ延期とされていた。しかし、令和3年度も新型コロナウイルス感染症の拡大は収束せず、やむを得ず中止とすることと決定した。

第48回【令和4年9月15日（木）】

主 管 和賀地区会 参加者 219名
会 場 北上市文化交流センターさくらホール
講 演 「地方創生時代の北上市の挑戦」
講 師 （前北上市商工部長）
北上オフィスプラザ
専務取締役 石川 明広 氏
見 学 北上市産業支援センター
北上コンピュータアカデミー

第49回【令和5年9月14日（木）・15日（金）】

主 管 一関西地区会 参加者 233名
会 場 一関文化センター・いつくし園
講 演 「世界遺産 平泉・毛越寺」
講 師 毛越寺 貫主 藤里 明久 氏
見 学 毛越寺
平泉世界遺産ガイドンスセンター

第50回【令和6年9月19日(木)・20日(金)】

主 管 気仙地区会 参加者 208名
 会 場 陸前高田市民文化会館(奇跡の一本松ホール) キャピタルホテル1000
 講 演 「この地に生きる
 ～大震災からの復興・創生～」
 講 師 (株)八木澤商店
 代表取締役 河野 通洋 氏
 見 学 陸前高田市立博物館、旧吉田家住宅主屋

② ブロック研修会

ブロック研修は、「豊かな生涯学習社会推進への貢献と生きがいの実現」という本会の活動目標に迫るために平成7年度から新たに計画された生涯学習推進上の重要な事業である。

これは、16地区会を6ブロックに分け、ブロック内の地区会が合同で実施するもので、各地区会研修の充実発展を図るため大事にしている。これを通して、ブロック内の会員相互の交流をより一層はかるものである。

平成27年度以降の研修会の状況は以下のとおりである。

平成27年度

Bブロック(主管 遠野地区会) 69名
 期 日 平成27年7月16日(木)
 研 修 遠野市立博物館
 見 学 遠野市立博物館
 演 題 「清心尼公とその周辺」
 講 師 郷土史研究家 大橋 進 氏
 親睦会 研修会場

Cブロック(主管 一関西地区会) 118名
 期 日 平成27年7月11日(土)
 研 修 いくし園、骨寺村荘園交流館
 演 題 「中尊寺領骨寺村の
 重要文化的景観について」
 講 師 一関市博物館
 館長 入間田 宣夫 氏
 移動研修 骨寺村荘園交流館、荘園遺跡めぐり
 親睦会 いくし園

平成28年度

Aブロック(主管 岩手地区会) 76名
 期 日 平成28年10月21日(金)
 研 修 雫石町 野菊ホール
 演 題 「いま考える 絵本のこと」
 講 師 末盛 千枝子 氏
 親睦会 研修会場

Eブロック研修会(岩泉地区会)
 平成28年10月11日(火)
 台風10号による甚大な被害のため中止

平成29年度

Dブロック(主管 釜石地区会) 50名
 期 日 平成29年7月19日(水)
 研 修 釜石市教育センター
 演 題 「幕末の一揆の特色」
 講 師 岩手県文化財保護審議会
 顧問 金野 静一 氏
 親睦会 研修会場

Aブロック(主管 紫波地区会) 112名
 期 日 平成29年8月19日(土)
 研 修 オガールプラザ紫波町情報交流館
 演 題 「佐比内金山・
 隠れ切支丹物語」
 講 師 佐比内公民館
 館長 山下 研悦 氏
 親睦会 オガールベース1階

平成30年度

Eブロック(主管 岩泉地区会) 48名
 期 日 平成30年9月20日(木)
 研 修 龍泉洞温泉ホテル
 演 題 「龍泉洞の魅力について」
 講 師 岩手県立博物館
 学芸員 渡辺 修二 氏
 親睦会 研修会場

Fブロック(主管 二戸地区会) 56名
 期 日 平成30年10月23日(火)
 研 修 御所野縄文博物館
 演 題 「もうすぐ世界遺産
 ～御所野遺跡の縄文文化～」
 講 師 御所野縄文博物館
 館長 高田 和徳 氏
 親睦会 二戸ロイヤルパレスホテル

令和元年度

Bブロック(主管 和賀地区会) 78名
 期 日 令和元年7月18日(木)
 研 修 岩手中部クリーンセンター及び藤根地区交流センター
 演 題 「最北の特攻出撃基地～岩手陸軍飛行場(後藤野飛行場)の足あと～」
 講 師 北上平和記念展示館
 学芸員 高橋 源英 氏
 親睦会 藤根地区交流センター

- Fブロック（主管 九戸地区会）48名
 期 日 令和元年7月20日（土）
 研 修 ひろの水産会館
 演 題 「栽培漁業と
 ウニ種苗生産について」
 講 師 岩手県栽培漁業協会種市事業所
 所長 箱石 和廣 氏
 親睦会 アグリパークおおさわ

令和2年度【延期】

令和2年度開催予定のBブロック遠野地区会、Cブロック一関西地区会は準備万端だったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により次年度へ延期とした。

令和3年度【中止】

延期されていた、Bブロック遠野地区会、Cブロック一関西地区会は新型コロナウイルス感染症の拡大は収束せず、やむを得ず中止とすることと決定した。

令和4年度

- Aブロック研修会（主管 盛岡地区会）30名
 期 日 令和4年7月16日（土）
 研 修 岩手県立博物館
 演 題 「雑学のススメ」（笑いと頭の体操
 ～中高年の皆さんと一緒に考える
 日本語と名言～）
 講 師 岩手県立博物館
 館長 高橋 廣至 氏

- Dブロック研修会（主管 気仙地区会）62名
 期 日 令和4年7月22日（金）
 研 修 陸前高田市コミュニティーホール
 及び陸前高田市立博物館
 演 題 「蘇る博物館」
 講 師 陸前高田市立博物館
 副主幹兼主任学芸員 熊谷 賢 氏

令和5年度

- Cブロック研修会（主管 一関西地区）
 県研修・親睦会「一関西大会」と兼ねる。

令和6年度

- Aブロック研修会（主管 紫波地区会）125名
 期 日 令和6年8月24日（土）
 研 修 矢巾町文化会館（田園ホール）
 演 題 「健康で長生きするために」
 講 師 岩手医科大学
 学長 小笠原 邦昭 氏
 アトラクション 田園ホール混声合唱団

③ 研修事業の新ローテーションについて

年々会員数は減少の傾向にあり、このことは取りも直さず研修事業見直しを余儀なくされ、令和元年の理事会において新しいローテーションが承認された。

しかし、新型コロナウイルス感染症拡大の観点から全ての研修事業が延期されたこともあり、再度見直しをした結果、今後のローテーションを事務局長会議で承認をいただき、理事会において最終決定した。

「研修と親睦」は一体であり、私たちの重要な事業である。今後も様々な課題を乗り越え、全会員を挙げて研修に取り組んでいくことにより、私たちの生きがいにしたいものである。

ローテーション作成にあたっての基本的考え方と新ローテーションは以下のとおりである。

【ローテーション作成の基本的考え方】

- ① 退職校長会の目的は、本会結成当初からの「研修と親睦」を踏襲する。
- ② 所属地区会の構成は従来の6ブロック16地区会とする。（右表を参照）
- ③ 県研修・主管は、会員数100名以上の地区会が行う。
- ④ ブロック研修会の主管は、会員数50名以上の地区会が行うことを原則とするが、50名未満の地区会の主管を妨げるものではなくブロック内で話し合い計画実施する。
- ⑤ 県研修・親睦会とブロック研修会の主管地区会・ブロックは2年続けない。
- ⑥ 退職校長会の周年行事は、盛岡地区会が担当し、その年度の県研修・親睦会、ブロック研修会は実施しない。

各地区の会員数（県会報183号参照）

Aブロック	Bブロック	Cブロック	Dブロック	Eブロック	Fブロック
盛岡 422	花巻 189	胆江 267	釜石 58	山田 22	九戸 88
岩手 214	遠野 61	一関西 148	気仙 172	宮古 111	二戸 130
紫波 82	和賀 179	一関東 129		岩泉 11	

県研修・親睦会及びブロック研修会のローテーション（令和5年度より）（県会報183号参照）

年度	行事等	県研修	ブロック研修（ ）は県研修					
			A	B	C	D	E	F
3	東北大会（盛岡）	宮古		遠野	一関西		(宮古)	
4		和賀	盛岡	(和賀)		気仙		
5		一関西			(一関西)			
6		気仙	紫波			(気仙)	山田	
7	60周年（盛岡）	盛岡	(盛岡)					
8		二戸			一関東			(二戸)
9	東北大会（盛岡）	花巻		(花巻)		釜石		
10		胆江			(胆江)		岩泉	九戸
11		岩手	(岩手)	遠野				
12		一関東			(一関東)	気仙		
13		宮古					(宮古)	二戸
14		和賀	紫波	(和賀)				

研修事業の新ローテーションは「退職校長会だより」183号においてすでに提示されていたが、コロナ禍による研修事業の延期・中止により、ローテーションの一部変更が承認された。基本的考え方の変更はない。（県会報189号参照）（※印は変更）

年度	行事等	県研修	ブロック研修（ ）は県研修					
			A	B	C	D	E	F
3	新型コロナウイルス感染症拡大のため県研修・ブロック研修中止 ※							
4	東北大会（盛岡）※	和賀	盛岡	(和賀)		気仙		
5		一関西			(一関西)			
6		気仙	紫波			(気仙)	山田	
7	60周年（盛岡）	盛岡	(盛岡)					
8		二戸			一関東			(二戸)
9		花巻		(花巻)		釜石		
10	東北大会（盛岡）※	胆江			(胆江)		岩泉	九戸
11		岩手	(岩手)	遠野				
12		一関東			(一関東)	気仙		
13		宮古					(宮古)	二戸
14		和賀	紫波	(和賀)				

④ 現職校長会との教育懇談会

現職の「小・中学校長会」との懇談会を昭和48年2月4日を第1回として継続して開催してきた。平成27年以降について紹介する。

第43回【平成27年8月28日（金）】

会場 サンセール盛岡
参加者 71名（小学校長会17名、中学校長会16名、退職校長会38名）
話題提供 岩手県中学校長会
盛岡市立城西中学校長
平澤 千麻子 氏
テーマ 「東日本大震災から四年半の歩み」

第44回【平成28年8月29日（月）】

会場 サンセール盛岡
参加者 69名（小学校長会14名、中学校長会18名、退職校長会37名）
話題提供 岩手県小学校長会
盛岡市立見前小学校長
（前釜石市立釜石小学校長）
加藤 孔子 氏
テーマ 「岩手の復興～未来を担う子供達のために～」

第45回【平成29年9月1日（金）】

会場 サンセール盛岡
参加者 74名（小学校長会17名、中学校長会23名、退職校長会34名）
話題提供 岩手県中学校長会
盛岡市立厨川中学校長
佐藤 精晋 氏
テーマ 「中学校教育の現状と課題」

第46回【平成30年9月7日（金）】

会場 サンセール盛岡
参加者 64名（小学校長会16名、中学校長会16名、退職校長会32名）
話題提供 岩手県小学校長会
盛岡市立仁王小学校長
仁昌寺 真一 氏
テーマ 「岩手県小学校長会調査研究より～教育を担う教職員の資質能力と協働意識を高める学校経営の推進～」

第47回【令和元年8月28日（水）】

会場 サンセール盛岡
参加者 67名（小学校長会15名、中学校長会19名、退職校長会33名）
話題提供 岩手県中学校長会

盛岡市立北松園中学校長

村上 淳哉 氏

テーマ「中学校教育の現状と課題～県中学校長会による諸調査から～」

第48回【令和2年】中止

新型コロナウイルス感染拡大防止対策を踏まえ、本年度は中止となった。しかし、現職の現状を知り、会員に周知するため、研究内容の概要を会報に掲載することとした。

話題提供 岩手県小学校長会
盛岡市立仙北小学校長
遠藤 耕生 氏
テーマ「業務改善による教員の負担軽減と教育の質の向上」

第49回【令和3年】中止

新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から本年度も中止となった。

東北地区中学校長研究大会において紙上発表されたものを会報に掲載することとした。

話題提供 岩手県中学校長会
釜石市立釜石東中学校長
米 慎司 氏
テーマ「郷土に愛着と誇りを持ち、主体的に夢に向かっていく児童生徒の育成～「いのちの教育」と「ふるさと科」の実践を通して～」

第50回【令和4年10月24日（月）】

会場 サンセール盛岡
参加者 58名（小学校長会17名、中学校長会14名、退職校長会27名）
話題提供 岩手県小学校長会
盛岡市立好摩小学校長
吉田 久美子 氏
テーマ「東日本大震災からの復興10年～子どもたちに夢と希望を～」

第51回【令和5年9月20日（水）】

会場 サンセール盛岡
参加者 52名（小学校長会15名、中学校長会13名、退職校長会24名）
話題提供 岩手県中学校長会
盛岡市立下橋中学校長
泉澤 毅 氏
テーマ「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく力を育むための学校経営の改善・充実に向けて」

第52回【令和6年12月4日(水)】

会場 サンセール盛岡
 参加者 61名(小学校長会17名、中学校長会18名、退職校長会 26名)
 話題提供①岩手県公立学校退職校長会副会長 盛岡善意ガイドの会 菅原 壽 氏
 テーマ「人生いたる所に晴山あり」
 話題提供②滝沢市教育委員会教育委員 盛岡市保健福祉部
 長寿社会生きがい推進係 柳村 榮 氏
 テーマ「現在の仕事とくらし、そして、生きがい」

出席者 長会及び地区会の実践を通して」
 佐瀬会長、櫻糰総務部長、木村研修部長、高橋事務局長

⑤ 東北地区退職校長会協議会

東北地区退職校長会協議会は昭和48年9月に結成された。結成の経緯等の詳細は50年誌を参照されたい。ここでは、平成27年以降の概要を記載する。
 なお、発表者、発表題は岩手県の代表者のみ記し、他県は割愛する。

第43回【平成27年10月8日(木)～9日(金)】

会場 仙台市ホテル白萩
 協議題 「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」
 発表者 三浦 晃 総務部員
 発表題 「組織の活性化を図るための今日的課題～アンケート調査から見えるもの～」
 出席者 西村会長、佐瀬副会長・総務部長 櫻糰厚生部長、三浦総務部員、菊池事務局長

第44回【平成28年10月13日(木)～14日(金)】

会場 福島市ホテルグリーンパレス
 協議題 「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」
 発表者 岩手県の発表割当 なし
 出席者 西村会長、佐瀬副会長 櫻糰総務部長、菊池事務局長

第45回【平成29年10月12日(木)～13日(金)】

会場 山形市山形国際ホテル
 協議題 「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」
 発表者 木村 幸治 研修部長
 発表題 「会員との繋がりや社会との係りを重視し、主体的に取り組む県退職校

第46回【平成30年10月18日(木)～19日(金)】

会場 秋田市秋田ビューホテル
 協議題 「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」
 発表者 岩手県の発表割当 なし
 出席者 佐瀬会長、木村研修部長、高橋事務局長

第47回【令和元年10月10日(木)～11日(金)】

会場 青森市
 協議題 「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」
 発表者 小水内邦子 研修部員
 発表題 『『鎮魂の歌』の制作と会報の発行』
 出席者 木村会長、吉川研修部長、熊谷厚生部長 菅原経理部長、小水内研修部員、高橋事務局長

第48回【令和2年】

※新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のため中止

第48回【令和3年】岩手大会

※新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のため中止(次年度へ延期)

第48回【令和4年10月13日(木)】

会場 盛岡市盛岡グランドホテル
 協議題 「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」
 発表者 岩手県の発表割当 なし
 ※当日急遽全連退会長欠席のため、木村幸治岩手県退職校長会会長が「宰相原敬の魅力」と題して講話を行った。

第49回【令和5年10月12日(木)】

会場 仙台市ホテル白萩
 協議題 「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」
 発表者 篠田 宜道 研修部長
 発表題 「岩手県公立学校退職校長会会員数の動向と盛岡地区会の取り組み」
 出席者 吉川会長、菅原副会長、澤村総務部長 篠田研修部長、舘澤事務局長

第50回【令和6年10月8日～9日】

会場 福島市ホテルグリーンパレス
 協議題 「充実した生き方や地域の教育・文化の向上に資する活動はどうあればよいか」
 発表者 岩手県の発表割当 なし
 出席者 吉川会長、菅原副会長、澤村総務部長
 篠田研修部長、館澤事務局長

平成30年3月1日（木）愛真館

○第2回事務局長会議と併催
 演題 「子育て、企業研修で人気のアンガーマネジメントとは～衝動・思考・行動のセルフコントロール～」
 講師 日本アンガーマネジメント協会
 アンガーマネジメントファシリテーター 高橋 昭三 氏

② 福利厚生活動

① 活動の概要

本会は、結成以来、全国連合退職校長会（全連退）と連携し、恩給、年金改善の陳情、要望を政府関係省庁に繰り返し行うとともに叙位叙勲の拡大運動も推進してきた。

さらに、慶弔に関連して、上寿者（満百歳）、並びに米寿者に対する本会からの賀詞と記念品、全連退からの賀詞の贈呈、叙勲者への祝詞、逝去者に対する弔辞並びに弔電の奉呈などそれぞれに祝意及び弔意を表明するなど福利厚生活動を進めている。

また、新型コロナウイルス感染症の蔓延防止のため中断したことはあったが、親睦会を研修会等に併催し、会員相互の親睦を図ることや役員永年の功労に対しては「感謝規定」により感謝状を贈り、謝意を表すことなど会員の親睦、福利厚生増進に努めている。

会員の「履歴書」整備については、「会員原簿」整備に改め、各地区ごとに会員より提出されたものを保管している。

慶弔に際しては、原簿がスムーズに活用できるように各地区において工夫されている。

② 講演会

平成28年3月10日（木）愛真館

○第2回事務局長会議と併催
 演題 「後期高齢者医療制度を学ぼう」
 講師 盛岡市健康保険課
 高齢者医療係長
 佐々木 勢依子 氏

平成29年2月16日（木）愛真館

○第2回理事会と併催
 演題 「更生保護活動に全力、保護司について」
 講師 岩手県公立学校退職校長会
 研修部長 木村 幸治 氏

※なお、これ以降は諸般の事情により開催していない。

③ 会報の発行

本会結成は、昭和40年（1965年）10月23日である。その3か月後の昭和41年1月「岩手県公立学校退職校長会会報」の記念すべき創刊号がB5判4段組み8ページで創刊され、現在に受け継がれている。

会報発行の使命は、50周年誌に次のように記載されている。

- ・会務の状況を会員に詳細な情報として届けること。
- ・会員には、会報を介して情報を共有し、交流の手がかりとなること。
- ・他の関係機関・団体に提供し活用され、連携が密になること。
- ・会の活動の実態を記録し、永く残し、それを紐解く後代には貴重な資料となること。

この使命を心に抱き、会員皆に愛され、会員相互の交流の場となるべく年4回の会報の発行に取り組んできている。会報は、本会事業の推進、維持発展に重要な役割を果たしている。

令和5年度からは、「わたしの3・11」のコーナーを特設し、東日本大震災の記憶を風化させないように工夫している。

なお、会報に関する詳細は、50周年誌を参照されたい。

④ 理事会・事務局長会議

① 理事会の構成と任務

各地区の会長及び会長委嘱の者(常任理事)が出席する理事会は、総会に次ぐ議決機関である。

理事会の任務は、第13条に「理事会は毎年1回以上開き、総会に付議すべき事項、総会から委任された事項について処理する」こと、第15条に「会則の実施に必要な規定等は、理事会でこれを定めることができる」と規定されている。

県内16地区の会長である理事と会長委嘱の理事(常任理事)が構成する理事会は、年間2回(通常は4月と2月)会議を開催し、本会の目的達成に係る事業の一切の会務を審議し、諸事業の円滑な進行を図るとともにその過程や結果を評価する任務を負っている。

② 常任理事

本会会則第7条「常任理事は、理事の中から若干名を会長が委嘱する」とあり、第8条においては「常任理事は、会務を分担し、その執行にあたる」と規定されている。

会長からの委嘱によって常任理事に就任し、総務部、研修部、厚生部、経理部、事務局に所属し会務を処理している。

常任理事会は、会長の統轄によって年間6回程度開催される。総会決定事項である各部担当事業を協議し具体化し、常任理事の共通理解を図りながら処理している。

常任理事会に先立ち、細やかな手立てを要する事案については、臨時に部長会を開催し、事業内容を整序し、常任理事会に参加している。

東北地区退職校長会協議会の開催や周年事業の推進などの定例外の重要な案件については、常任理事が実行委員会を組織し、推進している。

また、常任理事は、「いわて教育の日」推進協議会の事務局員、教育委員会からの委託事業、他団体から要請されるいわゆる割り当て役員等も担当し関係機関団体等との連携の役割を果たしている。

③ 臨時理事会

理事会は総会に次ぐ議決機関である。しかしながら、緊急を要する重大事案については、

臨時理事会を開催し、対応することとしている。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災においては、本会を開催し、対応に当たった経緯がある。また、令和6年8月に結成60周年記念大会に関り、本会を開催した。

④ 事務局長

本会の事務局を担う事務局長並びに事務局次長は、理事の中から会長が委嘱している。

本会の運営にかかる諸事業の円滑な推進に向けて、会長の命を受け、県内各地区会をはじめ、東北・全国連合退職校長会並びに、県内の各機関・諸団体との連携を図っている。

事務局は本会活動の中核的役割を果たし、事務局長はいわば会の円滑な運営を図る黒子役である。

⑤ 事務局長会議

本会議は、例年、8月と3月の年間2回各地区事務局長を招集し開催されている。この2回の会議は先立って開催される理事会において審議された案件の詳細について、各地区事務局長が共通の認識のもと、事業を円滑に推進していくことが大きな目的である。

なお、規約上、本会議の規定はないが、その役割は非常に重要である。

⑤ 関係機関・団体との連携

本会会則第3条第2項には、本会の目的を達成するための事業として、「教育の振興及び関係団体との協力に関すること」が規定され、各年度の基本方針並びに事業の重点の1項目に「教育関係機関・団体等との連携・協力を密にし、諸事業の円滑な運営を図る」ことを掲げ、今日に至っている。

以下、主な事例を紹介する。

① 岩手県教育委員会

本会は、県教育長による(代理出席含む)本会総会並びに周年行事、祝賀会等へのご臨席及び祝辞を頂いている。

平成7年度から16年度までは「県教育委員会との懇談会」を開催し、親しくご指導を頂いてきたが、諸般の事情により、以降は開催されていない。

「いわて教育の日」は、本会をはじめ関係

者の並々ならぬ努力により、平成17年3月「いわて教育の日に関する条例」が制定された。その後、本会がその中心となり、「いわて教育の日推進協議会」が組織され、その主な事業である「いわて教育の日のつどい」に協力するとともに啓発普及も行い、事業の充実発展に努めている。

② 市町村教育委員会

本会各地区会は、当該市町村教育委員会からの支援、指導助言を受け、ブロック研修や県研修などの諸事業の円滑な運営が図られている。

③ 関係団体との連携

本会は、岩手県小学校長会並びに中学校長会をはじめ、多くの関係団体との連携のもと諸事業を推進している。

関係団体の総会や会議への出席はもちろんのこと、中でも、現職両校長会とは、毎年幹部会を開催し、今、学校が抱えている教育課題や取り組みについて、お互いの現状を紹介し合い、意見交換をしている。大変意義深い会となっている。

⑥ 会費納入免除会員について

これに関しては、50周年誌においてもこの問題が取り上げられたが、その後も、いろいろな場で話題となり、議論の対象となってきた。そこで、問題の重要性に鑑み確認する意味で再掲することとする。

① 問題の所在と経緯

本会の理事会、事務局長会議並びに各地区会において会員の会費納入状況、会員資格と会員の健康状態や生活環境等との関わりについて次のようなことが話題となった。

- ・病気・高齢・介護施設入所等の増加
- ・日常の活動や意思表示に極度の不自由を訴える会員の増加
- ・会員本人や家族からの会員辞退の申し出
- ・班長が会費徴収を躊躇するような状態（生活環境・年齢・健康）
- ・会員の「資格、会費納入、福利厚生」等は全連退・県・地区会とも関連しているので、地区会のみ判断が困難

このような状況から、平成26年度総会において、「会費納入免除会員」について、次のように承認された。

② 会費納入免除会員の要件

会員の日常の行動や意思の伝達等、心身の状態に極度の不自由があり、本人や家族からの申し出が妥当であると地区会が認めた会員であること。

③ 会費納入免除会員の権利等

ア 全国連合退職校長会報や本会の会報等の発行物の配付、並びに本会主催の県行事等への参加は、原則できないものとする。

ただし、全国連合退職校長会及び本会からの慶弔については、例え免除会員であっても同様に対応するものとする。

イ 地区会が発行する会報等の配付及び慶弔や福利・厚生に関する事項等については、地区会において判断するものとする。

④ 会費免除の実施に当たって

ア 平成27年度を初年度として実施する。

イ 会費納入免除会員に関する事項は、内規として位置付け、規約には載せない。

ウ 会費納入免除会員であっても本会会員名簿に掲載する。

⑤ 確認事項

平成26年度総会決定後、実態調査をし、経理上、当該年度は運営に支障がないことから本格実施は平成27年度からとする。

⑦ 「いわて教育の日」の推進活動

このことについて、制定へ向けての取組の経緯が本会40周年記念誌に詳細に述べられているので、是非、参照願いたい。

いずれ、平成14年度に「教育の日」制定推進室を本会に設置して以降、本会が中核となった設置へ向けての活動は急速に盛り上がりを見せた。そして、ついに念願の「いわて教育の日」県条例が制定され、平成17年4月1日施行となった。

① 推進協議会の設立

「いわて教育の日」県条例制定を受け、会の名称を「いわて教育の日」推進協議会と改め現在に至っている。本会は、その後も事務局となり、「いわて教育の日」の啓発普及に努めるとともに、条例に基づき県が行う活動の推進並びに協力を目的として活動を進めてきた。そして、本年度、当協議会設立20周年を迎える。

② 情報紙の概要

啓発普及のために発行してきた情報紙の主な内容について、その概要を平成27年度以降紹介する。

平成27年度

- ・情報紙第22号（平成27年8月10日）
 - 小嶋 久人会長挨拶
 - 構成員全体会議報告
 - 設立10周年記念事業の実施
 - いわて教育の日に寄せて（2名）
 - 他県の「教育の日」実践例
—沖縄県那覇市「なは教育の日」—
 - 「いわて教育の日」のつどい開催案内
- ・情報紙第23号（平成28年1月15日）
 - 設立10周年記念式典
 - 記念講演
演 題 「宮沢賢治からはじまる幸福論」
講 師 岩手県知事 達増 拓也 氏
 - 第1部 開会行事
 - 第2部 児童による発表
・田野畑村立田野畑小学校
郷土芸能菅窪鹿踊
 - 第3部 記念講演
演 題 未来に生きる子どもたちのために～これからの岩手の教育に期待すること～
講 師 独立行政法人日本学術振興会 理事長 安西 祐一郎 氏
 - 第4部 記念演奏
「イーハトーヴ交響曲」

平成28年度

- ・情報紙第24号（平成28年8月10日）
 - 小嶋 久人会長挨拶

- 構成員全体会議報告
- 設立10周年記念事業を振り返って
- 教育に寄せて（2名）
- 他県の「教育の日」実践例—新潟県上越市「上越市教育の日」—
- 「いわて教育の日」のつどい開催案内
- ・情報紙第25号（平成28年12月20日）
 - 「いわて教育の日」のつどい内容報告
第1部 開会行事及び教育表彰
第2部 児童生徒による発表
・盛岡市立山王小学校3年生
・盛岡誠桜高等学校バトントワリング部
第3部 パネルディスカッション
テーマ 国体開催を契機としたスポーツ振興について
パネリスト 3名
 - つどいに参加して（2名）
 - 学校訪問（大槌町立大槌学園）
 - 他県の「教育の日」実践例
埼玉県教育委員会

平成29年度

- ・情報紙第26号（平成29年10月1日）
 - 佐瀬 壽朗会長挨拶
 - 構成員全体会議報告
 - 特別寄稿
「帆にむけて 風をおくる」
盛岡市教育振興推進委員会 会長 星野 勝利 氏
 - 他県の「教育の日」実践例
—広島県「ひろしま教育の日」—
 - 「いわて教育の日」のつどい開催案内
- ・情報紙第27号（平成29年12月20日）
 - 「いわて教育の日」のつどい内容報告
第1部 開会行事及び教育表彰
第2部 生徒による発表
・北上市立上野中学校吹奏楽部
・岩手県立北上翔南高等学校 鬼剣舞部
第3部 講演
演 題 「これからの人間教育と学力の育成～我々の世界と我々の世界を生きる力を育む～」
講 師 元兵庫教育大学学長・中央審議会副会長 梶田 叡一 氏



- つどいに参加して（3名）
- 学校訪問
（陸前高田市立高田東中学校）

平成30年度

- ・情報紙第28号（平成30年10月1日）
 - 佐瀬 壽朗会長挨拶
 - 構成員全体会議報告
 - 教育に寄せる思い（2名）
 - 新施設訪問（新岩手教育会館）
 - 「いわて教育の日」のつどい開催案内
- ・情報紙第29号（平成30年12月20日）
 - 「いわて教育の日」のつどい内容報告
 - 第1部 開会行事及び教育表彰
 - 第2部 児童生徒による発表
 - ・北上市立黒沢尻北小学校合唱部
 - ・岩手県立花巻農業高等学校鹿踊り部
 - 第3部 講演
 - 演 題 「子どものために手をつなぐ～いま、親そして大人ができること～」
 - 講 師 大阪大学大学院教授・教育学博士
小野田 正利 氏
 - つどいに参加して（3名）
 - 学校訪問（山田町立船越小学校）
 - 他県の「教育の日」実践例
一大分県杵築市
「杵築市教育立市宣言」一

令和元年度

- ・情報紙第30号（令和元年10月1日）
 - 木村 幸治会長挨拶
 - 構成員全体会議報告
 - 教育に寄せる思い（2名）
 - 新施設訪問（うのすまい・トモス）
 - 「いわて教育の日」のつどい開催案内
- ・情報紙第31号（令和元年12月25日）
 - 「いわて教育の日」のつどい内容報告
 - 第1部 開会行事及び教育表彰
 - 第2部 生徒による発表
 - ・矢巾町立矢巾北中学校特設合唱部
 - ・岩手県立久慈高等学校マンドリン部

- 第3部 講演
 - 演 題 「働きがいがあり、かつ、働きやすい学校づくりに向けて」
 - 講 師 教育研究家・学校業務改善アドバイザー
妹尾 昌俊 氏

- つどいに参加して（3名）
- 学校訪問（岩手県立葛巻高等学校）
- 他県の「教育の日」実践例
一長野県「信州“教育の日”」一

令和2年度

（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため児童生徒の発表は行わない）

- ・情報紙第32号（令和2年10月1日）
 - 木村 幸治会長挨拶
 - 構成員全体会議報告（書面表決）
 - 教育に寄せる思い（6名）
 - 「いわて教育の日」のつどい開催案内
- ・情報紙第33号（令和2年12月20日）
 - 「いわて教育の日」のつどい内容報告
 - 第1部 開会行事及び教育表彰
 - 第2部 講演
 - 演 題 「学校教育における情報化の推進」
 - 講 師 一般財団法人日本教育情報化振興会名誉会長・東京工業大学名誉教授
赤堀 侃司 氏
 - つどいに参加して（3名）
 - 学校訪問（岩手県立高田高等学校）
 - 他県の「教育の日」実践例
一愛媛県「えひめ教育の日」一

令和3年度

（新型コロナウイルス感染症拡大防止のため児童生徒の発表は行わない）

- ・情報紙第34号（令和3年10月1日）
 - 木村 幸治会長挨拶
 - 構成員全体会議報告（書面表決）
 - 「いわて教育の日」に寄せて（5名）
 - 「いわて教育の日」のつどい開催案内
- ・情報紙第35号（令和3年12月20日）
 - 「いわて教育の日」のつどい内容報告
 - 第1部 開会行事及び教育表彰
 - 第2部 講演

演 題 「Society 5.0において目指すべき教育の方向性と学校像」

講 師 東京大学公共政策大学院・慶應義塾大学政策・メディア研究科教授

鈴木 寛 氏

- つどいに参加して（3名）
- 寄稿 「八幡平市におけるCSの導入について」
- 他県の「教育の日」実践例
—沖縄県那覇市「なは教育の日」—

令和4年度

・情報紙第36号（令和4年10月1日）

- 木村 幸治会長挨拶
- 構成員全体会議報告
- 「いわて教育の日」に寄せて（4名）
- 新施設訪問（陸前高田市立博物館）
- 構成団体紹介
- 「いわて教育の日」のつどい開催案内

・情報紙第37号（令和4年12月1日）

- 「いわて教育の日」のつどい内容報告
- 第1部 開会行事及び教育表彰
- 第2部 児童生徒による発表
 - ・盛岡市立城北小学校からまつ吹奏楽団
 - ・岩手県立岩泉高等学校郷土芸能同好会
- 第3部 記念講演
- 演 題 「子どもの事実から学校づくりを問い直しませんか」～「子どもを育てる学校」から「子どもが育つ学校」に～
- 講 師 大阪市立大空小学校 初代校長 木村 泰子 氏
- つどいに参加して（3名）
- 他県の「教育の日」実践例
—宮城県「みやぎ教育の日」—

令和5年度

・情報紙第38号（令和5年10月1日）

- 吉川 健次会長挨拶
- 構成員全体会議報告
- 「いわて教育の日」に寄せて（4名）
- 寄稿 滝沢市版コミュニティースクール～ 真の学校の応援団を目指して～

○ 構成団体紹介

○ 「いわて教育の日」のつどい開催案内

・情報紙第39号（令和5年12月20日）

- 「いわて教育の日」のつどい内容報告
- 第1部 開会行事及び教育表彰
- 第2部 生徒による発表
 - ・岩手県立盛岡第二高等学校軽音楽部 all bloom
 - ・一関市立磐井中学校合唱部
- 第3部 記念講演
- 演 題 「未来に向けた教育の在り方について」
- 講 師 独立行政法人教職員支援機構理事長・中央審議会会長 荒瀬 克己 氏
- つどいに参加して（3名）
- 学校紹介
(紫波町立西の杜小学校)

令和6年度

・情報紙第40号（令和6年10月1日）

- 吉川 健次会長挨拶
- 構成員全体会議報告
- 「いわて教育の日」に寄せて（3名）
- 学校紹介（岩手県立大槌高等学校）
- 構成団体紹介
- 「いわて教育の日」のつどい開催案内

・情報紙第41号（令和6年12月20日）

- 「いわて教育の日」のつどい内容報告
- 第1部 開会行事及び教育表彰
- 第2部 児童生徒による発表
 - ・盛岡市立山岸小学校合唱クラブ
 - ・岩手県立宮古水産高等学校太鼓部「潮騒」
- 第3部 記念講演
- 演 題 「子どもの育つ姿と授業・学校のあり方」
- 講 師 国立教育政策研究所研究企画開発部 総括研究官 千々布 敏弥 氏
- 教育表彰受賞者から（3名）
- 他県の「教育の日」実践例
—石川県「いしかわ教育の日」—

⑧ 新型コロナウイルス流行禍での会の運営

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、令和元年（2019年）12月に中国武漢市で一例目の感染者が報告されてからわずか数カ月ほどの間に世界的な流行となった。

日本国内においては令和2年（2020年）1月15日に初の感染者が確認された。新型コロナウイルス感染症が5類感染症に移行となった直後令和5年（2023年）5月9日の国内累積感染者は33,803,572人、累積死者は74,694人となっている。（厚生労働省まとめ）

① 国内の様子

- ア 令和2年（2020年）1月15日
世界保健機関（WHO）に症例の発生を報告
- イ 2月25日
政府対策本部が「新型コロナウイルス感染症対策の基本方針」を決定
- ウ 4月7日
東京・神奈川など7都道府県に緊急事態宣言を行い、4月16日に全国に拡大
 - ・対象の都道府県知事は、住民に対し、生活の維持に必要な場合を除いて外出の自粛をはじめ、感染防止に必要な協力を要請できる。学校の休校や人々が集まる施設の使用制限などの指示や要請ができる。
 - ・5月14日に北海道・東京など8都道府県を除く39県で緊急事態宣言を解除
 - ・感染には波があり、以下のような感染のピークが報告され、感染者の多い地域では緊急事態宣言が繰り返し出された。

第一波	2020年3月下旬～7月上旬
第二波	7月下旬～11月中旬
第三波	11月中旬～2021年3月下旬
第四波	2021年3月下旬～5月上旬
第五波	5月上旬～2022年1月上旬
- エ 令和4年（2022年）8月31日
国が感染者の全数把握について、自治体の判断で見直すことができることを決定
- オ 令和5年（2023年）3月13日
マスク着用の考え方について、個人の判断に委ねるよう見直し
- カ 令和5年（2023年）5月8日
新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行

② 本県の感染状況及び感染症対策の概要

県では令和2年2月に「岩手県新型コロナウイルス感染症対策本部」を設置し、県内の感染状況を踏まえ、県独自の宣言発出や基本的な感染対策の呼びかけを行うほか、全庁を挙げて県民の命と健康を守る取り組みを進めた。県内の累積感染者は令和5年5月7日時点で237,794人、累積死者は625人となっている。

- ア 令和2年（2020年）7月29日
県内において初の感染者が発生
- イ 11月19日
知事・盛岡市長共同臨時記者会見で基本的感染対策及び追加的な感染対策をお願い
- ウ 令和3年（2021年）5月7日
県内での感染拡大を受けて緊急事態宣言区域及びまん延防止等重点措置が発令されている地域との往来の自粛を要請
- エ 8月3日
新型コロナウイルス感染症「岩手警戒宣言」を発出。都道府県をまたぐ不要不急の帰省や旅行の中止・延期をお願い
- オ 8月26日
盛岡市全域を重点区域とし、8月30日から9月12日まで区域内の飲食店に対する営業時間の短縮要請を実施
- カ 令和4年（2022年）2月1日
学校における部活動時間の短縮など対策の強化を報告
- キ 7月22日
1日の新規感染者数が連日1,000人弱となり、県内での感染が急拡大
- ク 8月31日
国が感染者の全数把握について、自治体の判断で見直すことができることに決定。しかし県では全数把握の継続
- ケ 12月20日
県内の感染者1日2,699人となり過去最多
- コ 令和5年（2023年）5月8日
新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行

③ 退職校長会の事業の中止や延期

- ア 令和元年度（2019年度）
1月15日に国内最初の感染者が発生したが県内では感染者ゼロの状況が継続していたので年度の総括となる2月20日の第2回理事会及び3月5日の第2回地区事務局長会議はマスク着用と間隔をとって着座

する等の感染防止対策に万全を期して計画通り会議を実施した。

イ 令和2年度(2020年度)

《木村会長新年度方針》

国家緊急事態宣言が出ている中、理事会を開催することをお許してください。今日のこの会議は私たちがかつて経験したことのないような辛いものです。それは今年度の見通しを立てる必要があることです。現在の情勢から考えると5月の「定期総会」は中止したいと考えております。7月のブロック研修会は来年度へ延期してはどうかと考えています。また、9月の県研修宮古大会は昨年度から準備を進めてきていただいているところですが、開催の可否をどうしたらよいか。宮古大会の参加締め切りが6月下旬と迫っているので今日の会議で見通しを付けたいと考えている所です。(第1回理事会会長挨拶要旨)

・中止した事業

定期総会、現職退職両校長会教育懇談会(発表予定の仙北小学校遠藤耕生校長の研究内容要旨を退職校長会だより183号に掲載)

・次年度に延期した事業

ブロック研修会、第47回県研修宮古大会、第48回東北地区退職校長会協議会岩手大会

・内容を一部変更して実施した事業

現職退職両校長会幹部懇談会(情報交換のみ)

ウ 令和3年度(2021年度)

《木村会長新年度方針》

令和2年度は新型コロナ感染拡大で非常に苦勞したが理事の皆様のご判断で総会を中止、事業を縮小するなどして何とか会員の絆を大事にしながら進めることができました。3年度は気持ちを新たにして会員の絆を大切にす退職校長会を目指したい。コロナ禍では毎日が非常時であるとの認識で生活することが必要です。これまでの感染対策の知恵を活かし、コロナと積極的な共存関係で事業を進めたい。(第1回理事会会長挨拶要旨)

・中止した事業

定期総会、第47県研修・親睦会宮古大会(記念講演講師お魚かたりべ山根幸伸氏の特別寄稿を退職校長会だより188号に掲載)、現職退職両校長会教育懇談会(発表予定の釜石東中学校米慎司校長の研究内容要旨を退職校長会だより187号に掲載)

・次年度に延期した事業

第48回東北地区退職校長会協議会岩手大会

・内容を一部変更して実施した事業

現職退職両校長会幹部懇談会(情報交換のみ)

エ 令和4年度(2022年度)

《木村会長新年度方針》

令和4年度は気持ちを新たにし、会員に尽くす退職校長会を目指します。これまでの経験値を活かし、普通状態に近づけた活動により本会の目的に迫りたい。県本部と各地区会が連携して柔軟な発想と行動を大切にします。本会の目的は研修・親睦・社会貢献を通して生きがいを肯定することです。生きがいは目的意識・有用感・楽しみから生まれます。高村光太郎の「心はいつでも新しく」という気持ちと「人に尽くす」ことを忘れないでいたいものです。本会最大の事業、県研修・親睦会和賀大会及びA地区、D地区ブロック研修の実現に皆様ご協力をお願い致します。(第1回理事会会長挨拶要旨)

・中止や延期をした事業

令和4年度に中止や次年度に延期した事業はない。2年間中止した定期総会は5月11日に3年ぶりに開催された。

・内容を一部変更して実施した事業

第48回県研修・親睦会和賀大会は懇親会を取りやめ1日開催で実施した。

A地区とD地区ブロック研修会、現職退職両校長会幹部懇談会、現職退職両校長会教育懇談会の4事業は会食を取りやめ、講話や研究発表、情報交換を行った。

第48回東北地区退職校長会協議会岩手大会は懇親会を取りやめ会場を盛岡グランドホテルに変更して1日開催で実施した。

オ 令和5年度(2023年度)

令和5年(2023年)5月8日に新型コロナウイルス感染症が5類感染症へ移行となる情報が、年度の始めにはマスコミ報道で明らかになっていたので、全事業をコロナ感染防止対策を実施しつつ令和元年度と同規模の計画でスタートした。概ね計画通り実施したが現職退職両校長会教育懇談会は学校現場の状況を踏まえ、懇親会を中止とした。

⑨ 役職定年制導入に伴う加入体制の強化について

本県では令和5年度の退職教職員から定年が延長され、2年に1歳ずつ定年年齢が繰り下がり、10年後に教員の定年は65歳になる。ところが、校長は60歳で役職定年となり、61歳からは教諭としての勤務となる。

退職校長会では理事会の協議を経て役職定年年度に入会勧誘をすることにし、以下のような取り組みを行っている。

- 退職予定校長に加入届け用紙等を送付する期日を早める
- 加入届けの提出締め切り期日を早める
- 現職校長との交流を深め、退職校長会の活動への興味関心を高めるよう取り組む
 - ・年4回発行の退職校長会だよりの1つに令和5年度から小・中校長会役員の手記を掲載し、その号を全校長に配付して退職校長会の活動や考え方について理解を深める機会を拡充した。
 - ・50年以上継続して実施している現職・退職両校長会教育懇談会は現職校長が学校現場の現状と課題について発表し、退職校長会員は発表を聞く形式であったが、令和6年度からは現職校長に退職後にどのような職に就いて生活はどう変わったのか、退職校長会はどのような活動をしているのかを退職校長が事例発表で紹介する形に変え、退職校長会について理解を深めてもらう場に変えた。
- 各地区会は地区内退職予定校長に加入勧誘活動を積極的に行う
 - 〈盛岡地区会〉
退職予定校長一人一人に地区退職校長会役員が勧誘担当となり、学校訪問や電話で本人に直接入会を働きかけている。
 - 〈岩手地区会〉
該当者に県より早く加入依頼文書を送り、理事が訪問して退職校長会の概要を説明し、併せて事務局長が電話で加入を働きかけている。
 - 〈紫波地区会〉
県の事務局長会議終了後、3月中旬に会長と事務局長が該当校を訪問して会の概要等を説明して加入を働きかけている。
 - 〈花巻地区会〉
会長、副会長、事務局長が手分けして地区会だよりの総会資料等を持参して該当校を訪問して活動の様子を紹介して加入を働きかけている。
 - 〈遠野地区会〉
地区が狭いので現職との交流機会が多く、折に触れ退職校長会の活動を話題にしている。該当者には役員が訪問して加入を働きかけている。
 - 〈和賀地区会〉
地区現職校長会役員との交流会等で退職校長

会活動を紹介。他地区での退職校長とも繋がりを保ち、当地区会への加入を呼びかけている。

〈胆江地区会〉

昨年から地区会報等の資料を現職校長に配付して地区会の活動状況を紹介し、該当校を会長他役員が訪れ直接加入を働きかけている。

〈一関西地区会〉

学校訪問でお会いして加入をお願いする。会長、副会長、事務局長、事務局次長、現職時代の同僚会員が手分けして複数で訪問する。

〈一関東地区会〉

コロナ禍以前は役員が該当校を訪問して加入の働きかけを行っていたようであるが、現在は文書と電話による声掛けを行っている。

〈気仙地区会〉

3市町毎に教育懇談会を開催して現職との繋がりが強化に取り組んでいる。3役が学校訪問をして直接加入をお願いしている。

〈釜石地区会〉

会員が手分けして学校訪問を行って退職校長会の活動を紹介し、該当者には加入をお願いしている。

〈山田地区会〉

地区の学校が少ないので現職との交流は日常的に行われているが、ここ数年地区内の学校から校長退職者は出ていない。

〈宮古地区会〉

退職校長がいない年度もある。該当校長の都合を事務局長が確認して会長と二人で学校訪問を行い、加入のお願いをしている。

〈岩泉地区会〉

ここ数年、地区内の校長退職者は単身赴任者で居住地のある地区会に入会している。従って地区会独自の働きかけは行っていない。

〈九戸地区会〉

現職校長との交流会で退職校長会活動を話題にして理解を深めている。近隣の他地区と連絡を取り合い加入を働きかけることもある。

〈二戸地区会〉

事務局長が退職校長会勧誘の手書き文書を該当校長に送り、その後で学校を訪問して直接加入を働きかけている。

取り組みの成果や課題

この役職定年時に入会を働きかける取り組みは始まって日が浅く、5年度と6年度の役職定年者の加入状況は従前と大きな違いは見られない。具体的な課題もまだ見えていない。今後は役職定年で加入した会員や現職校長の声に耳を傾けながら状況に応じた加入勧誘活動を進め、会員の高齢化にも対応しつつ、会の魅力を高める工夫を継続して会員の減少に歯止めをかけていきたい。

(10) 東日本大震災を語り継ぐ

① 「3・11」を忘れない

私たちは、「3・11」を忘れない。平成23年3月11日、午後2時46分。三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震は、一瞬のうちに、尊い命を他愛もないしかしながら尊い日常を無残にも奪い去った。(被害の概要等は50周年記念誌参照のこと)

本会は、この困難な状況に際し、被災地訪問をはじめ、定期総会において、被災者・被災地区会、被災小中学校への支援を決議し、義援金の協力を募った。

その結果、およそ1千万円の義援金が寄せられ、弔慰金や見舞金、被災した小中学校の支援等に充てた。

被災した学校では、校舎も、教材も、教具も何もないという状況からのスタートであったが、教職員をはじめ関係者の努力はもちろんのこと、多くの方々から寄せられた温かな支援によって、4月下旬から5月上旬にはすべての学校で教育活動が再開された。その日から14年の月日が流れた。

今、街には新しい道路が通り、新しい建物が建っている。まるで何事もなかったような錯覚にとらわれる。みんなで前を向き、明日に向かって、夢に向かって、歩み始めている。

しかし、決して忘れることのできない大きな哀しみを抱えている大勢の人がいる。この

「3・11」は今でも私たちの心に大きな影を落としているのである。

今、学校では震災を経験していない子どもたちが大勢いる。震災を知らない世代に語り継ぎ、震災を風化させないことが私たち大人の大きな責任である。

② 歌い継ぐ「鎮魂の歌」

ア 「鎮魂の歌」作成の趣旨

50周年記念誌に次のように記されている。「本会会員は、教職経験者として未曾有の大震災に遭い、仲間、教え子等の犠牲者に鎮魂の祈りを捧げ御霊を慰め、大津波の悲惨さを何らかの形で後世に伝えたいとの思いで鎮魂の歌を作成した。」

この趣旨のもと、東日本大震災犠牲者に捧げる「鎮魂の歌」が作成されたのである。

イ 「鎮魂の歌」決定までの経緯

平成24年2月15日の理事会において会員による「鎮魂の歌」募集要項を提案し、満場一致で承認された。その後、本会会員から歌詞を募集し、同年6月6日に作詞者並びに作曲者について選考委員会において決定した。

○ 作詞者

釜石地区会会員 千葉 隆男 氏

作曲者

盛岡地区会会員 太田代 政男 氏

ウ 「鎮魂の歌」の歌詞並びに楽譜

東日本大震災犠牲者に捧げる 鎮魂の歌

作詞 千葉 隆男
補作 岩手県公立学校退職校長会
作曲 太田代 政男

一、あゝ 山揺れて 海騒ぐ日
別れの言葉も 交わさずに
急ぎ逝きたる 親よ子よ友よ
たぐる想いに 悲しみ寄せる
心鎮めて 掌を合わせ
御慈光の霊界 安らぎたまえ

二、おお 空晴れて 雲遊ぶ季
道辺のお地藏 微笑みかわす
霊界の 親よ子よ友よ
挑む吾らが 郷土復興
嘉したまいて 前途に
真善美の花 開かせたまえ

三、さあ 大業に 進みゆく今
吾らは忘れじ 命もて
教訓遺せし 親よ子よ友よ
津波襲来 三月十一日
伝え誓わん 後世までも
御霊よ御霊 安らかにあれ

東日本大震災犠牲者に捧げる 鎮魂の歌

〈岩手県公立学校退職校長会制作〉

千 葉 隆 男 作詞
岩手県公立学校退職校長会補作
太 田 代 政 男 作曲

Andante (心を込めて)

三番は ()



1. ああ やまれ てて ちみ さわぐ
2. おお そらは はは てて くも さわぐ
3. さあ おおわ れに す す みゆく

とと きき わかれ の(わかれ) ことば も(ことば) かえい わみの さずわ
とと きき われら の(みちの) おしぞれ (おしぞ) (わすれ) (わすれ)

いそぎ ゆきたる おやよ こよと もよよ
みたまのく にのおやよ こよと もよよ
おしえのこせし おやよ こよと もよよ

たぐおれ いら にかい かま したの みよ せい るし
つなみしゅう (祈るように) こよつ こみた るしす めい てん てき をきつ あたま わきて

せにも みう ひか りのく になま やす らから ぎせ たた
ええ 3. れ やす ら か に あ

れ Ah Hum.

③ 会報で語り継ぐ

定期的に発行している「退職校長会だより」において、平成5年度から、年4回発行の会報のうち1回は、「わたしの3・11」コーナーを設置した。そこには、被災した沿岸地区の会員や、震災当時沿岸で勤務されていた会員から寄稿いただいた。自らの勤務校において子供たちの命を守った緊張感と臨場感が伝わる貴重な体験談をお寄せいただいた。

今でも思い出すことがつらいという会員の方々がたくさんおられる。そのような中、ご寄稿いただいていることに感謝したい。このコーナーを通じ、私たちには、震災を決して風化させることなく、後世に語り継ぐという重大な責任と大きな役割があるという思いを今一度新たにしたい。

●退職校長会だより195号から（令和5年10月1日）●

私の3・11

釜石地区会 菊池啓子

「あの子達高校卒業したね。」この春、知り合いの先生方と何度交わした言葉だろう。あの子達とは、発災当時幼稚園や保育園の年長児だった子供達のこと。新しいランドセルを背に小学校入学をどんなにか楽しみにしていたことだろう。でもあの日、子供達が入学するはずだった小学校が無くなった。

震災から半年後、町外れのサッカー場に仮設プレハブ校舎が建てられ4つの小学校と1つの中学校が同居。夏は暑く冬は寒く隣の教室の物音が響く薄い壁。それでも他の学校や施設を間借りして暮らしていた子供達にとっては『自分達の学校』であった。多くの子が家や家族を失い、喪失感に溢れ大きな傷を負ってはいたが、そこには学校再開の喜びがあった。文房具や本、音楽や楽しいイベント等世界中から多くの支援が届いた。ディズニーの仲間達さえも子供達に会いに来てくれた。それでも子供達はサイレンの音に怯え、水を怖がった。家ごと流されたため、水が怖くて雨の日は学校に来られない子もいた。遠隔地地震が起きた時はパニックになって泣き叫んだ。世界が一変したあの日から子供達は変化が怖い。

2年後、4つの小学校が統合して新生大槌小学校となり、それに伴い職員数が半減。この頃から家庭にも変化が現れた。家を再建する人、新しい仕事に就く人、家庭間格差のようなものが見えてくると同時に生活の疲れや不安定さから疲弊する親も出てきた。仕事を求めて町外へ去る家庭もあり、別居、離婚、子連れ同士の再婚、鬱病、子供へのDV、ネグレクト等が噴き出してきた。この時期ギャングエイジと呼ばれる年になった子供達は心の中で何かが壊れたように思われた。喧嘩、いじめ、学級崩壊、不登校、ありとあらゆる問題が次々と起きた。心のケアセンターや児童相談所と連絡を取り合い、愛着障害という言葉も学んだ。学校カウンセラーやソーシャルワーカーの存在の何と有難かったことだろう。子供だけでなく親のカウンセリングも頻繁に行った。校内で一番落ち着いているのは特別支援学級の子供達。「校長先生お茶っごどうぞ。」Aちゃんという女の子は私が部屋に行くときまご道具でお茶とお菓子を出してくれた。ひと時のオアシス。事件の連続という日々の中でAちゃんの笑顔は教職員みんなの癒しであった。教室を抜け出し廊下で暴れる子、2階の窓枠に体を乗せて「どうせ、俺なんかいない方がいいんだ、ここから飛び降りてやる。」と叫ぶ子…カオス！どうすればこの傷ついた子供達を救えるのか自分をどこまで受け入れてくれるか大人を試すのだ。わざと悪態をつき差し出した手を振りほどく。それでいて、心の中では自分を抱きしめてくれることを願っている。様々な手立てを試してみた結果、結局子供達の心の痛みに寄り添うしかない。この子供達を愛し抜くしかない心に決めて職員みんなで腹を括った。岩手大学と盛岡大学の学生支援もお願いした。週2回やって来る大学生と本当は仲良くなりたくてたまらないくせに早く帰れと悪態をつく。かと思えば自分のものとばかりに傍らを離れない子もいた。みんながあなた達を思っているよ、ということ言葉を態度で伝え続けた…やがて、少しずつ少しずつ子供達が変わり始めた。

4年生の終わりに2分の1成人式を行った。翌年からは中学校と統合し小中一貫校となるため、小学校の卒業式はなくなる。小学校の入学式も卒業式も体験出来ないこの子達のためにきちんとした式を開こう。子供達はこれまで寄り添い続けてくれた人達を招きたいと言った。まるで卒業式ながらのフォーマルな服装で子供も親も職員も臨む。「可愛いよ。立派だよ。」荒れ続けた子供達の成長した姿に涙が止まらなかった。

この子達が9年生の時、新型コロナウイルス感染症が世界を襲った。卒業式は職員と保護者の参加でひっそりと行われたが、小学校時代を共に過ごした先生方からたくさんのメッセージが寄せられたと聞く。そしてこの春、あの大変だった小学校時代が嘘だったかのような活躍をして高校を巣立って行った。この子達が高校を卒業して、ようやく何だか肩の荷が下りたような、そんな気持ちでいる。

「仮設校舎での生活は凄く大変だったけどこんなに子供に求められたことも、心一つにして子

供に向き合ったこともなかった。」当時の職員が口を揃えて言う。あの当時、毎日が本当に大変だった。誰一人欠けても前に進むことは出来なかった。みんなで手を繋いで大きな波を飛び越えていたようなそんな感がある。私の38年間の教員生活の中で最も辛く、それでいて最も充実していた学校、それが新生大槌小学校。私の3・11はあのプレハブ校舎にある。

●退職校長会だより196号から（令和6年1月1日）●

今思うこと

宮古地区会 大洞 晴 洋

先日、震災時勤務していた高浜小学校の傍の小高い丘にある「金浜老人福祉センター」を訪れる機会があった。ここは、あの3・11当日、児童・職員・保護者そして多くの地区民が最終的に避難し、飲まず食わずの大変な一夜を過ごした場所である。

およそ10年振りである。敷地に足を踏み入れた途端、胸が苦しくなるような何とも耐えがたい感覚に襲われた。あの時の凄まじい出来事が一気に浮かんできたのである。

あの日の夕方、センターや地区民の皆様のご好意によって、二部屋ある大広間の一つが、小学校の児童、職員用に充てられた。今部屋を覗くと、あの時の数十名の何も語らない不安そうな児童一人一人の表情が浮かんできた。

地区の主だった方達は、地区民の被害状況把握に備え、外で待機していた。

夜間も絶え間なく余震に恐怖を感じながら、地区民の一人が持ってきた手回し充電の一台のラジオを皆で聴く。山田方面の暗い空に不気味に広がった赤い光。誰かが呟いた。「かなり大きな火事かもしれない。」

そして、翌朝空が徐々に白むに連れて、見えてきた金浜地区の信じられないような惨状。まるで昨日の事のようにはっきりと心によみがえる。

同時に、その時の校長としての心境も思い出した。的確に言葉で表すのは難しいが、不安、責任、決断…。そういう重圧が一度に押し掛かってきた。

地域、児童の家庭、職員の被害状況は？ 通学路の復旧の見通しは？

心のケアへの支援は？ 給食はいつから可能か？ そして、終了式・卒業式はどうなる？……現実的な心配事で一杯であった。

地震発生から避難までの状況も振り返ってみる。

下校時刻が迫った午後2時46分、大きな揺れが校舎を襲った。余震の合間を縫って、校庭に児童を集めた。

高浜小学校の校庭は、国道45号線を挟んで宮古湾に面している。防潮堤の高さは8メートル、国道からも3メートル余の高さにある。

「大津波警報」の放送が流れる。すでに校庭には迎えの保護者の車が十数台入っていた。数名の保護者から「連れて帰ってもいいですか」と聞かれ判断を求められた。許可しようという気持ちもないわけではなかったが、メガホンを持って話した。「警報が出ているので、もう少し様子を見ましょう」これが、その後の状況から、とてつもなく大きな判断になった。登下校路は校庭より低い道が多い。もし返していたらと思うと今でもぞっとする。

そのうち校庭にはたくさんの人が集まってきた。誰も校庭まで津波が来るとは予想していない。その中には地区の消防団の人達もいた。3時20分頃だろうか、フェンス越しに海を見張っていた団員の一人が、「だめだあ。みんな逃げろ！こっちだ。速く。」と大声で叫んだ。それを聞いて、児童を含むその場にいた全員が、校舎裏の高台を目指して走り出した。

小高い場所から見た光景は、ぶかぶか浮いて校庭を動き回っている十数台の車の姿であった。何と校庭を1メートル半程の高さで津波が入ってきたのである。

震災直後訪れた文科省の方から、「大震災を経験され、今後の学校防災で一番大事なことは？」と質問を受け、「それは、地域との連携と信頼関係」と答えた。13年経とうとしている今もその思いは変わらない。

保護者から引き渡しを求められた時、「様子を見ましょう」と伝えたが、異議を唱える方はいなかった。津波襲来時、消防団の方の瞬時の判断と指示で大勢の命が救われた。防災を考える上で、地域との繋がりは極めて重要である。

私が高浜小学校に勤務した期間は、退職間際のわずか2年である。震災は、その1年目が終わろうとしている頃だった。元々地域との結び付きが強い学区だったので、私も日頃から繋がりを重視し、様々な集まりにも積極的に参加した。消防団の会合、敬老会、スポ少、お祭りなど休日の行事でも殆ど出席し、日頃の感謝と繋がりの強化に努めた。

3・11、あの時のことを思い出すと、今でも、落ち着かない辛い気持ちになる。緊張感とストレスでどっと疲れてしまうのである。ただ、思い出すたびに、まだ伝えていない事、伝えなければならない事が新たに頭に浮かんでくる。

震災に深く関わった者にとって、「3・11」は、生涯終わりのゴングはない。

3 この10年を振り返って ～各地区の活動を振り返る～

盛岡地区会

「心をつないで未来へすすむ」

～コロナ禍を乗り越えた会員の絆～

会長 吉川 健次

1 組織運営 ◆◆◆◆◆

当地区会の50周年以降の10年間は、次の歴代会長により運営してきている。

第14代西村倬郎会長（平成27年度～28年度）

第15代佐瀬壽朗会長（平成29年度～30年度）

第16代木村幸治会長（令和元年度～4年度）

第17代吉川健次会長（令和5年度～現在）

当地区会の理事は、県本部の常任理事と兼任である。県と盛岡の方針は一体であり、知恵をしぼり情熱を傾けてどちらも運営している。県の常任理事会開催日は、盛岡の理事会開催日でもあり、年間6回の会議は時間を十分にかけ吟味している。

各部は「総務・研修・厚生・経理」で構成されており、昭和48年度からの長年の伝統体制である。また、約450人の会員の掌握と連絡態勢は、結成当時（昭和42年度）から始まった地域ごとの「班組織」で、現在は、事務局直属班を除くと36の班組織が機能している。班長会は、年2回開催し、連絡調整・諸課題の解決・情報交換等、組織運営の要を担っており、そのための親睦会も開催している。

2 コロナ禍を乗り越えるために ◆◆◆◆◆

コロナ禍は、全世界を苦しめたが、当会では次のような対策を講じて乗り越えた。

木村前会長からの、「先の見通せない時代」にこそ、「非常時の生き方の工夫が必要」であるとのメッセージで会員は希望と勇気を得、①詳細な情報収集と科学的な知見、②十分な感染防止対策と命の安全最優先、③会員の心情の把握と理解を重視し、各事業の中止・延期・縮小等、適切な判断で英断をもって対処することができた。

これにより、命を守り、事業を遂行するという本来の使命を果たすことができた。

3 事業の内容と活動状況 ◆◆◆◆◆

当地区会の主要事業は、「研修」「慶弔」「親睦」「会報発行」「この指と一まれ」「社会貢献」であり、連綿と取り組んできていることが誇りである。また、会報「盛岡会だより」にそれらの事業の成果や課題が記録として残されており貴重な財産となっている。3年前からは、世界的な紛争を背景に平和教育「絵本プロジェクト」にも取り組んでいる。

(1) 研修

① 合同研修（日本教育会盛岡地区会との共催）

H27「生きづらさを抱え

精神科病院に来る子どもたち」

智田文徳氏（未来の風せいわ病院理事長）

H28「教育改革・教育施策と学習指導要領」

立花正男氏（岩手大学大学院教授）

H29「岩手医科大学120年の歴史をつなぐ」

嶋森好子氏（岩手医科大学看護学部長）

H30「歌声は世界を結ぶ」

村松玲子氏（県立不來方高校教頭）

R1「子どもの“つまずき”を“伸びしろ”に変えていく学校教育の充実」

小久保智史氏（県教委学校教育課総括課長）

R2 コロナ禍により中止

R3 コロナ禍により中止

R4「新型コロナウイルス感染症の

基本から今後」

矢野亮佑氏（盛岡市保健所長）

R5「ウクライナの独立戦争と

ロシアのジレンマ」

麻田雅文氏（岩手大学准教授）

R6「伝える大切さ」

照井 健氏（盛岡大学非常勤講師）

② 研修・慶弔会における研修会

H27「戦時下の国民学校」 菅森幸一氏

H28「鶴彬と盛岡」 宇部 功氏

H29「いまになって考えていること」

八巻恒雄氏（前盛岡市教育長）

H30「菩薩思想と宮澤賢治」

吉丸蓉子氏（前盛岡市教育委員）

R1「私の生涯学習 合気道を学んで半世紀」

日高 浩氏（県合気道連盟会長）

R2 コロナ禍により中止

R3「書を通して学んだこと」

八木橋溪雪（哲男）氏

（県書写書道教育研究会会長）

R4「私と水泳」

西川勝夫氏（岩手県水泳連盟顧問）

R5「蘇る志波城と古代東北の歴史」

玉川英喜氏（志波城古代公園学芸研究員）

R6「読んだ本の『抜粹』（A4判1枚）を

活用した学校経営について」

田中吉兵衛氏（岩手大学招聘講師）

(2) 慶弔

年度内に上寿、米寿、喜寿を迎えられた会員及び叙勲の榮に浴された会員を祝う会として例年秋に開催している。



令和6年度の慶祝会記念写真

また、逝去会員には報を受けると直ちに訃報記事として新聞社に掲載を依頼するとともに、業績を称え弔辞を作成、弔電・弔慰金を併せて奉呈している。

(3) 親睦

定期総会終了後の新会員歓迎会、研修会終了後の懇親会、班長会終了後の懇親慰労会等、会員相互の親睦交流・情報交換に努め会員の絆を深めている。コロナ禍においても、持ち帰り弁当等で交流を工夫した。

(4) 会報発行

県会報と発行時期を合わせ、年4回「盛岡会だより」として発行している。

巻頭言、主要事業の紹介と実施報告、参加者の感想、コラム、「私のたからもの」、「おりおり」、「私の初任の頃」、新会員及び慶祝者等の紹介、訃音（逝去者の経歴紹介）、お知らせ板、活動の総括（成果と課題）等の内容となっている。特に、コロナ禍においては、この会報そのものが、会員相互の心をつなぐ貴重な絆となった。振り返ると、あらためて先輩諸氏の築いてこられた歴史の重みに深い尊敬の念を抱かずにはいられない。

(5) 「この指と一まれ」事業

本事業は、厚生部事業として平成21年度から、当時の木村悌郎総務部長の発案で始まった。屋外に出かけ、楽しく学ぶことが目的であり、自費での運営が原則の独自の事業である。車座で談笑しながらの昼食も貴重である。それが高じて6年度は山の中のレストランでの食事となった。ゆったりとした非日常の楽しみもある。

H27 矢巾温泉、南昌山周辺訪問（講話）

H28 大慈寺、町家物語館訪問（講話）

H29 盛岡市内歴史散歩・ランチボックス試食

H30 実施せず

R 1 台風19号により中止

R 2 コロナ禍により中止

R 3 区界高原自然散策、兜山登山

R 4 八幡平市「県民の森・七滝」探訪

R 5 国見山廃寺跡周辺ウォーキング

（和賀地区会共催）

R 6 深澤晟雄資料館・碧祥寺博物館見学

(6) 社会貢献

H28年には熊本地震、R2年には新型コロナの流行、R4年にはロシアによるウクライナ侵攻、R6年には能登半島地震と災いが続き、世の中に暗雲が立ち込める中、当会では、被災地の復興支援と平和教育の一環としての「絵本プロジェクト」を続けてきた。

① 地震被災地への義援金送呈

H28年熊本地震では会員209人から500,575円、R6年能登半島地震では335人から420,500円の募金を取りまとめ県本部を通して熊本・石川両県退職校長会に送呈した。

② 絵本プロジェクト

「平和な社会の実現の一步」になることを信じ、子どもたちの心に光をあて、輝く未来につながることを願い「平和を考える絵本」を盛岡市内小中学校に贈呈している。贈呈した絵本は以下の通りである。

R4市内全小中学校にウクライナ民話・絵本「てぶくろ」（福音館書店）

R5市内全中学校にウクライナ絵本

「戦争が町にやってくる」（ブロンズ社）

R6平和を考える絵本

全小学校に「ぼくのこえがきこえますか」（童心社）

全中学校に「戦争をやめた人たち」（あすなろ書房）

絵本購入の経費はR4・R5両年度は一般会計から支出した。R6年度は、募金を呼びかけ、139,000円の募金をいただき、贈呈する絵本の購入に充てた。

(7) 当会運営の工夫

① 地区活動の要である班長の仕事の大切さに鑑み、班長活動費と手当を若干増額した。また、班人数の適正化のために班の新設と統合を行い、7年度は36班集体となっている。

（新設班：紫波33班、滝沢34・35班、小鳥沢30・4班）

（統合班：中央通4班を3班に、19-1班と19-2班を19班に）

② コロナ禍で定期総会は中止しても、会員相互の具体的な繋がり担っている班長会はコロナ感染防止対策を万全にして平常通り実施した。

③ 各種事業への参加者増や新会員確保の取り組みを具体化した。慶祝会出席の米寿の方にはタクシー券を出し、班長が同伴した。また、役職定年を迎えた校長には一人一人に入会の働きかけを行った。

④ 各種事業の開催通知や出欠確認には可能な限り電子メールを活用して郵送費等を軽減し、予算の効果的執行に努めている。

今後も退職校長会の一員として矜恃をもちながら「未来」への歩みを続けていきたい。

（事務局長 平 政光）

岩手地区会

「絶滅危惧団体にならないように」

会長 小原 眞澄

八幡平市、滝沢市、岩手町、雫石町、葛巻町、旧玉山村の岩手郡内の公立学校の校長の職にあった退職者ならびに本会の趣旨に賛同する校長職にあった退職者をもって組織されている。

創立50年からの岩手会は、他地区同様コロナ禍に振り回された10年間であった。

令和7年4月1日現在、201名の会員を擁し、「会員の旧交をあたため、会員の生活向上をはかるとともに、教育振興に資する」ことを目的として、「会員相互の親睦ならびに研修を図る」「関係団体と協力して、会員の福祉の増進、教育の振興を図る」「会員の慶弔、その他必要な事項」にかかる事業を行っている。

【広い地区】

会員の居住地は、葛巻町3名、岩手町8名、八幡平市17名、雫石町6名、滝沢市41名、盛岡市108名、盛岡市玉山区11名、地区外7名となっている。盛岡在住者が半数を超えている。各市町から理事を選任して、年3回の会議で事業推進に当たっている。

会員への連絡は事務局から個々への郵送やメール便で行っている。他の地区のように班組織を編成して各戸を訪問し、互いの状況を確認したり、情報交換したりすることができれば会への所属意識も高まるのではないかと思うが、検討はしたものの班編成はできていない。郵送料の負担も大きい。

本会の事業で互いに顔を合わせることができると「定期総会・親睦会」と「秋の研修会・親睦会」の二回だけである。参加者は、役員理事と、役員経験者が大半である。

【祝絵を贈る】

岩手会の特徴的な事業の一つ目は、喜寿を迎える会員に対し、定期総会において、岩手山を描いた「祝絵」を贈っていることである。

心を込めて描かれた『岩手山』、まずは総会会場に展示され、味わいのある一点一点を参会者がその素晴らしさを鑑賞する。贈られた会員は自宅に飾り、日々ながめては悦に入っているであろうと推察する。

喜寿に近い会員は勿論、まだ喜寿まで間がある会員までもが楽しみにしている。

現在、祝絵の制作を担っているのは、岩手会

員の高橋邦枝、中村剛の二氏と盛岡地区会の高橋眞司氏と齋藤眞理子氏の助力を得て継続している。新しい描き手を探してはいるが、なかなか見つからず、喫緊の課題となっている。



【秋の研修会会員が講師】

もう一つの特徴的な事業は、「秋の研修会」である。基本的に講師を本会会員から選任して講演を行って、その後温泉に入り懇親会で交流してきていたが、コロナ禍も有り、紙上交流や自然散策、文化施設見学に移行した。

《10年間の実績》

- ◎平成27年10月 雫石町 赤い風車
「追憶」講師：菊池悟先生 参加者33名
- ◎平成28年10月 雫石町中央公民館
Aブロック研修会兼岩手会「秋の研修会」
「いま考える 絵本のこと」
講師：末盛千枝子先生
研修会参加者約100名、親睦会66名
- ◎平成29年10月 鶯宿温泉赤い風車
「居合いの道」講師：神牧雄先生
研修会参加者20名、親睦会20名
- ◎平成30年10月 小岩井農場、赤い風車
見学研修「重要文化財バスツアー」
研修会参加者18名、親睦会17名
- ◎令和元年（岩手会「秋の研修会」と兼ねて）
岩手県第46回研修・親睦会「岩手」大会
9月12日（木）～13日（金）
講演会「宝塚の華 園井恵子の生涯」
講師：柴田和子岩手県芸術文化協会会長
見学研修「小岩井・重要文化財バスツアー」
研修会参加者43名、親睦会32名
- ◎令和2年・令和3年
新型コロナ感染防止のため紙上交流会
会員の投稿集「秋の研修会」発行

- ◎令和4年10月 岩手県滝沢森林公園
ネイチャーセンター17名参加
散会后、隣接の岩手県立大学食堂や図書館
を利用。懇親会なし
- ◎令和5年10月 岩手県滝沢森林公園・ネイ
チャーセンター・馬っこ広場16名参加
懇親会：ユートランド姫神11名参加
- ◎令和6年10月：盛岡歴史文化会館、野の花
美術館。懇親会：プラザおでって19名参加
コロナ禍以前は、鶯宿、網張、八幡平、
安比等々の温泉に設定され、午前に講演、
休憩をはさんで親睦会とし、その休憩時間
に温泉を楽しむ事ができた。時期は秋、紅
葉を愛でながらの講演、温泉、親睦と会員
相互の交流が深められた。コロナ禍で途絶
えた状況にあるが、今後、元の形に戻れる
ようにしたいものである。また、60歳を
超えて勤務されている若年層の会員の参加
を促すために平日開催を土日開催に変更し
た。

この10年の間に令和元年岩手県第46研
修・親睦会「岩手」大会を開催した。コロ
ナ禍前最後の大会だったこともあり、本会
にとっての一番の大事業であった。

【広報活動】

会員をつなぐ大きな柱は、会報『いわて』を
年4回発行し、内容は、会長、副会長による巻
頭言、本会や県主催の事業予告と報告、参加者
に感想を寄稿していただいている。新会員から

の寄稿、県会報に合わせた干支生まれ年会員の
夢、尊敬する人、座右の銘を掲載している。そ
の他、会員の活躍等を紹介している。

広報以外では、会員の現況を相互確認するた
め、総会の出席報告の返信葉書に「近況報告」
欄を設けて記入してもらっている。全員分を印
刷して総会資料として報告している。

【課題】

- 例年、会費納入時期に退会を申し込まれる会
員があり、会費免除会員に移行していただ
いている。
- 毎年、1・2名の退会希望者が出ている。理
由は、終活の一つとして整理されるとか、所
属しているメリットを感じないとかである。
- 岩手地区で役職定年を迎える校長は多数であ
るが、加入率が低い状況である。
- 現職校長との交流については、地区校長会の
役員会開催に合わせた合同懇親会のみに限ら
れている。本会からは役員5名程度と僅か
で来賓扱的な参加となっている。
- 広報等は、事務局から個々の会員に郵送して
いるが、料金高騰の為、会議の旅費や研修補
助の支出を抑える必要がある。
改善すべき課題は目の前にあるものの解決に
向けた方策は、見つからないままである。
本会の存在意義を高め、メリットが有るよ
うに、今後、事業推進を考えていきたい。
(事務局長 小野寺 仁)



紫波地区会

「この10年間の軌跡と今後の活動の方向性」

会長 村上政悟

1 はじめに ◆◆◆◆◆

【表】会員数の推移状況（平成27年度～令和6年度）

年度	27	28	29	30	元	2	3	4	5	6
新会員	4	3	4	3	5	0	4	2	1	4
会員	77	77	77	78	77	74	68	68	66	64
合計	81	80	81	81	82	74	72	70	67	68

上記の【表】より紫波地区会の会員数は、前半80数名で推移し、コロナ禍には70数名に激減し、そして現在児童の減少から小学校の統合により60数名まで減っている。会員の居住地は、紫波町、矢巾町、盛岡市と広く、大半はこの三地域に居住している。居住率は、紫波町約47%、矢巾町約34%、そして盛岡市等が約19%である。

65歳未満の会員は、何らかの職についている会員が多く、会への参加・活動は少ない。

現状は、65歳以上80歳未満の会員が中心に、本会の役職に就いたり、研修会、親睦会等に参加・活動したりしている。

2 組織運営の概要 ◆◆◆◆◆

この会の目的は、県公立学校退職校長会の趣旨に則り、会員相互の研修及び親睦を図り、関係団体と協力して、教育振興と社会貢献活動の推進を共有し、具体的な活動を考え実践することである。

役員は、会長1名、副会長2名、監事2名、事務局長と事務局次長（会計）各1名、理事6名、顧問3名、班長13名である。

役員は、1期2年とし再選を妨げない。但し、会の活性化のため4期8年を限度としている。

組織の部は、下記の通り3部制である。

総務部・・・会長、事務局長、事務局次長
 研修部・・・副会長、理事3名
 広報部・・・副会長、理事3名

この10年間の執行部は、次の通りである。

平成27年度～平成30年度

会長 星川英三
 副会長 鷲盛資朗 佐藤國雄
 事務局長・次長 村上政悟 菊池良子

令和元年度

会長 星川英三
 副会長 佐々木三夫 森 亮
 事務局長・次長 村上政悟 菊池良子

令和2年度～令和4年度

会長 星川英三

副会長 佐々木三夫 森 亮
 事務局長・次長 村上政悟 阿部郁子

令和5年度

会長 村上政悟
 副会長 佐々木三夫 森 亮
 事務局長・次長 小原眞一 箱崎 悟
 大山泰枝

令和6年度

会長 村上政悟
 副会長 佐々木三夫 森 亮
 事務局長・次長 箱崎 悟 大山泰枝

班編制は、紫波町6班、矢巾町5班、そして盛岡市等4班の15班で編制している。紫波町と矢巾町の11班、盛岡市の2班の班長には、県会報、全連退会報、「いわて教育の日」情報紙を年4回、会員名簿、地区会報等は年1回、定期便として班内配付をお願いしている。14班、15班（8名）は、事務局直属とし郵送で届けている。

会費については、6,000円であったがコロナ禍の3年間は5,000円、令和5年度からは6,000円に戻している。現在、県への負担金2,300円を除いた3,700円が地区の運営費である。特に慶弔費は徴収していない。

また、後期高齢者会員には、事情があって会費納入不可の方もおり、理事会で審議して免除会員に認定されている方（現在2名）もいる。

3 事業内容と活動の状況 ◆◆◆◆◆

本会の運営・事業計画は、執行部会（提案事項の作成・説明）、理事会（審議）、そして5月の定期総会で協議・決定されるがその中核は地域社会の今日的課題の把握、教育振興、そして社会貢献活動の推進に努めることにあり、①「会員相互の親睦と交流を図る」、②「積極的な研修活動への参加」、③「情報交換、会報及び特集号の発行」を柱に事業を推進し、会の発展を目指している。

(1) 総務

本会の重点事業の①「会員相互の親睦と交流を図る」では、慶祝・歓迎会と親睦会をそれぞれ開催している。5月の定期総会后、叙勲、米寿、喜寿の方々を祝う会に加えて、新入会員の歓迎会も行い、会員の親睦と交流を深めている。

なお、米寿者と喜寿者には、本会からも記念品を贈呈し、お祝いの宴を開いている。

下記の「研修・親睦会」では、他地区会や本地区現職校長等との交流を深める絶好の機会と捉え、内容面でも力を入れている。

(2) 研修

重点事業の②「積極的な研修活動への参加」では、研修部の計画に基づいた研修にいかにより多くの会員が集まるかが課題である。

地区合同研修・親睦会の始まりは、平成29年2月に退職校長会紫波地区会星川英三会長と日本教育会岩手県支部紫波地区会坂本信行会長の合意による。同年8月に退職校長会Aブロック（盛岡・岩手・紫波地区会）及び日本教育会岩手県支部紫波地区会合同研修・親睦会として実施。併せて両地区会は隔年で主管を担当することとした。

この10年間の研修・親睦会は、次の通りである。

平成29年度

Aブロック研修・親睦会 主管：紫波地区退職校長会
講師 山下研悦氏（佐比内公民館館長）

参加者数 112名

平成30年度

地区合同研修・親睦会 主管：日本教育会紫波地区会
講師 石川えりか氏（紫波総合高支援部主任）

参加者数 65名

令和元年度

地区合同研修・親睦会 主管：紫波地区退職校長会
講師 田代高章氏（岩手大学教育学研究科教授）

参加者数 62名

令和5年度

地区合同研修・親睦会 主管：日本教育会紫波地区会
講師 高橋和良氏（バンザイ・ファクトリー起業）

参加者数 58名

令和6年度

Aブロック研修会 主管：紫波地区退職校長会
講師 小笠原邦昭氏（岩手医科大学学長）

参加者数 125名

また、県民会館での「いわて教育の日」のつどいにも、可能な限り参加を呼びかけている。

次に、「研修旅行」では、できるだけ多くの希望者を募りたいことから夫婦での参加を呼びかけ、バスの乗降場所も複数箇所設け利便性に努めた。併せて、研修先に造詣の深い会員の説明を聞き、施設を見学したことも大変有意義であった。

この10年間の研修先は、次の通りである。

平成27年度 宮沢賢治記念館と橋野高炉跡

平成28年度 久慈・小袖海岸と琥珀博物館

平成30年度 あきた芸術村「わらび座」観劇

令和元年度 釜石鶴住居スタジアム視察

令和5年度 岩手日報制作センター（矢巾町）

5年度は、バス代の高騰から研修希望者一人一人が、無理なく研修視察地へ出向くことが可能である「研修視察」に改め試行してみた。

(3) 広報

重点事業の③「情報交換、会報及び特集号の発行」では、定期総会に参加できなかった会員への総会、慶祝・歓迎会の様子、県やAブロック研修・親睦会、地区合同研修・親睦会等の様子を知らせ、会員との情報交換を行っている。

また、会員相互の心の交流を図る「紫波退職校長会会報」の発行。会報の中身は、ア退職後（役職定年含む）の生き方・考え方、イ戦争体験に思うこと、ウ趣味を生かした活動、エ健康法や地域活動の様子、オ米寿・喜寿に思うこと、カ新会員の自己紹介、キ自分の現況による交流などを知らせ合い、会員相互の交流を深めている。

令和5年度には、紛争が世界中で頻発していることを嘆いていた会員からの強い要望もあり、「子ども達につなぐ戦争体験記」を会報の別冊として特集号を発刊し、会員、本会地域の小中学校、図書館などに配付することができた。特に小中学生には、この戦争体験記を通して平和や今の生活等について考える一助となれば幸甚である。

(4) 社会貢献活動の推進

令和6年1月に発生した能登半島地震被災者への支援活動では、一人一人から直接または銀行振込による義援金77,000円を送呈することができた。過去には、岩泉町豪雨災害や熊本地震災害にも義援金を募り送呈している。東日本大震災の被害に遭遇した私たちのささやかな返礼であった。

また、会員は、各機関からの依頼、要請を受けてそれぞれ学校教育、社会教育、高齢者成人学級、社会福祉、ボランティア活動等で多くの支援活動や地域参加活動を行い、地域の文化、教育振興に貢献している。

4 おわりに ◆◆◆◆◆

ある元会長さんの印象深い言葉を紹介する。「人生60年時代の生き方の理念と人生80年時代の生き方の理念はだいぶ違う。これからの生き方の理念は『生活福祉が基盤、生きがいの創出と教育支援が中核、そして社会貢献活動が究極』である」と提言している。「社会貢献活動の一番は、東日本大震災からの復旧・復興だ」とも言っている。

また、全連退でも「全国的に社会貢献活動の奨励と機会の拡充を図ることが、いま全国の退職校長会に求められている」と報じている。

現職校長（役職定年以降）も、いずれは退職校長会の仲間となることを期待し、同時に会員は先輩が築いてこられたこの会の歴史と努力に感謝しながら、今後も本会の活動から地域の新たな発展に寄与していきたいものである。

（会長 村上 政悟）

花巻地区会

「持続可能な継承・発展」

会長 坂本 均

1 発足と名称

岩手県公立学校退職校長会花巻地区会は、国並びに県組織の結成と時を同じくして、昭和40年6月に「会員の研修を通じて花巻地区の教育の推進に寄与し、併せて会員の親睦を図ること」を目的に「稗貫会」として会員13名で発足した。

その後、昭和50年から「花巻会」と名称が変更され、昭和61年には名称を「稗貫会」に戻し、平成15年から「花巻地区会」と変えて今日に至っている。

2 組織運営の概況

(1) 会員と会議

会員は花巻市在住者等で構成され、令和7年度188名を数える。

会員数の推移

会費6千円はここ20年変更なくきているが、近年特別会計からの繰り入れが必要になり、このままでは会運営に支障をきたすようになってきている。

なお、会員は地区ごとに26班に構成されているが会員の変動によって班編成は変更してきている。

平成28年度	190名
平成29年度	186名
平成30年度	185名
令和元年度	188名
令和2年度	194名
令和3年度	193名
令和4年度	194名
令和5年度	191名
令和6年度	188名
令和7年度	181名

(2) 役員と会議

役員は会則により会長1名、副会長2名、理事若干名（令和7年度8名）、監事2名であり、会長が委嘱する事務局長と事務局次長とで執行部を構成し、会務の執行にあたっている。

なお、総会の承認を得て会長が顧問を委嘱することができる。（令和7年度3名）

また、班に班長を置き、会員並びに事務局とのパイプ役を担っている。

会議は例年5月に定期総会を開催し、基本方針、事業計画並びに予算等を決定し、年3回の理事会で事業の執行にあたっている。

(3) 部制による運営

発足当初、会は一体的に運営されていたが、平成14年度から組織内に厚生部、研修部、広報部が置かれ、部制による運営となった。運営にあたっては、理事から各部長が選任され、理

事及び事務局・事務局次長を除く7名の事務局員が3つの部を分担して企画・運営に当たっている。

3 事業内容及び活動状況

(1) 福利厚生

退職校長会活動の基盤は福利厚生事業である。

①親睦

その第一は会員の親睦交流の充実である。そのため、本会では総会、研修会等を開催する毎に親睦会を併催して、互いの近況を報告し合い、元気づけあっている。

コロナ禍にあつて親睦会を開くことができない時期があったが、再開できるようになった。

②慶弔

その第二は慶弔活動の充実である。毎年11月に『慶祝会』を開催し、白寿・米寿・喜寿・叙勲者をお祝いしている。また、永遠に旅立たれた会員には、御悔みと御供物をお贈りし、弔辞を奉読している。

慶弔に該当する方々は、教育界の大きな節目や困難な時代状況の中で教育に身を捧げてこられた方々なので、その功績を讃え、お祝いと弔意を表することとしている。

(2) 研修

退職校長会活動の中核は研修活動の充実であり、会員の生きがいの創出である。

①地区研修

このことを受け、外部からの研修講師を招聘するだけでなく、会員の専門性や得意の分野の発表もお願いし、互いに学び合っている。

その概要は次の通りである。

平成28年度	現職校長会主管の教育振興座談会での研修をもって地区研修を兼ねる
平成29年度	『高齢者の医療制度と年金』 市健康福祉部職員 『簡単にできるレクリエーション運動』 故新淵久郎会員
平成30年度	『今、谷村貞治氏を語る～情報化の先達に学ぶもの～』 高橋寛元会長
令和元年度	Bブロック研修をもって地区研修を兼ねる 北上平和祈念館 高橋峯次郎氏
令和2年度	コロナ禍にあつて実施できず

令和3年度	同上
令和4年度	県研修兼Bブロック研修（和賀地区） をもって地区研修を兼ねる
令和5年度	『新渡戸稲造の魅力』 花巻新渡戸記念館長 嶽間沢茂会員
令和6年度	『山荘の光太郎とハイカラ料理』 やつかの森グループ
令和7年度	60周年記念事業として開催

② ブロック研修、県研修

ブロック研修会は平成22年度に主管して以来主管せず、他地区主管の研修会に参加してきた。

また、県研修会についても平成24年度に主管したが、それ以降主管せず、他地区主管の研修会に参加してきた。令和9年度には主管地区の予定になっている。

(3) 関係機関・団体との連携

退職校長会が教育の今日的課題を理解して教育振興に寄与していくため、関係者とコミュニケーションを図り、退職校長会の為すべき役割を探ることは頗る重要なことである。

① 四者教育懇談会

この懇談会は、花巻市教育委員会、中部教育事務所、花巻市校長会、そして本会の四者が年1回一堂に会し、教育の現状と課題について意見交換し、互いの役割を認識し合っているものである。

その進め方は、先ず四者が資料を基にそれぞれの事業活動の概要を説明し、それを受けて質疑応答する。そして花巻市教育長・中部教育事務所長から助言いただくようにしてきている。その後懇親会に移り、親睦を図りながら連携を深めてきている。

ただし、コロナ禍の期間は実施できなかったため、それぞれの活動状況の資料を作成いただき、後述する『地区会だより』に掲載して研修に供した。

② 教育振興座談会

この会は現職校長会との共催であり、現職が主管して行ってきたもので、毎年7月に開催してきた。

平成23年度からは、高等学校長協会も参加し、高校教育の現状を発表するなど研修の広がりを見せてきていたが、令和6年度から休止となっている。

それは、この会の近い時期に日本教育会の地区会総会が行われ、この会との開催趣旨が同様なのではないかということから事業の見直しがなされたからである。

③ 日本教育会地区会

上述のように、毎年7月上旬に総会が開かれ

ている。本会としては極力これに参加して、小中高の現職との交流を図るようにしてきている。

(4) 広報活動

広報活動は、組織運営上欠かすことのできない大切なものであり、本会では広報部の担当で年2回『花巻地区会だより』を発行している。その内容は、8月号では事業内容の報告と会員からの暑中見舞い、1月号では事業内容の報告と会員からの新年の挨拶を掲載している。

なお特集として、写真・ゴルフ・詩吟等のグループ・サークルの活動による、共に学び活動し合う喜びや、自治会・民生委員・保護司・ユニセフ等の活動による地域振興・教育振興に尽くす活動も紹介している。

また個人の活動としては、『誌上ギャラリー』としての絵画や彫塑・書道の作品紹介やスポーツ指導活動の紹介等も行ってきた。

4 今後の地区会運営

(1) 運営の基本的考え

本会には、平成22年度の花巻地区退職校長会事業・運営検討委員会報告書『これからの退職校長会、その運営の理念と組織運営』があり、これまでこの報告書の理念に基づいて事業を展開してきた。

その『はじめに』に次のような文言がある。

組織は変容していくものである。その目的とするところは不変としても、会員の意向と時代の要請によってその取り組む内容と運営は絶えず変化し新たな取り組みを始めるものである。

この流動する姿こそが組織の発展でありその努力を怠る時組織は停滞し弱体化する。

今後とも、この理念を継承して会を運営していきたいと念じている。

(2) 運営上の課題

① 事業参加の促進

高齢化の会員の増加や定年延長等の関係から、事業への参加者に偏りが見られてきていること

② 財政状況の緊迫

諸物価や会場費等の高騰により、特別会計から一般会計への繰り入れが必要になってきていること

(3) 課題への対応

会の持続可能な継承・発展のため、令和7年度から事業趣旨に基づいた事業内容の再確認と会費の値上げ等を検討していく。

(会長 坂本 均)

遠野地区会

「地区会員の結集で乗り越えたこの10年」

会長 佐々木 謙

遠野地区会の10年間の歩みの中で特筆されるのは、平成27年度Bブロック研修会、平成29年度の遠野地区会50周年記念事業、平成30年度第45回県研修・親睦会「遠野大会」、令和2年度Bブロック研修会等である。

(1) 平成27年度Bブロック研修会

平成27年7月16日、ブロック編制替え後、初めて遠野地区会主管のBブロック研修会が開催された。県本部から佐瀬壽朗副会長、菊池成夫事務局長の出席をいただき和賀・稗貫・遠野地区会から69名の参加で開催された。

午前は遠野市立博物館で柳田国男や佐々木喜善の「遠野物語の世界」や「昔の庶民の暮らし」等を見学し、続いてあえりあ交流ホールで、郷土史研究家大橋進氏による講演「清心尼公とその周辺」を拝聴した。名君「清心尼公」が出現した背景を学んだ。

開会行事後は遠野地区会会員であり、語り部として活躍中だった故黒淵利子先生が「若返りの水」と「オシラサマ」を語り親睦会に花を添えた。

(2) 遠野地区会50周年記念事業

遠野地区会は県退職校長会より1年遅れの昭和41年7月25日に設立された。平成29年度に遠野地区会創立50周年の記念事業をとり行った。前年度定期総会で、記念事業の内容や予算を決定し準備を進めた。

① 50周年記念式典・講演・慶祝・祝賀会

5月16日、県退職校長会会長佐瀬壽朗先生、市教育長中浜艶子先生の出席をいただき38名の参加で定期総会と併せ開催された。(於サンパークやなぎ)

遠野文化研究センター学芸員熊谷航氏による「おんな城主・清心尼」の講演では、NHKの大河ドラマ「おんな城主直虎」と比べる内容もあり参加者は興味を引かれたようであった。その後、祝賀会(慶祝・歓迎・懇親会)が盛大に行われた。

② 創立50周年記念誌の発行

歴代の役員の方々からの回想、退職校長会遠野地区会沿革の概要、県退職校長会30周年記念誌より遠野地区会のあゆみ(転載)を遠野地区会機関誌「閑窓」30号に合本する形で発行した。

回想文には「閑窓」「各駅停車」の成り立ちや遠野地区会主管のDブロック研修と県研修・

親睦会遠野大会の思い出が綴られ、諸先輩方の退職校長会にかけける思いやご苦勞に触れることができた。

③ 遠野地区会主催事業に関するアンケート

物価上昇、会員数減少、再雇用制度等社会状況の変化を考慮し、事業の見直しに役立てる目的で会員にアンケートを実施した。

アンケート結果から、事業継続を望む上位には機関誌「閑窓」の発行、巡回短信「各駅停車」があげられた。いずれも「書く」ことを通して人生の出来事を記録し残すことに意義を見いだしてのことと考える。続いて「現職校長と語る会」「教育長との懇談会」があげられた。

逆に見直した方が良い事業として、教育情報誌「TONO」の発行と研修視察旅行があげられた。研修視察旅行は、会員の高齢化や再雇用制度等の影響で参加者不足になり中止したことやバス代高騰のため個人負担が増えたこともあって全面廃止やむなしという声になった。

アンケート結果と分析については機関誌「閑窓」30号に掲載した。

(3) 第45回県研修・親睦会「遠野大会」

平成30年10月4日・5日遠野市民センターを会場に第45回県研修・親睦会「遠野大会」が開催された。謡曲と民謡が同時に歌われる「氷口御祝」で大会がスタートした。(遠野西中生)



遠野大会には県教育長高橋嘉行様を始め、多くのご来賓の方々と会員が出席し200名を超す大会となった。

研修に入り、合唱は、遠野西中全校生徒による「東日本大震災犠牲者に捧げる『鎮魂の歌』」、そして、手話を入れた合唱曲「プレゼント」と感銘深い歌声が披露された。



青笛小5・6年生児童による青笛しし踊りは、笛、太鼓、踊りと全て子ども達で演じている姿に驚きと感動が湧き上がっていた。

遠野文化研究センター副主幹前川さおり氏による「おんな大名・清心尼と遠野」の講演では、遠野になぜおんな大名が誕生したのか、なぜ名君と言われたのかわかりやすくお話しいただいた。



親睦会はあえりあ交流ホールに160名余りが参加し開催された。遠野産どぶろくで乾杯し祝宴がスタートした。地区会会員有志による詩吟「祝い事」、吟舞「名槍日本号」が披露され盛り上がった。会場は終始和やかな雰囲気交流が深められた。

2日目の閉会式では、佐瀬壽朗県会長より、出演した児童生徒への称賛、参加者や地区会への感謝の言葉があった。爽りある遠野大会になったという評価であった。

大会成功は、人的援助や経費・輸送等ご配慮いただいた共催の市当局、市教委、そして積極的に出演いただいた遠野西中、青笹小、指導に力を尽くされた芸能団体保存会等多くの方々のご協力によるものである。感謝したい。また、会員数の少ない中、一人何役も担い、チームワークで乗り切り、遠野地区会の底力を見せることができた。

(4) コロナ禍の地区会活動

① 中止になったBブロック研修会

令和2年に予定されていた遠野地区会主管のBブロック研修会は、コロナ感染の影響を受け次年度に繰り延べされた。しかし、予定の3年度も市内に感染者が出たこともあり、会場の遠野市総合防災センター（遠野市消防本部）の貸し出しが禁止となり中止を余儀なくされた。

Bブロック研修会の内容は、震災から10年を迎え、映像による大震災当時の振り返りと3.11東日本大震災遠野市後方支援資料館の見学をし、思いを新たにす予定であった。

講話は遠野文化研究センターの菊池弥生氏による「岸田袈裟さんの国際協力活動～遠野の文化をアフリカへ」であった。講話予定の要旨は、後ほど県退職校長会便りに掲載された。

② 定期総会・慶祝歓迎懇親会

令和2・3年の2年間、コロナ感染予防のため総会、慶祝の会を開催できなかった。令和2年度には病氣療養中で会長職の辞意を申し出た留場聡会長に替わり、会長代行の菊池健次副会長が会長に就くことを書面で了承を得た。役員改選にあたる令和3年には、緊急の取り扱

いとして任期を1年延長することで対応した。

全く活動らしい活動ができなかった令和3年度には、2千円の会費引き下げを行っている。

令和4年度には定期総会を再開、地区会には緊急時の規定がなかったことから県本部の規約に倣い、緊急時には理事会の議決を持って総会に替えると規約改正を行った。懇親会では3年分の叙勲、傘寿、米寿、歓迎のお祝いを行っている。乾杯はお茶で、弁当は持ち帰る形であった。

コロナが5類に移行した令和5年、6年度は遠野市内でもコロナ感染が続き、児童生徒にも広がった。そのため定期総会後の慶祝歓迎懇親会は、お酒抜きの食事会であった。

③ 短信「各駅停車」の一時停止

遠野地区会の特徴的な活動である会員をリレー形式で巡りお互いの情報を共有する短信「各駅停車」は、平成5年に1号車が発車されて以来、毎年7月7日に七夕号として会長宅を出発していた。しかし、コロナのため令和2年から2年間停車したままになった。「各駅停車」を始めた当時の事務局長佐々木資郎先生から、「対面で手渡しすることから、もしものことがあっては申し訳ない」という心配も寄せられ停止することになった。令和4年度3年ぶりに再発車をしている。

(5) 会員の減少

遠野地区会の会員数が最も多かったのは、平成21年度の67名である。それ以来減少に転じ、令和6年度には50名を割ってしまった。現在（令和7年2月末現在）46名まで減少している。

令和元年から3年間は新入会員はなく歓迎会もできなかった。会員のうち市外在住の会員は6名を数える。70歳以下の若手会員の大部分は、再任用等で教育関係の仕事に就いている人が多い。会員相互のつながりを保つために事業の内容や日程設定を検討していく必要がある。

また、会員減は、財政的な部分にも影響を及ぼしている。遠野地区会の会費は7千円と高額であるが、諸物価の高騰と共に、繰り越し金減少の原因にもなっている。活動に支障をきたさぬよう事業の内容見直しやデジタル化による経費の削減を進めていきたい。

(6) 今後に向けて

次の10年間は、令和9年度の遠野地区会の60周年記念事業、同じく令和9年度予定のBブロック研修会に備えていく必要がある。高齢化は進むが、令和8年度は1名、9年度には5名の新入会員加入が予定されている。先輩方が残した貴重な事業を引継ぎ、若手の力を生かしながら次の時代に向かって歩を進めたい。

(会長 佐々木 謙)

和賀地区会

「会員の力を結集して」

会長 深澤 瞭

はじめに ◆◆◆◆

退職校長会結成50周年から60周年までの10年間に年金受給年齢の引き上げと定年延長といった会員の生活に影響を及ぼす法改正が施行された。時代は平成から令和へと変わり、コロナ禍や世界各地の紛争は社会全体を不安にさせた。

この間に和賀会ではBブロック研修と県研修・親睦会を主管した。会員の力を結集したこの2つの研修を中心に10年間の活動を振り返り、さらに今後の当会の在り方について考えてみたい。

1 Bブロック研修 ◆◆◆◆

(1) 最北の特攻出撃基地の跡地にて

令和元年7月19日に当会が主管したBブロック研修が開催された。場所は1938年に岩手陸軍飛行場（後藤野飛行場）が建設された北上市和賀町後藤野である。

研修・親睦会には県本部の役員をはじめ、花巻、遠野、和賀地区から73名の参加があった。

研修のテーマを「後藤野飛行場跡 今と昔そして未来」とし、後藤野飛行場跡地に建設された岩手中部クリーンセンター（ゴミ焼却場）及び北上平和記念展示館の見学と当会会員の高橋源英氏による講演が行われた。演題は「～最北の特攻出撃基地～岩手陸軍飛行場（後藤野飛行場）の足あと」である。

(2) 平和の尊さを未来に語り継ぐ

現在、工業団地としての開発が進む後藤野飛行場跡地であるが、戦時中にこの地から特攻出撃があり、3名の尊い命が犠牲になった事実はあまり知られていない。

そこで、かつてこの地であった歴史的な事実を知り、平和の尊さを後世に語り継ぐ必要性を考える機会とすることをこの研修のねらいとした。

今、戦争体験のある会員は少なくなっているが、この研修は、戦争体験の有無にかかわらず、会員一人一人が戦争の悲惨さや平和の尊さを未来に語り継ぐことが自分たちの使命であるという認識を強くする有意義なものであった。

この研修の後に、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエル・ガザ紛争が起きている。図らずも今まさに、歴史の語り部としての役割が会員一人一人に求められている。

2 県研修・親睦会「和賀大会」 ◆◆◆◆

(1) コロナ禍での準備

和賀大会は当初、令和3年度に予定されていた。しかし、令和2年度の宮古大会が1年延期となり、和賀大会も令和4年度に延期となった。

和賀会では令和3年度から本格的な準備に入ったが、新型コロナウイルス感染症の感染が収まらず、実行委員会の組織も遅れ、当初の準備は事務局が中心となって行った。また、令和3年度の宮古大会が中止となる中、感染の収束がまったく見通せず、県事務局と協議のうえ、親睦会を行わず1日開催とすることを決断した。

さらに、見学研修先として計画した施設がコロナ禍で受け入れを見合わせたため、急きょ別の施設を探さざるを得ないという出来事もあった。

(2) 1日開催でも

令和4年9月15日に北上市文化交流センターさくらホールを会場に、第48回県研修・親睦会「和賀大会」が開催された。大会テーマは「先人達の熱き想いー先見の明に学ぶー」とした。

コロナ禍の大会で、感染予防に配慮して実施するとはいえ、参加者が少ないのではないかと心配したが、当日は来賓を含め207名の参加があった。コロナ禍前と大差ない参加者の数に、参加の呼びかけに尽力くださった各地区会に感謝したい。

1日開催のため、全体会の前に見学研修を実施した。研修先は「北上市産業支援センター」と「北上コンピュータ・アカデミー」の2か所から選択してもらうことにした。1か所に参加者が集中することを避けた感染予防への配慮でもある。

記念講演は「地方創生時代の北上市の挑戦」と題して、北上オフィスプラザ専務取締役の石川明広氏から北上市の産業振興についてお話をいただいた。主要産業が農業しかなかった北上市が、東北でもトップクラスの産業集積地に発展した経緯を企業誘致、人材育成、技術革新といった観点で話していただいた。

その後、「東日本大震災犠牲者に捧げる『鎮魂の歌』」を作曲者の太田代政男先生の指揮で、黒沢尻北小学校合唱部の児童が合唱した。

続く児童生徒の発表では、黒沢尻北小学校合唱部と上野中学校吹奏楽部により、合唱と吹奏楽の演奏が披露された。全国トップレベルの両校の演奏は参加者を魅了した。



全国トップレベルの両校の演奏は参加者を魅了した。

本来であればこの後に親睦会を行い、県下から集まった参加者が親しく交流するはずであったが、先に述べたように感染症の収束が見えない中では実施することが困難であり、1日の研修だけで閉会となった。

しかし、参加した方々からはとてもよかったという感想をたくさんいただきありがたかった。和賀会としても、大会の準備段階では実行委員会の開催もままならず、準備にも遅れが生じたが、大会当日は58名の実行委員が一致協力してスムーズな大会の運営を支えてくれた。コロナ禍の中の忘れ得ぬ大会となった。

3 コロナ禍の事業運営とその後

(1) 慶祝会は中止せず

令和2年に発生した新型コロナウイルス感染症は、会の事業運営に大きな支障を来した。特に令和2年と令和3年の「総会」及び現職校長との交流の場である「和賀の教育を語る会」は中止とし、「日帰り研修会」も令和3年を中止とした。

そのような中で、例年5月の総会と同時開催で行ってきた「慶祝会」だけは中止せず、感染の少ない時期を見計らって飲酒なしの昼食会、または、飲食なしで祝品贈呈のみといった形で実施し、慶祝者に祝意を表してきた。ちなみに、どの事業も通常開催に戻したのは令和5年からである。

(2) 会報「和賀会だより」の充実

主要な事業を中止としたコロナ禍ではあるが、会員への情報伝達の手段として会報「和賀会だより」の充実を図った。会員からの原稿の掲載はもちろんのこと、コロナ禍の学校現場の様子を校長から聞いて掲載した。また、中止となった「和賀の教育を語る会」では話題提供の準備をしていた発表者の発表内容を掲載した。さらに、この時期、海外の日本人学校で活躍していた会員からのレポートもシリーズ化して掲載するなど、事業が中止になった分を多様な情報発信で補った。

(3) コロナ禍後の課題

ア 事業への参加者数の減少

当会の主要な事業は、「総会・慶祝会」「和賀の教育を語る会」「日帰り研修会」の3つであるが、特に、「総会・慶祝会」は、コロナ禍後に参加者数が大きく減少している。

この10年間を見ると、平成27年から令和元年までは毎年70名を超える参加があった。しかし、2年間の中止を経て、令和4年は56名、令和5年は63名、令和6年は58名と10名前後の減少が見られる。感染症が終息したわけではないので、参加に不安を感じている会員もあると思われるが、総会だけでなく慶祝会を併せて行っているため、多くの会員の参加のもとで慶祝者を祝いたい。

イ 会の年齢構成の変化にみられる課題

50周年記念誌に平成26年度の会員の年齢構成の割合が記載されている。そこで、10年後の令和6年度と比べてみた。

	平成26年度	令和6年度
90歳以上	8%	13%
80～89歳	30%	29%
70～79歳	38%	26%
60～69歳	24%	32%
会員数	174名	167名

10年前は、「学校数の減少に伴い新入会員が減り和賀会にもかつてなかった高齢化の時代が見え始めている」と分析している。

10年後の今、90歳以上が5ポイント増加しているため、まさに高齢化が進展しているといえる。一方、60歳台が8ポイント伸びており、予想したよりも新入会員の減少はみられなかった。

しかし、年金受給年齢の引き上げと定年延長に伴い、新入会員の多くは定年（役職定年）後も学校現場等で働いているのが現状である。

事業には80歳以上の会員も多数参加しているが、活動の主体となるのが60代から70代の会員であることを考えると、60代前半の会員の活動が制約されることは会の運営上大きな課題である。

(4) これからの和賀会を考える

時代が「平成」から「令和」になったとき、当時の照井健会長は、「会員が昭和で得た知見は、令和の時代であっても学校や地域社会で必要とされる」と述べた。

現に歴史の語り部として平和の尊さを後世に語り継いでいる会員がいる。芸術や文化活動を行ったり、地域の歴史を研究したりしている会員がいる。地域の自治活動や福祉活動に貢献している会員がいる。

このように、会員一人一人がもつ知見を生かし、令和の時代も学校や地域社会の期待に応える和賀会でありたい。なお、今後は会員が退職後に取り組んでいる活動を紹介し合う工夫を考えている。

おわりに

令和元年のBブロック研修は、主会場が藤根地区交流センターであった。宴会場のあるホテル等での開催と違い、研修会や親睦会の会場準備などの一切を和賀会の会員が行う手作りの会であった。

令和4年の県研修では学校現場等で働いている会員も含め58名の実行委員を中心に和賀会会員が丸となって大会の成功に向けて取り組んだ。

これからの和賀会の運営も、会員一人一人の力を結集してよりよい活動を行っていききたい。

(事務局長 澤藤 耕平)

胆江地区会

「地区会の活動」

会長 高橋清融

はじめに

本地区会は、平成22年3月25日に「胆江は一つ」の理念の下、胆沢会と江刺会が合併しスタートした。会員数は297名であった。「会員相互の親睦、福祉の充実、教育の振興」を目標に掲げ、その具現化のために研修活動と会員の親睦の充実を目指している。

1 組織運営の概況

(1) 事業を推進するに当たり、その重要な支えとなっているのは、24地区から選出されている地区理事であり、各地区では地区理事を幹事とする地区会が組織され、特色ある計画によって、総会・親睦会等を開催し、地区会員の動静の確認・懇親・研修活動を行っている。

さらに地区内の小中学校長を招いて現職校長との交流を図っている地区もある。

(2) 役員は会則により、会長1名、副会長2名、監事2名、会長が委嘱する事務局員4名で執行部を構成している。年6回の定例会議を持ち、会の意思決定や処理・連絡の要をはたしている。

理事会は、24地区の理事と7名の執行部員で構成し、4月、8月に理事会を開催し、会運営の重要な案件の審議や決定・連絡調整を図っている。

50周年以降の執行部は次のとおりである。

平成27年度～28年度

会長 及川正昭
副会長 菅原義子・佐藤公好
事務局長・次長 菊地宏充・高橋康祐
事務局員 千田邦子・佐藤裕治

平成29年度～30年度

会長 佐藤公好
副会長 高橋清融・菊池康
事務局長・次長 菊地宏充・小野寺政司
事務局員 千田邦子・及川敦子

令和元年度～2年度

会長 佐藤公好
副会長 高橋清融・吉田政
事務局長・次長 小野寺政司・菅原博
事務局員 千田邦子・及川敦子

令和3年度～4年度

会長 佐藤公好
副会長 高橋清融・吉田政
事務局長・次長 小野寺政司・菅原博
事務局員 千田邦子・及川敦子

令和5年度～6年度

会長 高橋清融
副会長 吉田政・小野寺政司
事務局長・次長 菅原博・菅原孝司
事務局員 千田邦子・小野寺幸子

会員数の推移は

平成27年度	273名
平成28年度	279名
平成29年度	277名
平成30年度	277名
令和元年度	267名
令和2年度	263名
令和3年度	255名
令和4年度	256名
令和5年度	253名
令和6年度	249名

(3) 年間事業は、総会・親睦会・理事会（2回）・研修親睦会・慶祝を祝う会、会員原簿記入説明会、現職校長と語る会（先輩校長と語る会）、会報の発行（年2回）、役員選考委員会（隔年）等があり、検討改善を図りながら継続している。各事業とも理事の尽力を得て、順調に推移し現在に至っている。

2 事業内容及び活動の状況

(1) 研修親睦事業

退職校長会活動の一つは研修活動であり、会員の調査研究や退職後の生き方等新たに仕事に就いている人から学んだりしている。

その一つとして会員の中から講師を選び講演会を開催している。趣味特技、見学を取り入れた研修も含めて内容は多岐にわたり、学ぶことが多い。

また、退職校長会の基盤をなしているのが会員の親睦交流であり、その充実のため研修会に、親睦会を併催し、近況等を報告しあい、互いの絆を深めている。

会員の慶弔は本会の活動の基盤を成すものである。毎年定期総会後に、「叙勲、上寿、米寿、喜寿者を祝う会」と、「新入会員の歓迎会」を併せて開催し、会員の親睦交流を深めている。

(2) 福利厚生事業

会として、喜寿者には肖像写真または記念品を贈呈している。

逝去された会員には、花環・香典・弔電を送り弔辞を奉呈し、哀悼の誠を捧げている。

慶弔に該当された方々は、社会の変遷の中、教育振興に尽力された。その功績を讃え祝意と弔意を表すものである。

各年度の演題と講師

平成27年度

胆江地区の指定文化財所有者・地区民の思い
～国史跡胆沢城趾のあゆみ～ 山口了紀氏

平成28年度

「俳句に支えられた日々」 梅森サタ氏

平成29年度

「高野長英顕彰十五年、出会いと学び」
今野健氏

平成30年度

「人首今昔物語」 山崎勝氏

令和元年度

「水沢歴史散歩ートテ馬車の話等」 大石文雄氏

令和2年度・令和3年度

コロナ禍により中止

令和4年度

「行政書士としての相続を考える」 本多柏一郎氏

令和5年度

「後藤新平の生涯」 佐藤彰博氏

令和6年度

立場は己を変える
～常に拠り所を求めて～ 菅原義子氏



【研修会の講演】

(3) 会報「たんこう」の発行

年2号を発行し、令和7年は第30号を発行

した。8月号は、叙勲者、上寿者、米寿者、喜寿者、そして新入会員の感慨と会員の随想を掲載している。1月号は、全会員による新年交賀号としている。内容は、新年の挨拶、抱負、近況報告である。

会報発行は、近況や慶祝の多くの情報を載せ、会員相互の紙面による貴重な交流手段となっている。

(4) 関係機関・団体との連携事業の推進

関係機関や団体との連携を図ることも重要な連携事業の柱となっている。

先輩校長と語る会（現職校長と語る会）は、はじめに、現職各小中学校長より現状報告を行っている。現在の学校現場の一端を知る機会となっている。その後退職校長会の発表である。コロナ禍により、4年間中止したが、令和5年に再開した。

令和5年度は、会員である佐藤範久氏が「退職後の8年間を振り返る」と題し、当時、市立保育所長であったので、保育現場の状況、所長としての仕事の様子を発表している。

令和6年度は会員小澤彰氏が「障がい福祉の現状と課題」と題し、社会福祉法人理事長として、福祉現場の現状等を発表している。ともに、短時間の発表であったが、退職後の生活仕事の様子を、多くの資料をもって、現職校長にとっては、定年後の実際の現場との関わり、学校現場とは異なる様子に関心をもち、聴視いただけたと思われる。

なお、現職校長へは、退職校長会の会員の動向・思いを掲載している「会報たんこう」を全員に配付し、退職校長会の理解が一層図られるよう努めている。

この「語る会」の後、合同懇親会を開催し、退職校長会会員が学校現場の様子・現状理解とともに、現職校長との交流が深められる好機会となっている。

おわりに

この10年は、コロナ禍により研修や親睦を深めることができない時期もあったが、多くの参加者があった地区の事業や参加体制を組んでいた各理事の皆様へ感謝申し上げたい。

今後、役職定年や会員を取り巻く環境の推移を踏まえた時代の変化に対応しながら、会員の相互啓発と会の運営に創意工夫を重ねていきたい。

会員の親睦と研修を深め、次の節目につながるために歩んでまいり所存である。

(事務局長 菅原 博)

一関西地区会

「会員の親睦と研修の継承と発展を」

会長 千葉彰彦

1 はじめに ◆◆◆◆◆

当地区会員数は平成27年度154名であったが、令和6年度末は140名と、年々減少している。ただこの10年間、当地区会該当の校長退職者は、100パーセント加入している。様々な場でのつながりもあるが、現会長（千葉彰彦氏）がこの間、該当者の学校訪問を行い、当会の紹介並びに加入を熱意をもって勧めていることが全員加入の大きな力になっている。

2 主な事業と活動状況 ◆◆◆◆◆

(1)本地区会の活動の方向性について

- ①会員の相互の親睦と研修を図る。
- ②現職校長とのつながりを大切に、交流を図る。
- ③年2回「会報」を発行し、会員相互の情報交換を図る。
- ④各事業等への参加促進を図ると共に関係機関・団体との連携を図る。
- ⑤会員各自の自覚のもと、社会参加活動を進める。

(2)会員の交流親睦並びに福祉について

- ①退職・現職校長交流会
コロナ禍により中断もあったが、今年度は現職が参加しやすい8月に、研修講演会と合わせて開催した。
- ②慶祝会
秋に会員の白寿、米寿、喜寿該当者の「賀の祝」を行っている。この席上全国連合退職校長会と県退職校長会からの賀詞の伝達も行っている。
- ③会員全員からの近況報告
年2回、会員全員の近況報告を冊子にし、相互の絆を深めている。

(3)地区研修にかかる事業について

- ①会員研修講演会
日本教育会一関西地区会と共催で開催し、今日的な課題を考える重要な研修の場となっている。
・平成27年度
「学校不適応児童生徒の背景について」
心理カウンセリングおきた所長
沖田憲一様

・平成28年度
「一関図書館に乗せた夢と今」
前一関図書館開設準備係長
飯村昌弘様

・平成29年度
「いなかは宝の山」
一関市藤沢町深萱在住 皆川洋一様

・平成30年度
「襷にかける青春」
一関学院陸上部監督 千葉裕司様

・令和元年度
「配志和神社考」
一関西地区会員 梅森敏男様

・令和2、3年度 コロナ禍により中止

・令和4年度
「一関藩のしくみとすがたー学問と教育を中心にー」
県南史談会幹事長 大島晃一様

・令和5年度
「一関の文化とシニアが果たす役割」
一関文化会議所理事長 内田正好様

・令和6年度
「一関・平泉を未来へつなぐ地方創生の取り組み」
イーハトーブ東北代表取締役
松本数馬様

②会報の発行

昭和58年8月に第1号を発刊し、令和7年1月1日発行で111号を数える。様々な情報を載せ、研修と結びつきを深める貴重な資料となっている。
・会長からの挨拶、雑感、メッセージ等
・会員からの投稿 随筆、提案、雑感、新入会員からの寄稿等

(4)ブロック・県研修にかかる事業について

- ①平成27年度Cブロック親睦・研修会
・期日 平成27年7月11日(土)
・開会行事並びに講演会
演題 「中尊寺領骨寺村の重要文化的景観について」
講師 一関博物館館長 入間田宣夫氏
・移動研修 骨寺村荘園遺跡の景観研修
・親睦会 沢田神楽「鶏舞踊り隊」

講演会では映像を交えての骨寺村絵地図の詳細な説明があり、現地での景観研修がとても有意義なものになった。絵図には仏教と自然信仰の融合の風景が仏国土としての農村風景が鮮明に描き出されており、その原風景が残されているのはここ骨寺村だけとのことで、説得力のある有意義な研修となった。

②令和5年度第49回県研修・親睦会

「一関西大会」

- ・大会テーマ
「悠久の流れの中で—平安への祈り」
- ・期日 令和5年9月14日・15日
- ・会場 一関市文化センター
 厳美温泉「いつくし園」
- ・研修講演
 演題 「世界遺産 平泉・毛越寺」
 講師 毛越寺貫主 藤里明久氏
- ・鎮魂の歌 一関市立磐井中学校合唱部
 指揮 太田代政男氏
- ・児童生徒の発表
 平泉町立長島小学校合奏団
 一関市立磐井中学校合唱部
- ・親睦会
- ・見学研修 毛越寺・平泉世界遺産
 ガイダンスセンター

<講演概要>

世界遺産登録の意義として、東北の歴史遺産が世界レベルと評価され、奈良や京都と違う文化や伝統が平泉にあり、残されている文化財は他に類例がないものとして認められたこと。そして、平泉の浄土思想は、平和を希求する人類の願いに合致し普遍性をもっていると認められたこと。また、ユネスコ憲章の前文にある「戦争は人の心の中に生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦を築かなければならない」の一文は清衡公の理念「ひとり一人の心の中に浄土を築く」という願いに通じるものと認められたとのことであった。

<児童生徒の発表>

鮮やかなリズムと全体が心一つに動く小気味良さ、一人一人のエネルギーがほとばしる合奏、最後は地区の先輩方と世代をしっかりと繋ぐ晴れやかな合同演奏が素晴らしかった長島小合奏団。一年生部員が多い中、歌詞の意味を十分に汲み、瑞々しい歌声で鮮やかさと深い説得力で共感を与えてくれた磐井中学校。作曲者の太田代政男氏の指揮で歌い上げた『鎮魂の歌』も心に深く伝わる感動的なものになった。

<見学研修>

毛越寺では、前日の記念講演の内容と重ねての見学となり、歴史や価値を伝える映像や模型があり、「平泉の文化遺産」の価値を学び、新しい発見をすることができた。

<コロナ感染症への対応>

当年度は本来の形の泊二日での開催で準備が進められた。ただ完全終息にはならず、8月に入り感染ぶり返しの状況にもなり、開催数日前まで高齢者の参加取りやめ等の連絡もあり、会食・宿泊等の早急な修正変更等の対応が求められた。大会当日は、消毒、ソーシャルディスタンス等の再度の呼びかけ等も注意深くおこなった。特に配慮の必要だった懇親会では時間厳守の進行を心掛け、夜間の緊急の搬送等への対応も準備していた。二日目の見学研修が終了するまで、そして、終了数日後に他地区からの感染報告がない時点で、実行委員のすべてが大会終了の喜びを実感することができた。

成功を支える力になったのは、実行委員会の係ごとの計画的かつ精力的な活動によるところが大きい。また、県内各地区参加者の協力にも深く感謝している。

3 おわりに ◆◆◆◆

県研修講演会の中で紹介のあった「延年の舞・老女」について、次のような解説がある。「老女が後生を願う舞である。舞の中では、昔の華やかな姿がひらめく場面がある。背筋が伸び、両袖を大きく広げて輝くような動きである。そして、また思いに沈むような静かな動きに戻る。女は老いて同時に若い、それが舞にあらわれるのである。老女の舞は微妙な美しさとそこに吸いこまれるような感動がある。」老いには、さまざまな制約がある。しかし、老女のように輝きのすべて失うことではない。今後も、会員相互の親睦と研修を深めるなかで、自らの歩むべき道を学び、輝ける活動を共に進めていけることを切に願っている。



(副会長 佐々木敏男)

一 関東地区会

「竹頭木屑」のころをもって

会長 皆川 修

退職校長会一関東地区会が「竹頭会」として発足したのは昭和38年のこと。岩手県公立学校退職校長会が誕生する2年前のことである。

竹頭会の名称は、「竹頭木屑（ちくとうぼくせつ）」が由来。役に立ちそうもない、竹の切れ端や木を削ったときの屑を捨てずにとっておき、後で役立てたという故事にならったもの。退職後も使いようによってはまだまだ役に立つぞという思いを込めて名付けられたという。

市町村合併により、平成17年「東磐井郡退職校長会」から「退職校長会一関東地区会」と名称が変わり現在に至っている。

平成27年度からの活動状況の概要は次のとおりである。

1 組織運営

(1) 会員数の推移

平成27年	140名	(会長 和賀成夫)
28年	132名	(会長 和賀成夫)
29年	128名	(会長 和賀成夫)
30年	130名	(会長 小原雪男)
令和元年	129名	(会長 小原雪男)
2年	128名	(会長 小原雪男)
3年	126名	(会長 小原雪男)
4年	114名	(会長 小原雪男)
5年	111名	(会長 小原雪男)
6年	105名	(会長 皆川 修)

この10年間で35名の減となった。学校数の大幅な減少により地元出身校長が減っており、遠からず100名を割ることが予想される。

令和6年4月1日現在の年齢構成は次のとおり。

60代27名（26%） 70代31名（30%）
80代36名（34%） 90代11名（10%）

80代以上が4割以上を占めており、高齢化が進んでいる。

(2) 組織運営

本会の前身である竹頭会の発足当時は、会長と事務局員の2人体制で会を運営していた。その後、昭和41年に規約が作られ、徐々に組織が整えられていった。現在は、総会で会長、副会長、監事、代議員が選出され、更に、会長が理事、地区委員、事務局員を委嘱している。総会で会務を議決し、理事会や事務局会議で話し合いをもちながら事業を推進している。

2 主な事業と活動状況

本会の活動目的は、会員相互の親睦と福祉の増進を図り、生涯学習の充実を目指すことにある。

(1) 慶祝者祝賀会と新会員歓迎会

5月に定期総会を開き、活動方針や事業内容等を決定する。総会後には「米寿・喜寿」の祝賀会と新入会員の歓迎会を盛大に行っている。

なお、新型コロナウイルス感染症流行のため、令和2年の総会は理事会をもって代行した。令和3年は文書議決でしのごこととなった。祝賀会と歓迎会も中止となった。

(2) 会員研修「竹頭会研修会」

会員研修会は、昭和59年に始まり現在まで引き継がれている。この研修会の特徴は、外部講師を招くのではなく、会員が互いに講師となり、郷土の歴史や先人の偉業、教育活動などをテーマに、研究や実践してきたことを発表していることである。平成27年からの歩みは次のとおり。

- ・佐藤牧子「子どもに豊かな心を～おはなしばちばちの活動～」
 - ・小原雪男「東地区の戦争慰霊碑」
 - ・佐藤雅彦「江戸中・後期大東町大原の俳人伊東餐英について」
 - ・永澤國雄「激変する地域と共に生きる～竹頭会会員として生きた22年を振り返る～」
 - ・鈴木功「岩手県指定無形民俗文化財一関市大東大原水かけ祭りについて」
 - ・菊池徳夫「ハホト・ハヘイ・ロニトから紙芝居・かるた・和歌集まで～ピンチとチャンスはある日突然に～」
- *ハホトはドミソ ハヘイはドファラ ロニトはシレソの和音を表している
- ・小原雪男「私の舞台人生～こんな裏方をやりました～」

どの研修会も誰もが知っている講師であり、身近な内容が多いので、親しみをもちながら拝聴している。会員にとっては貴重な生涯学習の場となっている。

なお、令和2年から4年までは、新型コロナウイルス感染症流行のため開催されなかった。



【小原雪男氏の講演】

(3) 県研修・親睦会「一関東大会」

第44回県研修が平成29年9月14日～15日の2日間、東山地域交流センターを中心に開催された。本地区での県研修は、昭和58年、平成13年に続き3度目である。

特筆すべき一つに宿泊場所がある。東磐井には200名を受け入れる宿泊施設が無いので、「平泉ホテル武蔵坊」を利用したのである。バスでの遠距離輸送は時間との闘いでもあった。

記念講演は、高エネルギー加速器研究機構加速器研究施設早野仁司教授による「ILCと人類の未来」。アトラクションは、東山中学校生徒による合唱と、大東高校生徒による鹿踊り。2日目の見学研修は、東山町松川の「石と賢治のミュージアム」という内容であった。

参加者の感想を一部書き留めておく。

「細部まで配慮が行き届いた周到な準備」「心のこもった接遇」「ILCは未来に夢をつなぐ宝物」「女生徒による鹿踊りに感動」「笑顔と歓声にあふれた親睦会」など、苦勞の報われる感想がたくさん寄せられた。会員が総力を挙げて取り組んだ結果であり、竹頭会の更なる結束を生んだ。正に『春風以接人 秋霜以律己』の心意気が伝わった県研修となった。

【千葉喜代一氏所有の盆栽】

祝賀会や研修会で席飾りとして格式を高めている



(4) 現職校長との交流会「絆の会」

「絆の会」は、退職校長と現職校長との交流の会であり、竹頭会発足のきっかけとなった会である。新型コロナウイルス感染症流行のため中止となった令和2年から3年間を除き、毎年続けられている。東日本大震災以後は、「鎮魂の歌」を捧げてから会を始めている。

退職後の人生を生き生きと話し合う会員、かつての教え子と和気あいあいと会話を楽しむ会員など、「胸襟を開いて語り合おう」という趣旨は、半世紀以上にわたり引き継がれている。

また、東磐井の伝統ある謡曲「四海波」で場を引き締め、座踊「おいとこ」で会を盛り上げるなど、退職校長と現職校長の親交が一層深められている。



【現職校長もまじっての祝謡】

(5) 会報「竹頭だより」の発行

「竹頭だより」は会員向けの情報誌で、本年度までに57号を積み上げてきた。平成26年から編集委員を委嘱し、年2回発行している。主な内容は、竹頭会会長や副会長の巻頭言、各種事業の振り返り、新会員や本地区に転入された現職校長の紹介などである。シリーズものも好評を得ている。「いきいき人生」は、趣味や特技をいかして活動している会員を直接取材して取り上げたもの。「思い出の一枚」は、心に残る思い出の写真とそのエピソードを語ったもの。いずれも、会員の相互理解を深める内容であり、人生を楽しむ姿から元気と希望をいただいている。

また、昭和62年に竹頭会結成20周年を記念し、会誌「竹頭木屑」の第一集が随筆集として発行された。これまでに六集を数え、随筆や研修会のまとめなど、竹頭会の歴史を伝える貴重な財産となっている。



【第4集（平成16年）】

3 今後の展望

(1) 会員数の減少による事業の見直し

会員数の推移は前述のとおり。会員数が減っている大きな要因の一つに学校数の減少がある。平成27年24校（小16・中8）、令和6年16校（小10・中6）と、ここ10年で3分の2に激減している。7年度は新会員がなくさびしい年となった。来年、再来年の退職校長は2名で、その後も1～2名の見込みである。このような中、財政の逼迫により、平成6年の総会において、やむなく会費の値上げを決めざるを得なかった。昨年度から、役員会等で今後の事業内容の見直しや経費の節約について検討している。会員の努力と協力のもとに「会したら議す、議したら決す、決したら行こう」決意で臨みたい。

(2) 多様化する弇事への対応

コロナ禍以降、家族葬や短期間の日程など弇事のあり方が多様化している。日頃から会員個々の状況を的確に把握するとともに、逝去会員の迅速な連絡と丁寧な対応を取ることができるよう努めたい。また、情報伝達についてよりよい方法を検討する必要がある。

これまで先輩の会員が築き上げてこられた竹頭会の歴史に感謝と誇りをもちたい。一方、厳しい財政の現状に鑑みて、背伸びをせずにできることを着実にやり遂げていきたい。

「竹頭木屑」のころをもって。

（事務局長 櫻井 博勝）

気仙地区会

「東日本大震災津波からの復興と気仙会」

会長 千葉勝也

1 50周年以降の主な歩み ◆◆◆◆

昭和40年に気仙会が発足して以来、その歩みをふり返る時、平成23年3月11日に発災した東日本大震災は、最も大きな出来事であった。会員14名が犠牲となり、家族を失い、住む家を流された会員も数多く、また、管内の多くの学校も被災し、気仙会としてその対応に奔走した。それゆえ、創立50周年後の平成28年度からの10年間（佐藤善士12代会長：平成27年度～4年間、千葉勝也13代会長：令和元年度～6年間）は、大震災からの復興が地域の大きな課題であり、会員もそれぞれの立場で復興に関わり、また、本会としても、大震災を後世に語り継ぎ、それをまとめ、広く管内外に発信した時期でもあった。この間、平成28年度には、第43回県研修・親睦会「気仙大会」を開催、そして、平成30年度には、大震災により流出した本会46年の歴史の復活となった「50周年記念誌」を発刊した。

こうした中、令和2年に入ると、新型コロナウイルスの流行により、事業の自粛を余儀なくされた。それでも「出来そうなことから」という構えで、気仙会報発行、新会員予定者との懇談を継続しながら、新たに役員が訪問しての慶祝者への記念品贈呈、管内小・中学校におけるコロナ禍対応の実態把握を行った。その後も、新型コロナウイルスの終息状況が見通せず厳しい状況ではあったが、当地区の感染状況を踏まえ、感染対策を講じて、グラウンドゴルフの集い、秋季研修会、感謝状贈呈式、総会を再開。そして、令和5年度の慶祝会・新入会員歓迎会・交流親睦会、地区教育懇談会の開催をもって、本会の事業は令和元年度以前のように、「会員が集い、共に活動する」ことを大切に、現職の校長先生方ともつながりをつくりながらの事業推進となった。この間、大震災から10年となった令和3年度には会誌「鱸衆」第7号を発刊、令和6年度には県研修・親睦会「気仙大会」の開催とともに、総会において、役員選考委員会の活動全般を定めた「役員選考規定」が議決された。

2 大震災を後世に、教訓の継承を ◆◆◆◆

(1) 県研修・親睦会「気仙大会」

この10年、当地区において県研修・親睦会を二度開催している。

1回目は、平成28年9月15日・16日の2日間、

大船渡市を会場に222名の会員が参加しての第43回県研修・親睦会「気仙大会」の開催である。復旧・復興工事が進む中において、大震災の被災地として初めての開催となる大会であった。研修の中心に「大震災と復興」を据え、大船渡プラザホテル（研修会・親睦会）での石木幹人氏（前岩手県立高田病院長）による記念講演では、県立高田病院が取り組んだ震災時の医療と地域医療について学び、翌日の大船渡市立博物館（見学研修）では、被災の状況と復旧・復興への道筋を捉えるべく、大震災からの5年間を写真と資料で巡る「東日本大震災大津波写真展」の見学と「津波映像」を視聴した。また、歓迎アトラクションでは、平成15年に大船渡市日頃市町長安寺地区で結成された「チンドン寺町一座」による軽快な演奏と乗りの良いリズム口上で、会場内が和やかな雰囲気包まれた。そして、大船渡中学校3年生による東日本大震災犠牲者に捧げる「鎮魂の歌」は、力強く澄みきった声で会場を盛り上げ、大震災のために各地に散り散りになった生徒のために作った「群青」の歌声も、被災地ならではの取り組みとして感動を与えた。

2回目は、令和6年9月19日・20日の2日間、陸前高田市を会場に208名の会員が参加しての第50回県研修・親睦会「気仙大会」の開催である。人々の努力によって復興した陸前高田市の姿を実際に見、肌で感じていただきたいという思いから、大会テーマを「東日本大震災からの復興・創生に学ぶ」とした。陸前高田市民文化会館（奇跡の一本松ホール）での研修会。河野通洋氏（八木澤商店代表取締役）による記念講演。大震災で蔵や店舗も全て流された中、途方に暮れる従業員に対し「従業員は解雇しない。絶対に蔵は復活させる」と約束。先が全く見通せない状況での河野氏の凄絶な復興への歩みは、会員の心に深く刻まれるものとなった。また、米崎小学校5・6年生による重倉太鼓。会場に響き渡る力強い太鼓の音とともに、大震災を乗り越える希望の光のように輝いていた児童の姿に感動を覚えた。そして、高田第一中学校3年生による合唱。「市民歌」に込めた大震災前の陸前高田の美しさ、「校歌」からの統合して新たな歴史を築く決意、「空～ぼくらの第2章～」の大震災にあっても希望を持って、このふるさとで生きていくといった、3曲それぞれ

の想いが伝わり心に響くものとなった。加えて、研修会の締めくくりとして、甚大な被害に加え、14名の会員を亡くした気仙の地で、作曲者である太田代政男先生の指揮のもと、未来をつなぐ中学生とともに参加会員で「鎮魂の歌」を大震災の犠牲者に捧げた。また、会場をキャピタルホテル1000に移しての親睦会も盛会であった。とりわけ、気仙会会員有志の陸前高田市広田町の「御祝い」の踊りにより会場は一気に気仙らしさで盛り上がった。そして、翌日の陸前高田市立博物館・旧吉田家住宅主屋の見学は、歴史的なことはもとより、先人の思いを継承していく「つなぐ努力」を学ぶ良い機会となった。

(2) Dブロック研修会（気仙・釜石）

コロナ禍の令和4年7月22日に、気仙会の主管のもと、発災から11年4ヶ月を経る中、復興を目指して歩み続ける陸前高田市を会場に、62名が参加してのDブロック研修会を開催した。後世に語り継ぐためにも、研修を通じて町の歩みを感じ取ってほしいとの想いを込め、テーマを「震災を後世に～大震災からの復興を考える～」とした。陸前高田市コミュニティセンター（シンガポールホール）での研修会は、震災当時の学芸員の方々でただ一人命をつなぎ、市立博物館の再建に尽力されていた陸前高田市立博物館副主幹兼主任学芸員の熊谷賢氏による、「蘇る博物館」と題しての講演であった。被災した文化財は全56万点、内一次レスキュー活動で46万点を救出。今なお、細やかな安定化処理作業を進める中、先人の偉業・遺志や亡き同僚の想いを継承し、「陸前高田を残す」との強い気持ちで11年余りの年月を復興に取り組み続けている姿に感じ入った。講演後は、オープン前の真新しい館内を、講演で示された映像や説明を重ね合わせながら見学した。そこにある「高田の風土・自然・文化・暮らしを後世に引き継ぐ願いが込められている。ふるさとの宝を市民と共に守る。文化財の残らない復興は、本当の復興ではない」という、新しい博物館の真の姿を心に刻んだ。

(3) 記念誌・会誌・小冊子への取り組み

ア 50周年記念誌の発刊

大震災により本会46年の歴史資料が失われた中、気仙会発足50年の足跡をたどり、その歴史を記録し後世に残すことの意義を考え、平成29年度から編集作業に取りかかった。そして、50年の時間を復活させるべく、過去の教育関係資料等、会員をはじめ関係機関から資料提供をいただきながら、平成31年2月に発刊となり、先輩諸氏が英知と情熱を結集し、積み重ね蓄えてきた魂が息づいている50年の時間を見つめることができた。また、副産物として、

会員の提供により、第1号から今日までの全ての「気仙会報」を整えることもできた。

イ 会誌「鱸衆（ともし）」第7号の発刊

大震災の様子を後世に残すため、平成23年12月に「東日本大震災特集号」として発刊した第5号。そして、復興と防災をテーマに、平成27年2月に「あの日から3年…」として発刊した第6号。それに続き、令和3年12月には、「忘れまい、伝えたい」という会員の思いをコロナ禍の日常生活とともに綴った、第7号「東日本大震災から10年、そしてコロナ禍」を発刊した。

ウ 小冊子の作成…第50回県研修・親睦会「気仙大会」に向けて

悲しみに打ちひしがれ、何ともできぬ歯がゆさを感じ、ただ呆然と立ちつくすだけの中から復旧・復興へ一歩足を踏み出し努力された方々を忘れまい。それゆえ、亡くなられた14名の会員に思いを寄せながら、大震災への気仙会の対応や復興に向け努力された会員の姿を発信することが、気仙会に課せられた責務と考え、第50回県研修・親睦会「気仙大会」の開催にあたり、小冊子「悲しみ・絶望の中から…希望の明日へ～東日本大震災からの復興と気仙会員～」を発行し、配付した。

3 「つなげる」・「つながる」ことを

大震災以降、管内の小・中学校では防災教育全体を見直し、防災学習を盛んに進めている。教育の力は決して小さくはなく、学校で学んだことは生涯にわたり心に留め置かれるものと思う。そして、子どもたちが、今、学んでいることを次世代に語り継ぎ、ふるさと気仙が豊かで魅力ある地域にと願うばかりである。それだけに、「つなげる」ということにおいて、気仙会としても、大震災を教訓に犠牲を最小とするため、経験した多くのことを後世に語り継ぎ、教訓を継承していくことに力を注いでいきたい。

また、豊かさの中「価値観の多様化・連帯感の希薄化」で社会生活も様変わりしていると言われて久しい。そこにコロナ禍での生活が重なり、今は、人と人が顔を合わせる事が難しい時代となり、分断されているようにも思えるだけに、「つながる」ことの価値の高まりを感じる。このことは、気仙会として、大震災からあらためて学んだ「人は一人では生きられないこと」や「目的をみんなで共有し活動すること」にも通ずる。それだけに、本会の運営においても「つながる」ことを大切にしていきたい。



(事務局長 松村 仁)

釜石地区会

「次の10年に向けて」

会長 前川 清 志

はじめに ◆◆◆◆

釜石地区退職校長会は、昭和45年（1970）結成以来「会員相互の親睦を深め、連帯意識の高揚と一人ひとりの生きがいの創造を目指すとともに、当地区の教育の振興に資する」ことを目的として活動してきている。

東日本大震災・津波から14年が経過し、防潮堤、区画整理、高台移転、復興の核となる施設の整備、安心安全な住まいの整備などの復興事業は終了している。復興まちづくりが着実に推進されて居住環境が改善し、暮らしも元通りになりつつある。あの震災で犠牲になられた方々のふるさとへの思いを受け継ぐこと、そして、東日本大震災津波の事実と教訓を確実に次世代に伝承し、復興の姿を国内外に発信することは、この災害を経験した私たちの責務である。復興は、まだ終わっておらず、地域を支える人口の減少、被災された方々のこころのケア、地域コミュニティの維持発展などが課題となっている。併せて、将来、発生が予想される日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震及び北海道・三陸沖後発地震に対しても、過去の災害の経験と教訓を忘れず、常に災害に備え、津波による犠牲者を決して出さないという強い決意で対策に取り組まなければならない。

釜石地区退職校長会の会員数は減少傾向にあり、年齢構成のアンバランス、物価高騰に伴う予算執行の難しさ、活動できる会員の固定化など多くの課題に直面している。さらに、いわゆる「役職定年制」の導入によって60歳以降の働き方が見直され、新入会員勧誘の在り方や退職校長会としての活動の進め方に少なからず影響が生じており、その対応が急務となっている。このような状況を踏まえながら、これまで多くの先輩方が築いて下さった伝統と釜石地区ならではのよさを生かしながら、その継承とさらなる発展をめざしたい。

1 組織運営の概要 ◆◆◆◆

定期総会を5月に開催し、活動方針、活動計画予算及び役員が決定されて、その年度の活動がスタートする。

運営をスムーズに実施するために会員の居住地を基にして班を設定し、各班から会務を執行する理事を選出して理事会を年2回実施している。理事は各班の班長を兼務し、班員に配付物

を届けながら班員の状況を把握して、必要に応じて理事会の際、班員の声を届けていただいている。地区外に居住している会員も一つの班として事務局が同様に対応している。

地区校長会の事務を担当する事務局会議は年間7回程度実施し、主に地区活動の原案の協議や県退職校長会の行事等への対応、地区内の諸課題についての状況確認や情報交換などを行っている。

しかし、年々会員の高齢化が進み、会員数も減少傾向にあり、活動できる会員が固定化されている。さらに、令和6年度の定期人事異動から管理監督職勤務上限年齢制（いわゆる役職定年制）が導入されることによって60歳以降も学校で教諭または講師として勤務している会員が増え、会議や研修等に参加できない、役員を引き受けることが難しいという声があり、早急に対応しなければならない課題である。

2 主な事業内容及び活動状況 ◆◆◆◆

(1) 研修活動

ア 退職校長会・現職校長会・日本教育会釜石地区会合同研修会

昭和59年度から「退職・現職両校長会合同研修会」として開催していた。研修会では、地区内の企業経営者や有識者を講師にお迎えして、組織マネジメントや人材育成、地域の歴史や文化等に関するご講演をお聞きし、地域社会の発展や変化、学校教育に求められていることなどについて学んでいる。研修会後には講師を囲んで懇親会を開催し、会員の親睦を深めるとともに地区内の教育関係者との情報交換を行っている。

しかし、令和2年度からの4年間は、新型コロナウイルス感染症の流行及びその感染予防のため、研修会を実施することができなかった。



令和6年度合同研修会の様子

令和6年度は、5年ぶりの開催となり、「日本教育会釜石地区会」との合同研修会として実施することができた。研修会の講師として、藤勇醸造株式会社専務取締役の小山和宏氏をお迎えして、「醸造の歴史と藤勇の今」について、貴重なご講演をお聴きする機会を得た。

イ 「学校へ行こう」月間

退職校長会と学校現場との日常的交流を深めることを目的として平成30年度から実施している。地区内の6～7校を選定して10月初旬に日程を調整・設定し、訪問を希望する会員3～6名が、1時間30分程度で授業参観、校舎・施設の見学、校長先生との懇談を行っている。

大きな成果としては、子どもたちの明るく素直な姿、それを教え導いている先生方の真摯な指導を拝見するとともに、学校が抱えている諸課題への対応について現職校長の本音をお聞きすることができたことである。

令和5年度からは、再任用教員（教諭・講師等）として学校現場で力を発揮されている何人かの会員の、元気で若々しい姿から大きな刺激をいただいた。また、参加された会員からは、かつてご自分が勤務された学校を訪問し、ご自分の教え子が教職員として立派に活躍している姿を参観することができて感激したとの感想もあり、貴重な時間を過ごすことができた。

(2) 福利厚生活動

ア 米寿・喜寿慶祝会並びに歓迎会

毎年、定期総会の懇親会と併せて実施している。慶祝会では全国連合退職校長会からの賀詞、岩手県退職校長会からの記念品の伝達、さらに地区退職校長会からの祝い金などが贈られ、これまでのご活躍を称えるとともに、ますますのご健康とご長寿を会員一同で祈念する会としている。

歓迎会はその年度の新入会員を盛大に歓迎し、これから一緒に活動することができる喜びを分かち合っている。

イ 叙勲祝賀会

昭和58年度から叙勲対象者があった場合に祝賀会を実施している。最近では、平成30年秋の叙勲で瑞宝双光章を受章された会員を、令和元年度の米寿・喜寿慶祝会に併せてお祝いした。

(3) 情報活動

ア 会報「碧海」の発行

昭和63年度に創刊号を発行し、令和6年度で第35号を発行することができた。

作成に当たっては、会員の中から編集委員を委嘱して事務局がそれに加わり、原稿執筆の依頼、原稿の取りまとめ、挿絵の選定などの編集作業を行っている。会員からは、これまでの自分の在り方や日常生活に言及したもの、地元の

産業や歴史に関するもの、家族との旅行やふれあいを描いた作品など、多岐にわたるテーマで様々な観点から自らの思いや考えが述べられ、多くのことを学ぶができる珠玉の作品が毎年、寄せられている。

平成29年度からは、定期総会の出席確認に併せて会員から近況を報告していただき、それを取りまとめて巻末に掲載している。さらに、平成28年度からは定期総会の資料も掲載し、地区校長会の大切な活動記録の役割も果たしている。

なお、表紙は第28号から水色に統一している。新型コロナウイルス感染症が流行した令和2年度からの4年間は研修等で会員が参集する機会を設定することができなかったが、この会報「碧海」は休まずに継続して発行してきた。

令和6年度は、原稿の印刷・丁合・校正を編集委員会で行い、その後、業者に表紙の作成と製本を依頼して大幅に経費を削減することができた。また、会員には可能な限りメールで原稿を送信していただくように依頼し、編集委員が原稿を入力する負担を大きく軽減できている。



会報「碧海」第26号～第35号

おわりに

令和2年、新型コロナウイルス感染症が世界中でパンデミックを引き起こし、感染防止のため三密を避けるなど日常生活に制限が課せられた。危機的な事態に直面し、予測が極めて困難で先行きを見通すことができない中で、正解のない問いにどのように立ち向かうのかを常に問われ続けてきたように思う。そのような状況でも退職校長会の活動を継続し、会の活動の発展と地域に貢献してきた諸先輩方の努力に敬意と感謝を表したい。

我々は、公立学校の校長として得た豊かな経験と識見を現職校長をはじめ若い先生方に確実に伝えるとともに、引き続き教育現場に寄り添いながら、これからの教育を積極的に応援することが大切なのではないかと併せて、会員相互の交流と親睦を深め、会員一人一人の生きがいづくりを支援し、健康で活力ある長寿社会の推進を目指すことが今まで以上に必要であると考える。

今後、退職校長会の活動をさらに充実発展させなければならないと強く思う。

(事務局長 千葉 伸一)

山田地区会

「50周年以降（平成27年から10年間）の歩み」

会長 山崎 喜六

はじめに ◆◆◆◆

平成23(2011)年3月11日のあの震災以後、山田町の人口、児童生徒数も減少の一途をたどっている。岩手県公立学校退職校長会が平成26年に結成50周年を迎えて以後のこの10年を振り返ってみたいと思う。

町の復旧・復興は日を追うごとに進み、以前の街の様相は戻りつつあるが、国道45号線沿いは建築物が少なく(将来的にまた、津波があったときに被害が大であるということで建造物は建てられないとのこと)、住宅の多くは高台へ移転している。また、町外に移転した方もかなりの数いるようである。

日本各地、世界中から色々な御支援、お力添えをいただきながら町も少しずつではあるが活気を取り戻しつつあるように感じている。

山田町も全国的な流れと同様に少子高齢化の波は東日本大震災の影響もあろうが、確実に進んでいる。その一例は学校の統廃合にも見ることができる。

小学校9校、中学校2校の11校が震災前・直後にはあったのが、令和2年(2020年)には小学校3校、中学校1校に統合。令和6年(2024年)には小学校2校となり、山田町には小中学校は3校となった。時代の流れとはいえ淋しい限りである。

1 組織運営の概要 ◆◆◆◆

山田地区会の県退職校長会50周年以後の組織運営は、東日本大震災(平成23年)の後、台風10号(平成28年)の自然災害、新型コロナ禍(令和2年)などもあり会員の高齢化や体調不良などと相まって役員の改選もままならずの状態ですと来たような感じがしている。役員をしていただいた会員各位には頭の下がる思いである。

役員は会長1名、副会長1名、会計監事1名、事務局長1名、事務局次長1名、班長若干名を置いている。

会長 山崎 喜六氏(平成27年度～令和7年度)
長年引き受けていただいている。

副会長 萬 欣也氏(平成27年度～令和4年度)
濱登長一郎氏(令和5年度～6年度)

事務局長 濱登長一郎氏(平成27年度～令和4年度)
福士 久雄氏(令和5年度～6年度)

上記の方々を中心にこの10年の運営を行ってきた。

小さい地区ながら、県内のどの地区とも同様に広範囲の地区に会員が散らばっている。南から船越地区、織笠地区、山田地区、大沢地区(豊間根地区を含む)の4地区に班長をおいている。通信等の配布をしていただきながら会員との情報交換もしていただいている。震災以後、当地区を離れた会員2名へは郵送で配付している。

以下、50周年以降の10年間の歩みを振り返り山田地区会の活動状況の報告とする。

2 主な事業内容・活動状況 ◆◆◆◆

(1) 総会、懇親交流会での会員相互の親睦

会議は年1回の定期総会・懇親交流会を県の総会後に持っている。この10年の状況を振り返ると、平成28、29年ごろまでは会員の半数強が参加して行われ、懇親交流は大いに盛り上がっていた。平成30年、令和元年になったら半数を切る参加者となってしまった。その要因は何かと考えると、会員の高齢化と高齢化に伴う体調不良者が多くなってきた事によるものと考えられる。そして、令和2、3年は数か月間でパンデミックと言われる世界的な流行となったあの「新型コロナウイルス」のため、県の総会等も中止になった。当然、当地区も中止せざるを得ない状況であった。令和4、5、6年は「コロナ」の5類移行に伴い世の中も落ち着いてきたこともあり、令和4年はマスク着用で3年ぶりの総会を開催した。開催時間も日中(13:30～)として実施した。懇親交流会は実施しなかった。

令和5年も同様に開催した。この年に9年ぶりの役員改選が行われた。山崎喜六氏に会長として再登板していただくこととなった。令和6年度は午前10時30分から総会。その後、昼食を取りながらの情報交換会を実施した。久しぶりのためもあり相互交流・親睦が図られたように感じた。

山田地区会の最大の課題は会員の高齢化と新加入会員が少ないことである。会員の平均年齢は令和7年3月で80.8歳である。この10年で新加入会員は4名である。10年前は24名の会員数が現在は20名である。そのうち、80歳以上

は13名である。この先がどうなるやら心配は尽きない。

(2) 研修会への参加、教育関係諸団体の活動への参加

ア 研修事業

- ・ 県研修会には開催地が当地区から遠距離というケースである場合は少ない人数の参加にとどまることが多かった。地区会の現状を考えると止むを得ないとも思う。主管された地区の方々には心苦しい限りである。令和6年度の開催が気仙地区と近いこともあり、4名の会員の参加をいただいた。三陸道が震災後開通したこともあり、小1時間で会場に行くことができたので早く参加していただくことができた。
- ・ 現職校長会との研修交流会は「コロナ」や学校統廃合の関係等で実施できないこともあったが、可能な限り実施した。学校統廃合の話題は平成30年度の時に現職サイドから提供された。統廃合の完了と思われる令和6年度は新山田小学校の校舎見学、給食の試食会（従来山田町では給食がなかった）、交流会を実施した。
- ・ Eブロック研修が岩泉地区の主管で平成30年度に実施され、山田地区からは5名が参加した。研修と親睦を深めることができた有意義な研修会であった。当地区会は令和6年度Eブロック（宮古・山田・岩泉）の当番であったようであるが、何年か前の県の会議で会員の少ない地区では実施を見送ってよいとの話があったとのことで見送ることとした。大変ご迷惑をおかけした。

イ 諸団体等の活動への参加（社会参加活動）

地区会として特に取り組んでいる活動はないが個々人が地域で社会貢献活動（ボランティアを含む）、趣味の会での活動、諸団体の活動等々で個性や能力を生かして活動し、地域の一員として大いに活躍している。

- ・ 山田町の「芸術祭」では会員の中には日ごろ積み重ねた自分の研修・技術を絵、書、衣類、小物などの作品として出展して参加している。
また、その期間中に見学者として参加支援している会員も多数いる。
- ・ 山田町生涯学習本部主催の「まちづくり、人づくり、町民のつどい」では著名人の講演会を行っているが、講演を聞き入って研修を積む会員も見受けられる。

ウ 福利厚生事業

事業の重点の一つに「交流を図り、情報を交換し、会員相互の親睦を図る」ことを掲げている。

定期総会後に親睦会を行っている。その中で、米寿、叙勲受章の方々を祝う事と新入会員の歓迎会を併せて行い会員相互の親睦交流を深めている。近年は「コロナ」や諸般の事情などで開催できないのが現状である。物故会員には地区会長の弔辞と地区会からの花輪を献花して弔意を表している。

おわりに

この10年（平成27年～令和6年）を振り返ってみると、前半は東日本大震災からの復旧、復興に目途がたち、先を見つめ始めた時期であったように思える。地区会の会員も生活根拠地が定まり、普段の日常を取り戻しつつあったように見えた。一方、この時期に熊本地震（平成28年4月14日）が起き、「今度は九州か」と思ったことを覚えている。この年の8月30日には台風10号が岩手県に上陸し、沿岸地域に大きな被害をもたらした。自然災害の多さが印象に残っている。

中盤（令和2～4年頃）は新型コロナウイルス感染症に振り回された時期で会員の行動も家の周辺が多かったと感じた。行動するときには常にマスクをするというスタイルが日本国中に定着した感じがした。会員が感染したという情報は聞こえてこなかったので三密をさけたり、手洗い、うがいを徹底して気を付けたためと考える。

後半の令和6年1月1日には能登半島地震の映像が正月のテレビから流れて、「え～、またか」と自然災害の恐ろしさをまざまざと見せつけられた。さらに、あの震災から14年目の3月11日をまもなく迎えようとする2月19日に発生した大船渡市の山林火災。この原稿を書いている令和7年3月1日現在、鎮火の目途はたっていない。

退職校長会の活動状況に関係のない災害のことを書いてきたが、この10年は災害などが多く気候変動をまざまざと実感した期間であった。

拙い文章でこの10年の歩みを振り返ってきたが、少ない会員の山田地区会はこれからも親睦、交流を深めていきたいと思っている。

（事務局長 福士 久雄）

宮古地区会

「原点回帰～新たな歩みを一歩ずつ～」

会長 宮城 忠 芳

1 宮古地区会の発足 ◆◆◆◆

宮古地区会は、昭和48年に発足して以来、令和6年度で52年の歴史を持ち、現会員数103名で精力的に活動している。宮古地域出身者だけでなく縁あってこの地で教育活動を行い、そのまま会員として入会し活動している方も少なくない。6年度の最高齢は102歳、平均年齢は76.6歳である。

2 東日本大震災を経験して ◆◆◆◆

三陸沿岸地域で活動する地区会にとって、東日本大震災の経験や影響を抜きには、十数年余りの過去を振り返ることはできない。変わり果てた故郷の姿を目の当たりにして深い絶望の淵に落ちながらも、行方不明になった肉親の姿を探し求める人々を横目に「この惨状を後世に伝えなければならない」と心を鬼にしてビデオやカメラを手に被災地を歩いて回り、涙をこらえてシャッターを押して記録し続けた先生方や市民が複数おられたという。

学校現場においても、肉親を失う悲しみに遭いながらも我が身の境遇を後回しにして、「目の前の子供達のために今できることは何か」を最優先に教育活動の歩みを進めた多くの学校があった。

自然の厳しさとその脅威におののきながらも、世界中から寄せられた支援に感謝しながら一歩ずつ歩み続けることは、多くの困難を伴った。無我夢中で復興に携わった会員の中には、震災の記憶を伝えることの大切さを認識しながらも、「正直な気持ちを言えば、震災のことは思い出したくない。映像も見たくない。」という思いを心に秘めて、日々生活している方が少なくないのである。これは、震災を伝えることの苦しさを表しているといえよう。

3 震災からの復興 ◆◆◆◆

復興初期の数年が経過するうちに、被災地を覆っていた何とも言えないヘドロの様なすえた臭いはいつの間にか薄れていき、うず高く積み上げられた瓦礫の山も徐々に姿を消した。学校の校庭や公園に建てられた仮設住宅や津波に破壊された家屋に代わって災害公営住宅が新設され市民文化会館や野球場陸上競技場等の建物が再建された。

世界中から寄せられた支援のお陰で、インフラの整備は津波によって分断された交通網にも及び三陸道や盛岡宮古間自動車専用道路の整備が進められ、自動車による移動時間は大幅に短縮された。目に見える復興の姿であった。

4 震災後の宮古地区会の活動 ◆◆◆◆

宮古地区会は、平成23年度第37回宮古大会を予定していたが、これも東日本大震災大津波の影響で中止となった。さらに10年後、震災復興の姿を発表する場とした令和2年度開催予定の宮古大会も、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で翌年9月14日に延期された後、直前の感染拡大により県内に非常事態宣言が発令されやむなく中止となった。

翌年4月の段階で山口小学校と河南中学校のアトラクション演出を断念し、午前の自主研修と午後の開会行事・講演会等を行う一日開催のコンパクトな大会運営として第2次案内を送付した。2回の延期を乗り越え、入念な感染症対策を行う宮古大会が、150名余りの参加予定者をお迎えして開催できなかったことを、今もつくづく残念なことに思う。

自主研修の会場田老地区の堤防は、明治29年と昭和8年そして今回の東日本大震災津波と、大きな被害を経験してきた。研修では、過去の被害や辛い記憶だけでなく、かさ上げされた堤防から見上げる高台の三王団地や、不幸にして堤防を乗り越えた場合に津波の到達時間を遅らせ、避難する時間を確保するために堤防下に綿密に計画されて配置された施設や道路等、住民の生命を守るための様々な工夫もご覧いただき、未来につながっていく田老地区の姿も紹介するつもりであった。

記念講演の講師は、宮古市出身で岩手県指導漁業士でもあり「お魚かたりべ」である山根幸伸さんをお願いしていた。山根さんは宮古湾の海底を含めて隅々までご存じの方である。震災前から赤前小学校の「磯遊び」に深く関わっておられ、子供達に海の豊かさや美しさ、未来へと守り続ける存在だということを体験活動を通して伝えてこられた方である。

赤前地区は、震災によって大きな被害を受けた。発災当時の校長先生が記録していた映像は、大自然の脅威と人間の営みのはかなさを伝えていて直視するのに耐えられないほどであった。数年後山根さんの講演を聞いた。その中で山根さんは、宮古湾の海底地形の特徴を語り、豊かな海が津波の被害を受けながらも、津軽石川の恵みを受けて数年後には藻場の再生が始まり、大小様々の生物が戻り再生していることを語っていた。美しいスライド映像と未来への希望があふれるお話だったと記憶している。

本番の講演では、辛い経験を乗り越え震災後宮古湾の漁業の復興に携わり、今や宮古の特産

になった「花見カキ」も津軽石川の豊かな水と比較的水深の浅い宮古湾の特徴を生かして育てていること、海中の様々な生物の営みが関連して成り立っていること、我々人間も含めて自然によって生かされていること等を、穏やかな口調で語ってくれたと思う。

震災後、困難や辛さを乗り越えてなお「海を恨む気持ちは無い」という言葉を三陸沿岸被災地のあちこちで聞くことがある。その言葉の裏には、故郷の再生や海を守り育てる強い気持ちや願いが込められている。改めて、山根さんの穏やかな口調に込められた故郷に対する強い思いや願いを参加者に感じて欲しかったと、つくづく残念に思う。

5 宮古地区会の活動

(1) 機関誌の発刊

宮古地区会の特色である活動の一つに、機関誌「蒼穹」の発刊がある。令和6年の発刊で第33号になる「蒼穹」の発刊は、「文章を読んだり書いたりすることで精神生活の活性化と向上を図ること」と「作品を通して会員相互の理解と親睦を深めること」を目的として平成4年度に始まり、現在に至っている。

令和6年度は、米寿者2名・新会員5名の作品を含めて48名の会員から58点の作品を寄稿していただいた。例年と同様に14名の編集委員による2回の編集委員会を開催し、表紙絵やカットも会員の作品を採用して、印字・校正作業を経て今年度もB5判182ページの機関誌を完成できた。



県本部や各地区会にも送らせていただき、市内の現職校長先生方にもお届けして読んでいただいている。また県立図書館や市立図書館にも寄贈し、広く県民・市民の方々にも自由にお読みいただいている所である。宮古地区会員の日々生活ぶりを知ってもらうことや往年の学校の状況等を知ってもらう意味でも有意義であると考えている。

(2) 地区会活動の今後の課題

① 機関誌の継続的発刊

今後の課題として、近況報告の寄稿者を増やすための工夫と会員数減少の中ではあが、全寄稿者数50名突破を掲げている。会員の皆様の個性や特徴・専門を生かした作品を今後とも充実させ、発刊の目的に沿った機関誌「蒼穹」の継続発刊を目指していきたいと考えている。

② 会員相互及び現職との親睦交流

会員相互及び現職との親睦交流を図ることについては、新型コロナウイルス感染症の影響を大きくうけた10年間だった。令和2年度は、総会と懇親祝賀会は実施できたが、例年11月に実施していた現職との交流会は実施できなかった。令和3年度と4年度は総会のみ実施できたが、懇親祝賀会と現職との交流会は実施できなかった。新型コロナウイルスの情報が不足し、感染症予防等の対処方法が確立していなかった状況下ではやむを得ないことだった。高齢の会員やその家族を感染症から守り、学校現場で奮闘している現職の先生方の心身の健康維持を図ることは、最優先のことだった。

令和5年5月30日開催の叙勲・米寿・喜寿祝い新入会員歓迎会は3年ぶりの開催ということもあり大いに盛り上がり、会員相互の懇親を深めることができた。11月15日開催の現職との交流会は4年ぶりの開催ということもあり、前回の研修交流会の流れを十分に浸透できなかった面があり、話題提供をお願いした現職の先生方や司会の先生に負担をおかけしたが、懇親交流の時間が不足したほどの盛況ぶりだった。6年度は懇親交流に的を絞った流れに変え、現職の先生方の抱えている諸課題や努力に共感しながら懇親交流を深めることができた。



<令和5年度の現職との交流研修会の様子>

③ 会員の減少

宮古地区会に限らず、岩泉地区会でも山田地区会でも言えることだが、学校数と地元出身の校長先生の減少に歯止めがきかない。宮古地区会では、7年度の高浜小学校の閉校によって海沿いの田老地区・崎山地区・欽ヶ崎地区・河南地区・津軽石地区・重茂地区全ての地区が、1小学校1中学校体制になる。震災前から予測できていたことだが、学校数減少の中で地元出身者や宮古に関わりの深い校長先生方の会員を増やすことが課題となっている。

宮古地区会の7年度の新入会員は無く、会員数は、何とか維持してきた100名を切る時代に入る。病気や家庭事情等によって、市内や県外に移転して連絡が取れなくなる会員も出てきた。課題満載ではあるが、それぞれの地域課題を抱えて歩み続ける学校現場を支える応援団として、次の10年間を歩み続ける宮古地区会でありたいと願うこの頃である。

(事務局長 山名 秀樹)

岩泉地区会

「平成28年から10年間の歩み」

会長 村木 登

岩泉地区会は岩泉町、田野畑村の二町村の会員より構成されています。

本会会員は10年程前は10名ほどでしたが、高齢で逝去したり、他地区に止むを得ず転居したりで現在7名になっています。会員は高齢化のため体調を崩す人もあり、数名での組織的な活動は十分とは言えない状況であります。

組織的活動は無理ではと判断しつつあり県本部と相談を進めています。

1 組織運営について

規約については従来 of 条項を活用しています。役員は会長、副会長、監事、事務局長各1名で、任期は2年であります。会議は年1回の定期総会でその年の県の報告を参考に、計画や予算などを決め活動の方向を皆のものにしてきています。ここ数年はコロナ禍で総会を開くことができず電話決裁で進めてきました。又コロナが終わってみると体調を崩す会員もあり集まりも少人数となってきています。総会後の懇親会は個々人の近況報告や情報交換であり、笑いの中に有益なことが多々含まれていたのが思い出されます。

2 主な事業内容・活動について

(1) 研修事業

① Eブロック研修・親睦会

ア 研修会の様子

岩泉地区研修会は台風10号の被災を乗り越え平成30年9月20日龍泉洞温泉ホテルで開催されました。これは宮古・山田・岩泉地区の強い連携のもとに行われました。更には県執行部にも多くのご支援を頂きました。ここにご支援いただいた皆様に厚く感謝申し上げます。

岩泉町は平成28年8月30日台風10号により、死者24人、住家全壊452戸、土木施設・農業施設・観光施設などなど多方面に無慈悲の多大な被害を被りました。私たちは町が復興に全力を注ぐ中、29年度は龍泉洞見学もできず当初計画された年度は実施できませんでした。しかし町全体が復興を鋭意やり遂げる姿を見て、更に龍泉洞の復旧を知り「わたしたちも立ちなおろう」と次の番の宮古地区会に順番を回していただき実施できたのでした。

参加者は宮古地区会20名、山田地区会5名、九戸地区会2名、県役員10名、岩泉地区会10名、来賓等2名の総勢49名でした。

開会行事は次第にそって進み佐瀬壽朗会長の

支援・励ましの挨拶、来賓の岩泉町教育委員会三上潤教育長の祝辞をいただいて、研修の講演に入りました。

研修会では県立博物館学芸員の渡辺修二氏の講演をいただきました。参加者は龍泉洞の魅力に惹きつけられるひと時でありました。

イ 講演の演題と要旨

演題「龍泉洞の魅力について」

・洞窟の形成

安家石灰岩層南部に開口している龍泉洞は石灰岩が水に溶かされてできた鍾乳洞である。高知県の滝河洞、山口県の秋芳洞とともに日本三大鍾乳洞の一つとなっている。安家洞や竜泉洞が形成された安家石炭岩層は、古生代後期から中世代ジュラ紀にかけて深海底で形成された堆積物が、プレートの移動に伴い、古ユーラシア大陸に付加したものである。龍泉洞の形成年代は2億5000万年前頃という説があるが明らかにはなっていない。

・鍾乳洞の構造

龍泉洞の特徴は、入口から百間廊下と言われる主洞が直線的に長く伸びていることである。ほとんどの鍾乳洞は曲がりくねっており、龍泉洞のような形状は非常に珍しい。直線的に伸びている断層沿いに鍾乳洞が形成されたため、このような形状になったものと考えられている。

地底湖は、第8地底湖まで存在が確認されているが第6地底湖のさらに奥に、存在が確認されていないが巨大地底湖があると言われており、龍泉洞はまだ謎が多い。

・龍泉洞の水

龍泉洞の地底湖の水が青く見えるのは、透明度の高い水の中を光が通過する際、赤など青以外の色が水に吸収されるためであることが最近分かってきている。

龍泉洞の水の透明度が高いのは、水源からの水の浸み込み口の土壌層の濾過作用や地底湖での沈殿作用によって不純物が取り除かれるためである。龍泉洞水はカルシウムが多く弱アルカリ性のため旨味があり、飲みやすくなっている。

・龍泉洞に生息する生物

天然記念物となっているキクガシラコウモリなど5種類のコウモリやトビムシ、ヤスデ、カニムシ、ホラヒメグモ、メクラヨコエビなどが生態系を成して生息している。地域固有種も多く見られ、岩泉・岩手の宝となっている。

・結び

龍泉洞の調査は道半ばである。洞窟内の空気の流れがどうなっているかなど、まだまだ謎が多く、伝えきれていない魅力がたくさんある。これからの新発見に注目していただきたい。

・親睦会

疎遠になっていた友人と久々に集った喜びがあちらこちらで認められました。また先輩後輩の中で思い出もあるのでしょう。話は弾んでおり和やかな親睦会となっております。

主催者は理事会など会のあるたびに岩泉地区の松茸を懇親会の売り物にしておりましたが不作のためやっとな味付けができる状態でそれ以上どうすることもできませんでした。済みませんでした。

② 退職・現職校長が一堂に会する研修
(日本教育会との共催)

ア 初めに

岩泉地区会は退職校長会員と現職校長会(日本教育会会員)とで年1回の研修会を開催しています。ここ10年間は次のようでした。

平成27年	身体とメンタルヘルス	畠山さゆり
平成28年	三閉伊一揆と共同	茶谷十六
平成29年	動物公園の運営	辻本恒徳
平成30年	郷土の先人に学ぶ	平正光
令和元年	今改めて豊かさを問う	吉塚公雄
令和2年、3年	コロナ禍のため中止	
令和4年	ストレスチェック制度	高橋昭三
令和5年	今求められる防災教育	森本晋也
令和6年	三閉伊一揆に学ぶ	茶谷十六

イ 令和6年講演の演題と要旨

演題「今、三閉伊一揆から受け継ぐべきもの」

南部三閉伊一揆は江戸時代末期に起きた百姓一揆です。ペリーが浦賀に来たり、外国の船が対馬・五島・蝦夷地・陸奥沿岸に度々現われる時代で、吉田松陰が密航を企て失敗し牢に入れられたり、東北の農漁民は冷害で非情の苦しみに喘いでいました。

遠野強訴が弘化4年(1847)11月19日、指導者切牛弥五兵衛、安家村俊作、忠太郎、辰之助により安家村を蜂起点として12000人が参加し行われました。12月5日御用金全免除、全員帰村一揆は成功に見えました。しかし翌年1月2日弥五兵衛は捕まり、5月斬殺されました。一揆の要求は受け入れられず、更に10月以降、俊作、与助、忠太郎は捕まり牛瀧へ流罪となりました。一揆は全面失敗であったと言えるでしょう。

遠野強訴の6年後、前回の失敗を精査し田野畑村太助、喜蔵、倉治、栗林村命助を含む45人衆が嘉永6年(1853)5月19日、小〇(困る意)の旗のもと田野畑村で蜂起、6月6日一揆は仙台領唐丹へ越訴しました。全参加者は

16000人とされています。仙台の地まで行き交渉を重ねたのです。その時の要求は政治要求3か条、生活要求49か条でした。

政治要求3か条は次のようです。

- 1 隠居中の前藩主利義(よしとも)を復職、帰国させていただきたい。
- 2 三閉伊通り居住の百姓共を仙台領民として受け入れていただきたい。
- 3 三閉伊通りを、幕府直轄領か仙台領にしていただきたい。

49か条からは1、2に留めておきます。

- 1 年貢上納額が増した。迷惑である
- 2 牛瀧に流罪になっている安家村忠太郎と俊作の兩人を放免していただきたい。

気弱になるものを引き立てた太助の「衆民のために死することは覚悟の事なれば今更命惜しむべきや」は一揆を代表する言葉として記憶されてきています。仙台藩領主より「咎めなどの儀一切なし」の安堵状をいただき帰ることが出来ました。仙台藩や幕府にまでも届くねばり強い交渉は理解されたのでした。ここに農民は「天下の民」という信念のもと、三閉伊一揆の仙台藩越訴は日本歴史上類を見ない完全な勝利に終わったと言われています。講演者は子供たちに「誇り」をもってと述べていました。

(2) 社会参加活動

日本教育会岩手県支部への私たちの支援活動を挙げます。これは「岩手の先人」第6集製作に当たり田野畑村からは故岩見ヒサさんを推薦し、平成30年に出来上がったものです。田野畑中学校校長石川健先生は令和2年12月4日に、「岩手の先人」中の岩見ヒサさんを活用した道徳の授業を実践して、生徒たちに深い感銘を与えてくれました。

各会員は各地域でそれぞれに生き生きと活動しており地域の発展に貢献しております。

(3) 福利厚生事業

規定に基づき物故会員に弔辞・香典を奉呈。

物故会員 内村慶次郎(平成2年度)
中村 奥一(令和6年度)

(4) 情報活動

会長による会報の手渡し時の会話並びに電話によって行われてきました。

3 終わりに ◆◆◆◆

この10年間の地区役員を掲げます。

会長	平成28年～30年	佐々木源良
会長	令和元年～6年	村木 登
副会長	平成28年～30年	村木 登
副会長	令和元年～6年	佐々木源良
事務局	平成28年～令和6年	村木 登
監事	平成28年～令和6年	伊藤 勝幸 (副会長 佐々木源良)

九戸地区会

「10年間の道程」

会長 日沢利光

はじめに

九戸地区会は岩手県公立学校退職校長会と同じ年、昭和40年12月に発足して結成60年を迎えている。発足時の会員数は12名であった。

1 組織運営の概要

本地区会は県北教育事務所久慈地区の久慈市・洋野町・野田村・普代村の1市1町2村（管外在住2名）76名で構成されている。

令和6年度の市町村別会員数は、久慈市51名（67%）洋野町19名（25%）野田村4名（5%）普代村0名（0%）管外2名（3%）で、平成26年に比べて20名の減少となっている。

なお令和8年度には、小学校・中学校何れも統合が計画されており、学校数が減少する予定であり、それに伴い退職校長の減少・会員数の減少が予想される。

運営組織は総会で選出された役員（会長1名・副会長2名・監事2名）と会長の委嘱する若干名の（概ね6名程度）の理事で構成する役員会によって会務の執行を行っている。

役員任期は1期2年となっているが、規約で「役員は、任期が終了しても後任役員が決まらないうちはなおその職を行うものとする」とある。

平成28年以降、役員選考が難航したことに加えて、令和になって新型コロナウイルスの流行のため諸会議が出来ず役員改選が出来なかった期間があった。

平成28年から令和4年の役員

会長	苦米地幹雄	
副会長	吉田末男	菊池誠
監事	村田武志	山田幸朗

令和5年から令和6年の役員

会長	日沢利光	
副会長	小原良樹	山田幸朗
監事	北村順	渡邊彰彦

組織運営のための諸会議は次の通りである。

《総会》年1回5月に開催し、会務報告と決算の審議、事業計画と予算の審議、役員を選出（任期2年）等を行う

《理事会》概ね年4回行い、総会議案の審議、執行任務の分担、執行状況の調整・

確認等を行う

《班長会》地区別に班を編成し、班長を委嘱する班長は会報並びに諸文書配付のほか、会員に係る情報提供に協力する

会費については、年会費6千円を総会時に納付する。郵便振替等の方法で納付する場合は、その料金は振込者が負担する。会の予算は会費を以てまかない、県本部への負担金も会費を以てあてる。慶弔費については一般会計から繰り出して基金として積み立て、年度ごとの多寡に対応している。

2 主な事業内容と活動状況

①研修事業

《県研修・親睦会》

九戸地区会主管の県研修・親睦会は、平成18年8月に久慈グランドホテルで「北の叫びと津軽三味線」と題して全日本三味線友の会会長大條一雄氏の講演と演奏会を開催している。同時に久慈琥珀博物館・もぐらんぴあ（地下水族科学館）石油文化ホール・小久慈焼工房の見学研修を行った。

その後、開催されていない。

また、会員数100人に満たない地区会では開催による負担が大きいためであろうことから開催免除となり、今後主管開催が無いものと捉えている。

他地区主管で開催される研修会・親睦会には、会員の参加希望者を募り、研修費より補助をして参加の機会を作っている。

《ブロック研修会・親睦会》

Fブロックは、二戸地区会と九戸地区会で交互に主管して企画実施している。令和元年8月20日、九戸地区会主管で開催した。二戸地区会18名、九戸地区会25名、県本部より3名の参加をいただき洋野町において開催している。

講演会場 洋野町ふるさと交流館

講師 箱石和廣氏（一般社団法人岩手県栽培漁業協会種市事業所長）

講演題 「栽培漁業とウニ種苗生産について」

講演では、ウニの種苗行程やウニの種類と分布・栽培漁業等についての説明があり、その後、隣接するウニの種苗施設とアワビの種苗施設の

見学を行った。

研修会終了後に、「アグリパークおおさわ」(洋野町の温泉宿泊施設)に移動して、来賓の洋野町長代理として副町長日當博治氏にご臨席をいただき、豪華な海の幸を囲んで親睦を深めた。



ウニの種苗施設の見学



ウニの種類

②福利厚生事業

会の重点事業として次の事業を行っている。

《定期総会後の懇親会》

懇親会は、会員相互の親睦を図ると共に会活動の活発化の上からも大切な事業にとらえ、新会員の歓迎会、米寿・喜寿者への祝いの会と合わせて実施している。また、米寿・喜寿者の貴重な体験談をお聴きする機会としている。

《慶祝・弔意事業》

米寿・喜寿を迎えられた会員に賀状・記念品を贈り、祝意を表している。

逝去された会員には、弔辞・香典を奉呈して弔意を表している。

《現職・退職校長会合同懇親会》

会の開催にあたって、現職・退職校長会の三役が合同会議を持ち、懇親を深めると共に、要領を協議して開催している。

会は、現職・退職校長が一堂に会し、教育の諸問題について情報交換と、親睦を図ることを主たる目的として開催している。現職の校長は、ほぼ全員参加している。

来賓として、教育事務所長・地区内市町村教育長を招待し、行政・現職・退職の三者が一堂に会する場として大切にしている。

③社会参加活動

退職校長会としては、組織的活動はしていな

いが、会員個々が、社会貢献として或いは自らの生きがいとして広範な社会活動に積極的に参加している。

④情報活動

九戸地区会会報を年2回発行している。内容は、会長挨拶・新会員紹介・研修会の参加報告等、会員の様子を知る端緒となっている。

全連退会報・県会報・「教育の日」の情報・他地区会会報を通して情報の提供を図っている。

また、総会、現職・退職合同懇親会、その他の会合を通し、情報交換と共有化を図っている。

3 新型コロナウイルス ◆◆◆◆

令和2年当初から、世界全体を震撼させた新型コロナウイルス感染症の感染防止のため密集することに規制を掛けた。

多くの学校が約1ヶ月に及ぶ臨時休校措置を取り、学校における各種行事も延期や縮小・中止に追い込まれた。

県退職校長会、退職校長会九戸地区会も大きな影響を受け、総会その他の会合、研修・懇親会も中止せざるを得ない状況となった。

そのような中……

《元九戸地区会会長高見吉郎氏の逝去》

元九戸地区会会長高見吉郎氏は、30年間にわたり、理事・副会長・会長・顧問として九戸地区会の活動の中心となり、会を牽引・指導してくださいました。

国際的には、岩手県青年海外協力隊参与そしてNPO少年ケニアの友岩手会顧問等々、広く世界に目を向けて活動し、不平等のある世界の子どもたちを幸福にする為の活動を私たちに説いてくださいました。

氏はライフワークとして、太平洋戦争の日本軍の敗走の悲惨さに目を向け、南洋諸島を何度か訪問しておられました。

令和元年12月92歳、「これが最後であろう南洋諸島鎮魂の旅」から帰宅したら、旅物語を期待してくれと、言って旅立っていきました。年が明けて2月19日にコロナウィルスを潜り抜けて無事帰宅した旨の連絡をいただきました。

報告会を企画する間もなく、新型コロナに罹患入院の報があり、令和2年4月15日、新型コロナウイルスのためご逝去されました。

……合 掌

今後、これまでの活動を継続し、会員の親睦を深めていきたい。

(九戸会顧問 苦米地幹雄)

二戸地区会

「秋の集い」研修会の10年をふりかえって

会長 横田 裕 幸

二戸地区会の主な活動は、研修と親睦である。例年開催している秋の研修会は、「郷土の先人に学ぶ」をテーマに、先人の偉業や生き方を学ぶ研修に取り組んできた。これまでの地区会の活動について、研修活動を中心に振り返ってみたい。

【平成27年度】防災・減災の世界的先覚者～震災予防調査会を立ち上げた田中館愛橋博士

講師は、二戸歴史民俗資料館館長、そして本地区会会員でもある菅原孝平氏に依頼した。

折しも、東日本大震災を体験して4年半がたった。二戸出身の物理学者、田中館愛橋博士が、重力、地磁気、飛行機、地震、メートル法、ローマ字など多方面で活躍したことは知っているが、詳しくはなかった。今回、地震災害を中心に、防災・減災の世界的先覚者としての業績について講演していただいた。

明治25年に設立された震災予防調査会は、現在に至る地震・津波・火山爆発等による災害対策や予知・予防を含めた調査研究の出発点であり、世界でも最初の研究機関であったという。

調査会設立は、地震による災害を科学の力で軽減・予防したいという願いから、その必要性を訴えた博士の提言がきっかけになった。

設立にいたるまでの経過や、現在の状況、博士作詞の「地震教え歌」などによる啓蒙活動についても詳しく紹介していただいた。

【平成28年度】岩手・青森県境不法投棄事件

講師は、カシオペア環境研究会顧問の生田弘子氏。演題は「あれからどうなった？日本一のごみの山～岩手・青森県境不法投棄事件～」

廃棄物は、東京ドームの約0.8杯分。県庁舎約11杯分もあった。不法投棄事案の概要、経緯、現状回復事業、排出事業者への責任追求等、分かりやすく説明していただいた。

水と土の浄化が大きな課題であること、自然環境を元に戻すためには、長い時間と莫大な費用がかかることを改めて学んだ。

汚染の事案を風化させないために、原状回復の記録の保存など、教訓を後世に伝える工夫や、跡地の活用についても、地域と連携しながら検討が進んでいるという。

【平成29年度】相馬大作がめざしたもの

講演会講師は、二戸市民文士劇実行委員長の

柴田清克氏。演題は「相馬大作の命が現代の若者に投影するもの」

二戸市出身の南部藩士、幕末思想に多大な影響を与えた相馬大作こと下斗米秀乃進は、どのように考え、生きて、その生涯に何を懸けたのかを、二戸市民文士劇の舞台制作を通し学んだこととして講演していただいた。

地元福岡の若人をまとめ上げ、質実剛健を掲げた兵聖閣のめざしたものは何だったのか。盛岡藩を救った人物としてその行動を紐解き舞台化することで、郷里を守る人材育成に命をかけた大作の姿を、舞台を支える人材育成や、二戸のまちづくり・地域づくりに寄与する人材育成につなげたいと、熱く語った。

【平成30年度】もうすぐ世界遺産～御所野遺跡の縄文文化～

「秋の集い研修会」を兼ねて、久慈地区と共同のFブロック研修会を開催した。講師は御所野縄文博物館館長の高田和徳氏。講演終了後は、館内展示室や縄文公園内の遺跡群を見学した。

平成30年、ユネスコの世界遺産登録に向けて御所野遺跡を含む「北海道・北東北の縄文遺跡群」が推薦候補に決まった。縄文遺跡は日本全国にあるのに、なぜ北の縄文文化が世界遺産なのか。

北東北の豊かな自然環境が狩猟採集の生活を支えたこと。縄文の暮らしには、四季おりおりの多用な生業と食料の獲得、貯蔵の技術と施設があったこと。

高田氏は、なによりも縄文そのものが理解されることが重要であると力を込める。それは、縄文人の心、死者の弔い、縄文人の技術、最古の漆製品、御所野の交易・交流、そして自然と一体となった暮らしと精神文化など。

日本人の自然観は、「自然が猛威をふるったら、あらがわずじっと待つ。いずれ春の恵みが来る。」であり、この「自然との共生」は縄文から受け継いできた自然観であるという。

御所野遺跡は、縄文時代中期後半に、この地にあった3つの「むら」の跡。大型竪穴建物跡や盛り土遺構、配石遺構などを見学した。

【令和元年度】久慈地区主管・Fブロック研修会へ参加

秋の集い研修会を兼ねて、久慈地区主管のFブロック研修会に参加。

会場は、ひろの水産会館UNIQUE。講師は、岩手県栽培漁業協会種市事業所所長の箱石和廣氏。

ウニの栽培漁業の歴史や現状、津波被害からの復旧や展望などについての講演であった。その後は、隣接する種市事業所のウニの大型飼育水槽を見学。箱石所長から説明を受け理解を深めた。

【令和2年度】研修のあり方についての模索

この年、新型コロナウイルス感染拡大防止を最優先に考え、総会も秋の研修会もやむなく中止した。

しかし、このようなコロナ禍の中であっても「つながりを大切に」という地区会のモットーは持ち続ける必要があるということで、研修のあり方について新たな試みを模索した。

それは、講演会の講師の方に、講演要旨を作成していただき、それを全会員に配付して研修しようというものであった。この方法であれば、講演会開催という形での研修は出来ずとも、全会員が研修に参加できるというメリットがある。

当時の地区会長、柴田孝夫氏の発案であった。

【令和3年度】「日本牧羊界の先駆者～蛇沼政恒」
この年も、新型コロナウイルス感染増大のため、「秋の集い」研修会は中止になり、会員相互の交流を図る機会が全く無くなったことは誠に残念であった。

そこで、3年度は講演会に替えて、前二戸歴史民俗資料館館長の菅原孝平氏に依頼し、二戸の先人「日本牧羊界の先駆者～蛇沼政恒」について執筆していただいた。研修資料として、全会員に送付した。

【令和4年度】コロナ禍のために研修会中止

【令和5年度】南極観測の源流と今～田中館愛橋の果たした役割～

講演会講師は、岩手日報社報道部第二部長の鹿糠敏和氏に依頼した。鹿糠氏は、日本新聞協会から派遣され、2007年第49次南極観測隊に同行した方である。

鹿糠氏は、たくさんの写真や映像を用意し、①南極の自然環境、②観測隊の2つの任務（観測部門と設営部門）、③昭和基地での暮らしぶりなどについて分かりやすく紹介。

日本の南極観測には、田中館博士が深く関わっていたという。戦勝国中心の南極観測に、敗戦国日本が参加することが出来たのは、二戸出身の田中館博士の実績が国際的に認められていたからだという。戦前からの博士の功績が、南極観測参加への道を切り開いたということであった。

興味深かったのは、「空気の化石」の話で、これは氷のことである。氷を分析することで昔の気温がわかるという。気候変動のデータ収集の重要性と、そこから未来を予測することが可能になり、未来を守ることに繋がると強調された。

鹿糠氏は、南極観測に記者を派遣するプロジェクト、その意義は恩返しであると締めくくった。東日本大震災で全国から受けた支援に対しての恩返し、南極支局を支援してくれた日本新聞協会や全国の企業等へ感謝を込めて情報を届けること、そして何よりも岩手の読者や子どもたちに希望を届けることであると。

【令和6年度】人が歴史をつくり歴史が人をつくる

講師を、前二戸歴史民俗資料館館長の菅原孝平氏に依頼して、講演会を開催した。テーマは、「人が歴史をつくり歴史が人をつくる～郷土史は生きている ONKO T I S I N～」であった。

講演内容は、まずは市教育委員会が作成配付している小学生副読本に取り上げられている9名の先人達の紹介。副読本は、地域の発展に尽くした先人、学問に大きな足跡を残した先人、政治や世界で活躍した先人など、いずれもめざましい活躍をした人々の生き方を紹介しているという。その9名とは、次のとおりであった。

小保内定身（父のつくった会舗社を引継ぎ稲荷文庫を開設して地域の人材を育てた）

小野三十郎（福岡停車場（現二戸駅）を誘致）

蛇沼 政恒（岩手で初めて牧羊業を始めた）

田中館愛橋（日本を代表する世界的な物理学者）

國分 謙吉（初代岩手県公選知事、“農民知事”）

九戸 政実（九戸城主。悲運の戦国武将）

相馬 大作（蝦夷地を守る人材育成を志した）

小田島禄郎（遺跡発掘と保存、考古学の先駆者）

田中館秀三（世界的な地理学者、戦火の中で貴重な文化遺産を保護）

講師の菅原氏は、縄文時代から昭和に至るまでの二戸の郷土史を年表にまとめ、先人達の功績や生き方を詳しく紹介した。

郷土や地域に関する研修、伝統・文化や歴史に関する学びは大切なことであると思われる。今後も続けていきたいものである。

（副会長 戸来 鉄男）



宮古市 三王岩

4 今後の課題と展望

4 今後の課題と展望

(1) 組織の維持と財政基盤の確立

この10年間の少子化の進行により、学校の統廃合が加速度的に進んだ。このことは、私たちの組織を構成する退職校長が減少することであり、組織の維持に赤信号を灯すものである。

さらに、ここ数年の退職後の本会への加入率をみると、平成30年度は県全体で92.4%だったものが、令和元年度は90.9%、その後、87.6%、84.2%、85.6%、80.4%と減少傾向に歯止めがかからなかった。そのため、定年を迎えた退職校長に直接働きかけるなどのきめ細かな対応を推進した結果、令和6年度の加入率は90.8%までに回復した。

しかし、定年延長にともなう役職定年制度の導入や学校数の減少により、入会者の減少傾向が続くことが予想される。今後は現職校長との日常的な交流の充実を図り、本会活動への理解を深める取り組みを進める必要がある。また、本会の運営は会員の会費のみで賄われている。これまでは種々の事業を順調に推進することができたが、会員数減少に加え、諸物価の急激な高騰は運営に暗い影を落としている。今後は事業の見直しも視野に予算の効率的な執行に取り組むたい。

(2) 県研修・親睦会の充実

本会の二千余名の会員は16の地区会に所属し、地区会ごとに特色ある活動を行っている。その会員が一堂に会する唯一の県研修・親睦会は会員の心を繋ぐ大切な事業である。全地区持ち回りで開催されてきたが令和元年から会員100名以上の地区会で開催している。今後、会員数の減少が予想される中、県研修・親睦会の一層の充実を図るとともに、負担が一部の地区に偏る事のないよう見直しが求められている。また、これと同時に、6ブロック制の見直しも必要となってくる。これまで、県研修と並んで開催してきたブロック研修は会員数50名以下の地区の増加により、ブロック内での持ち回り開催が困難なブロックが出てきている。また講演講師選定や参加者の固定化等、課題は山積している。二千余名の会員の英知を結集し、「岩手は一つ」の心意気のもと本事業の活性化に尽力したい。

県研修と並んで懇親会もまた、本会の中核事業である。同じ職場で労苦を共にした仲間との語らいは会員の喜びであり、生きる活力となっている。会場の確保等、課題もあるが、「心の潤滑油」として、この懇親の場を大切にしたい。

(3) 会員名簿の在り方

会員名簿の取り扱いが重い課題である。過去

60年間、会員名簿は毎年更新され全会員に配付されてきた。しかし、社会の個人情報に対する考え方の変化に加え、印刷製本にかかる経費は、財政面の重荷となってきた。

本会の事業の多くは各地区が主体となって企画・運営を担っている。県研修・親睦会の事業主体も担当地区会であり、参加者の取りまとめ等もそれぞれの地区会が行っている。したがって、今後も従来と同じ運営形態を取るとするならば、毎年全会員の名簿を作成し、全会員に配付する必然性は高くない。今後は、名簿の作成と全会員へ配付することの意義、並びに諸々の課題を考え併せ、時代にあった名簿の在り方を検討する必要がある。

(4) 社会のデジタル化への対応

急激な社会のデジタル化は、本会並びに多くの本会会員にとって大きな問題である。デジタル化への対応力は個人差が極めて大きく、紙媒体による情報伝達も会の運営上、非常に重要である。郵券等の高騰もあることから、人手で配付できる適度な人数のグループ化など各地区会において班構成の工夫が求められる。

さらに、諸物価高騰等により、年4回発行の「県退職校長会だより」をそのまま継続することは難しくなることから、ホームページを開発するなどネットやメールと紙媒体の二本柱での情報提供の推進の必要がある。

本会としてもデジタル化は避けて通ることのできない喫緊の課題である。

(5) 「いわて教育の日」

『「いわて教育の日」推進協議会』は、今年度で20年の節目を迎えた。前身は、本会が中心となり平成14年に設立された『「いわて教育の日」制定推進協議会』である。平成17年3月議会において「いわて教育の日に関する条例」が可決成立し、事業実施主体は岩手県教育委員会が担うこととなった。名称も『「いわて教育の日」推進協議会』とした。以来、広報を中心とした活動を続け、今日に至っている。20年の節目にあたり推進協議会の活動がどうあるべきか原点に立ち返り考えたい。

(6) 震災を忘れない

これまでを振りかえった時、忘れることのできない出来事は、東日本大震災である。未曾有の被害をもたらしたこの震災の哀しみは、決して癒えることはないが14年の歳月は時として私たちの記憶を消し去ろうとする。だからこそ、学校現場における「防災教育」や「復興教育」の推進を現職の校長先生方と連携し、後世に伝える使命を持ち続けなければならない。「わたしの3・11」の掲載や「鎮魂の歌」を歌い継ぐなど、一つ一つのことを積み重ねていきたい。

附・資料編



1 岩手県公立学校退職校長会会則

岩手県公立学校退職校長会会則

- 第 1 条 この会は、岩手県公立学校退職校長会と称し、事務局を会長の指定する場所におく。
- 第 2 条 この会は、会員相互の旧交を温め、生活の向上をはかるとともに、本県教育ならびにわが国教育の振興に資するをもって目的とする。
- 第 3 条 この会は、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。
1. 会員相互の親睦及び研修に関すること。
 2. 教育の振興及び関係団体との協力に関すること。
 3. 会員の福祉及び慶弔に関すること。
 4. その他、会の目的達成のため必要な事項。
- 第 4 条 この会は、公立学校の校長職、その他これに準ずると会長が認める職にあった退職者をもって組織する。
- 第 5 条 各地区に地区退職校長会をおく。
- 第 6 条 この会に次の役員をおく。
会長 1名、副会長 4名、監事 3名、理事 若干名
- 第 7 条 会長・副会長・監事は、総会において選出する。
理事は、地区会長及び会長委嘱の者とする。
常任理事は、理事の中から若干名を会長が委嘱する。
役員の任期は2か年とし、再任を妨げない。補欠役員の任期は、前任者の在任期間とする。
役員の任期が終了しても、後任役員が定まらないうちは、その職責を行う。
- 第 8 条 会長は、会務を総括し、本会を代表する。
副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
監事は、会計を監査する。
理事は、理事会を構成し、第13条に定める会務を行う。
常任理事は、会務を分担し、その執行にあたる。
事務局長は、会務を処理する。
- 第 9 条 この会は、顧問をおくことができる。
顧問は、総会の承認を得て、会長が委嘱する。
顧問は、会長の諮問に応ずる。
- 第10条 この会の会議は、総会、理事会とする。
- 第11条 総会は、代議員をもって毎年1回以上開き、次のことを議決する。
代議員は、地区退職校長会から、会員50名まで1名、50名を越す毎に1名を追加選出する。
1. 会務報告、過年度決算の審議承認
 2. 当年度の事業計画及び予算の審議
 3. 役員を選出
 4. 会則の改正
 5. その他重要事項
- 第12条 緊急の場合は理事会の議決をもって総会に替え、次の総会において承認を受ける。
- 第13条 理事会は毎年1回以上開き、次のことを処理する。
1. 総会に付議すべき事項
 2. 総会から委任された事項
- 第14条 この会の経費は、会費及びその他の収入をもってこれにあてる。
- 第15条 この会則の実施に必要な規定等は、理事会でこれを定めることができる。

附 則

1. この規約は、昭和40年10月23日から施行する。
2. 昭和46年6月19日改正・施行
3. 昭和48年6月16日改正・施行
4. 昭和49年6月17日改正・施行
5. 昭和56年5月23日改正・施行
6. 昭和57年5月17日改正・施行
7. 昭和60年5月27日改正・施行
8. 平成4年5月15日改正・施行
9. 平成21年5月12日改正・施行
10. 令和3年5月12日改正・施行

参考1 総会、理事会及び常任理事会の取り決め事項

- 1 会則第4条の「会長が認める職」は、次のとおりとする。
 - (1) 校長の経験はないが、県立総合教育センター所長の職にあった者



釜石市 橋野鉄鉱山・高炉跡

2 岩手県公立学校退職校長会 令和7年度基本方針並びに事業計画

I 基本方針

岩手県公立学校退職校長会は、結成以来、会員相互の親交を深め、連帯意識を高揚させ、生きがいの創出を目指し、併せて、豊かな生涯学習社会推進と本県及び我が国教育・文化の振興への貢献、寄与を期して活動し、創意と工夫をもって幾多の課題に取り組み成果を挙げてきた。本年度結成60周年を迎える。

一方、速度を増す情報化社会・ICTへの対応、人口減少・少子高齢化、グローバル化への移行と併せ、頻発する自然災害、多種の感染症、更に大国の力による現状変更の試みなどが社会情勢を大きく変え、大きな緊張感や不安感をもたらしている。このような状況下であればこそ、我々は、豊かな識見や経験を活かし、何よりも生命の尊重を基本に据えて、生きがいを創生していく取組や子どもたちの未来を保障する活動を一層充実させていくことが求められている。

東日本大震災津波発災から14年が経過し、被災地の復旧・復興が着実に進んでいるが、昨年1月1日には能登半島地震が発災し、再び自然の驚異を肌身に感じ、亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに被災された方々の支援のための募金を呼び掛けたところ、多くの善意が届けられ、支援金を届けることができた。令和7年3月の大船渡市の山林火災では、震災からの復興半ばにしての再度の避難生活に心身の疲労は極限を迎えており、今後の課題は山積みである。

こうした中、本県の子どもたちは、保護者、現職教職員等関係者一同の懸命な努力のもとに、思いやりと広い心をもちたくましく育ってきている。我々はその姿を一層支援するためにも、被災地に寄り添い、情報を共有し、また、今後も予想される新たな病災に対する科学的・医学的識見を深めるなど更なる復興や防災に係る研鑽を積む必要がある。

また、定年延長制にともなう役職定年を迎える現職校長の加入促進を継続して進めると共に、世界情勢に目を向け、平和教育の深化・拡充に関与し、その重要性を訴えていくことが大切な使命であると考えます。

このような中で、本県は、「いわて県民計画」のもと新たな「岩手県教育振興計画」(2024～2028)を策定した。日本のみならず世界で活躍する岩手県人が増えてくる中、学校教育・社会教育に対する県民の関心・期待は一層高まっている。

そこで、会員相互の研修、親睦・交流を深めながら、教育の理想像を考究し、教育尊重の風土づくりとその発展に寄与しつつ、自らの生きがい創生・社会貢献等の活動の活性化を着実に果たし、活力ある長寿社会の実現に向けた努力を継続していきたい。

以上の考えに基づき、我々は、教育関係機関・団体等と連携・協力を密にし、会員のニーズに対応しながら、英知を結集し結束を深め、次の重点で諸事業を推進する。

II 事業の重点

- 1 各地区会相互の連携を推進するとともに、教育関係機関・団体等との連携・協力を密にし、結成60周年記念大会第51回県研修・親睦会「盛岡大会」及び諸事業の円滑な運営を図る。
- 2 被災地区会との交流を推進し、被災地を支援するとともに、「いわて復興教育」の理念を踏まえ、その推進を支援する。
- 3 各地区会及び各ブロックの活動を支援し、組織活動の活性化と円滑な運営を図る。
- 4 諸研修等を通して、社会参画や地域活動に生かす情報を収集し、生涯学習の充実に努める。
- 5 役職定年者(校長)及び未加入者の加入促進に努めるとともに会員の親睦・交流を深め、生きがいの創出に資する福利・厚生増進に努める。
- 6 予算の効率的運用や財政基金の充実に努め、財政基盤の確立を図る。
- 7 「いわて教育の日」の具体的な推進に協力し、その充実と発展に努める。

III 各部の事業計画

1 総務部

- (1) 会員の連携意識の高揚と組織体制の確立
 - ① 諸会議の開催（定期総会、理事会、常任理事会、事務局長会議等）
 - ② 結成60周年記念大会第51回県研修・親睦会「盛岡大会」の推進・実施及び周知
 - ③ 教職員の定年延長に伴う役職定年者（校長）、未加入者への加入促進
 - ④ 会員名簿の作成及び会員への配付並びに今後の作成検討
 - ⑤ 東日本大震災等の被災地区等の交流推進及び能登半島地震や大船渡市山林火災被災者への支援
 - ⑥ 会員の実態把握と組織の活性化及びデジタル化の推進
- (2) 関係機関・団体との交流・連携の強化
 - ① 岩手県教育委員会、岩手県市町村教育委員会協議会
 - ② 岩手県小学校長会、岩手県中学校長会
 - ③ 全国連合退職校長会、東北地区退職校長会協議会
 - ④ 岩手県退職女性校長会（いわて梅の実会）
 - ⑤ 「いわて教育の日」推進協議会 週間：11月1日～7日
 - ⑥ その他の関係機関・団体
- (3) 情報の交流と連帯意識の増進
 - ① 各地区及び全国連合退職校長会・東北地区退職校長会協議会との連携強化と情報交換
 - ② 岩手県公立学校退職校長会報の配付と全国連合退職校長会報の送付
 - ・ 県 会 報 7月 1日 第202号 10月 1日 第203号
 - 1月 1日 第204号 3月31日 第205号
 - ・ 全連退会報 7月24日 第235号 11月20日 第236号
 - 3月15日 第237号 ※年間3号発行に変更（令和6年度から）
- (4) 「いわて教育の日」推進協議会の具体的展開への協力（制定20周年記念事業等）
- (5) 第51回東北地区退職校長会協議会山形大会への参加

2 研修部

- (1) 全県的研修
 - ① 岩手県公立学校退職校長会 結成60周年記念大会第51回県研修・親睦会「盛岡大会」
 - ・ 期 日 令和7年9月18日（木）～19日（金）
 - ・ 会 場 盛岡つなぎ温泉「ホテル紫苑」
 - ・ 鎮魂の歌
 - ・ 児童生徒の発表：盛岡市立仙北中学校合唱部
盛岡市立山岸小学校合唱部
 - ・ 記念講演 演題 「藩校に学ぶ人づくりの精神」
講師 第46代南部家当主 南部 利 文 氏
 - ・ 見学場所（自主研修）A：志波城古代公園 B：もりおか歴史文化館 C：原敬記念館
D：盛岡市先人記念館 E：石川啄木記念館
- (2) ブロック研修会（近隣地区会合同による研修内容の充実と相互交流）

Aブロック	Bブロック	Cブロック	Dブロック	Eブロック	Fブロック
盛岡	花巻	胆江	釜石	山田	九戸
岩手	遠野	一関西	気仙	宮古	二戸
紫波	和賀	一関東		岩泉	

※今年度は全県的研修のみとし、ブロック研修会はなし。

※県研修・親睦会及びブロック研修会の開催予定 (令和元年作成)

年度	関連行事	県研修 ブロック研修	A	B	C	D	E	F
7	結成60周年 第51回県研修・親睦会 「盛岡大会」	盛岡地区会 (450名)	盛岡					
8		二戸地区会 (111名)			一関東			二戸
9		花巻地区会 (181名)		花巻		釜石 (50)		
10	東北退職校長会 (岩手大会)	胆江地区会 (241名)			胆江		岩泉 (7)	九戸 (72)
11		岩手地区会 (202名)	岩手	遠野(46)				
12		一関東地区会 (101名)			一関東	気仙 (159)		
13		宮古地区会 (95名)					宮古	二戸
14		和賀地区会 (172名)	紫波 (66)	和賀				

(令和7年4月1日現在の地区会員数) (ゴシックは県研修)

- ① 「県研修・親睦会」開催地区会・・・会員数100名以上
- ② 「ブロック研修」開催地区会・・・会員数50名以上(但し、50名以下でも実施可)
- (3) 現職校長会との学習交流と連携協力
 - ① 現職・退職両校長会幹部懇談会の開催 7月末(予定)
 - ② 現職・退職両校長会教育懇談会の開催 12月上旬(予定)
- (4) 第51回東北地区退職校長会協議会山形大会
 - ・期 日 10月9日(火)～10日(水)
 - ・会 場 山形国際ホテル
 - ・参加者 会長・副会長・総務部長・事務局長(理事会出席者4名)
- (5) 会報の定期的発行と原稿依頼のデジタル化
7月1日 第202号 10月1日 第203号 1月1日 第204号 3月31日 第205号
- (6) 結成60周年記念誌作成に係る編集委員会の推進

3 厚生部

- (1) 会員の親睦と交流を図る事業の推進
 - ① 親睦会の開催(研修会と併催)
 - ・結成60周年記念大会第51回県研修・親睦会「盛岡大会」 9月18日(木)～19日(金)
 - ・ブロック研修会 ※今年度はなし。
 - ・現職・退職両校長会幹部懇談会 7月末(予定)
 - ・現職・退職両校長会教育懇談会 12月上旬(予定)
 - ② 退職校長会感謝規定に基づく感謝状の贈呈
 - ・本会発展のために貢献された方への感謝状と記念品の贈呈
- (2) 会員の福利・慶弔に関する事業の推進
 - ① 会員の慶祝
 - ・上寿、米寿を迎えられた会員へ賀詞と記念品、全連退からの賀詞を贈呈
 - ・叙勲を受章された会員へ祝詞を贈呈
 - ② 逝去された会員の遺族へ会長名で弔詞を奉呈

4 経理部

- (1) 予算の効率的運用
 - ① 計画的な予算執行(予算減額に伴う経費削減の工夫と事業の見直し)
 - ② 結成60周年記念大会第51回県研修・親睦会「盛岡大会」に係る財政基金の適切な予算執行
 - ③ 会費の早期納入促進
 - ④ 会費納入免除会員の把握
- (2) 財政基盤の確立
 - ① 基金の充実
 - ・基金の計画的、継続的な積み立てによる財政基盤の強化
 - ② 新規役職定年者(校長)及び未加入者に対する加入促進と未加入者の実態調査

3 令和7年度 岩手県公立学校退職校長会県本部役員

顧問	西村 倬郎			
〃	佐瀬 壽朗			
〃	木村 幸治			
会長	吉川 健次			
副会長	菅原 壽	盛岡	(盛岡ブロック)	
〃	深澤 瞭	和賀	(中央ブロック 岩手、紫波、花巻、遠野、和賀)	
〃	前川 清志	釜石	(県南ブロック 胆江、一関西、一関東、気仙、釜石)	
〃	福士 久雄	山田	(県北ブロック 山田、宮古、岩泉、九戸、二戸)	
監事	長谷川 滋	盛岡	(盛岡・紫波地区会)	
〃	白藤 茂	花巻	(岩手・花巻地区会)	
〃	菅原 隆二	二戸	(和賀・二戸地区会)	

常任理事

部	部長	部員
総務	熊谷 幸一	舘澤 卓宏 (県事務局長) 大西 洋悦 (県事務局次長) 平 政光 (盛岡地区会事務局長) 小笠原 章 (盛岡地区会事務局次長)
研修	篠田 宜道	林 勢津子 陳ケ岡 安雄 佐賀 敏子 佐藤 精晋
厚生	熊谷 雅英	鳥羽 真喜子
経理	佐々木 則子	山口 道明

○関係機関・団体に関する役員

(1) 日本教育会岩手県支部

役職		氏名
理事(会長)		吉川 健次
監事		熊谷 幸一
専門部	広報出版部員	篠田 宜道
	組織事業部員	舘澤 卓宏
	調査研究部員	小笠原 章

(2) 一般財団法人岩手県教育振興基金 (監事・評議員)

監事	菅原 壽
評議員	吉川 健次

○「いわて教育の日」推進協議会担当者

役職	氏名	業務分担	役職(常任理事会)
会長	吉川 健次		会長
事務局長	熊谷 雅英	*全体調整	厚生部長
事務局次長	大西 洋悦	*庶務、経理	事務局次長
事務局員	熊谷 幸一	*総務、諸会議運営	総務部長
	篠田 宜道	*情報紙取材、編集	研修部長
	舘澤 卓宏	*情報紙取材、編集	事務局長
	平 政光	*情報紙取材、編集	盛岡地区事務局長
	小笠原 章	*情報紙取材、編集	同 次長
	鳥羽 真喜子	*情報紙取材、編集	厚生部員



4 歴代役員名簿

【 県本部 】

年 度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度	
顧問	小嶋久人	小嶋久人 吉村暢夫	小嶋久人 吉村暢夫 西村倬郎	小嶋久人 吉村暢夫 西村倬郎	吉村暢夫 西村倬郎 佐瀬壽朗	
会長	西村倬郎	西村倬郎	佐瀬壽朗	佐瀬壽朗	木村幸治	
副会長	佐瀬壽朗 (盛岡)	佐瀬壽朗 (盛岡)	鳥羽 彊 (盛岡)	鳥羽 彊 (盛岡)	櫻 糀 毅 (盛岡)	
	佐藤郁夫 (中央)	佐藤郁夫 (中央)	留場 聰 (中央)	留場 聰 (中央)	藤田重治 (中央)	
	佐々木寅夫 (県南)	佐々木寅夫 (県南)	佐藤公好 (県南)	佐藤公好 (県南)	佐藤捷雄 (県南)	
	佐々木源良 (県北)	佐々木源良 (県北)	山崎喜六 (県北)	山崎喜六 (県北)	三富保廣 (県北)	
監事	佐藤國雄 (紫波)	佐藤國雄 (紫波)	菊池 直 (盛岡・紫波)	菊池 直 (盛岡・紫波)	細川 稔 (盛岡・紫波)	
	千葉 茂 (岩手)	千葉 茂 (岩手)	藤田裕康 (岩手・花巻)	藤田裕康 (花巻・岩手)	吉田義男 (岩手・花巻)	
	照井 健 (和賀)	照井 健 (和賀)	藤田秀樹 (和賀・二戸)	藤田秀樹 (二戸・和賀)	小原善則 (和賀・二戸)	
常任理事	総務	○佐瀬壽朗(兼) 三浦 晃 菊池成夫 高橋新悦 澤村憲照 篠田宜道	○櫻 糀 毅 菊池成夫 高橋新悦 澤村憲照 篠田宜道	○櫻 糀 毅 高橋新悦 伊藤好男 澤村憲照 篠田宜道	○櫻 糀 毅 高橋新悦 舘澤卓宏 澤村憲照 篠田宜道	○三浦 晃 高橋新悦 舘澤卓宏 澤村憲照 篠田宜道
	研修	○木村幸治 小水内邦子 山田 敦 川村敏明	○木村幸治 小水内邦子 山田 敦 川村敏明 横沢幹雄	○木村幸治 小水内邦子 山田 敦 川村敏明 横沢幹雄	○木村幸治 小水内邦子 山田 敦 川村敏明 横沢幹雄	○吉川健次 小水内邦子 山田 敦 川村敏明 平 政光
	厚生	○櫻 糀 毅 三浦 晃(兼) 佐々木伸三	○三浦 晃 佐々木伸三	○三浦 晃 佐々木伸三	○三浦 晃 熊谷幸一	○熊谷幸一 佐々木伸三
	経理	○鳥羽 彊 菊池 直	○鳥羽 彊 伊藤好男	○菊池成夫 林 勢津子	○菅原 壽 林 勢津子	○菅原 壽 林 勢津子
事務局長	菊池成夫	菊池成夫	高橋新悦	高橋新悦	高橋新悦	
事務局次長	高橋新悦	高橋新悦	伊藤好男	舘澤卓宏	舘澤卓宏	

※ ○は各部長

年 度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度	
顧問	吉村 暢夫 西村 倬郎 佐瀬 壽朗	吉村 暢夫 西村 倬郎 佐瀬 壽朗	吉村 暢夫 西村 倬郎 佐瀬 壽朗	吉村 暢夫 西村 倬郎 佐瀬 壽朗 木村 幸治	吉村 暢夫 西村 倬郎 佐瀬 壽朗 木村 幸治	
会長	木村 幸治	木村 幸治	木村 幸治	吉川 健次	吉川 健次	
副会長	櫻 糝 毅 (盛岡) 藤田 重治 (中央) 佐藤 捷雄 (県南) 三富 保廣 (県北)	小水内 邦子 (盛岡) 星川 英三 (中央) 小原 雪男 (県南) 苫米地 幹男 (県北)	小水内 邦子 (盛岡) 星川 英三 (中央) 小原 雪男 (県南) 苫米地 幹男 (県北)	菅原 壽 (盛岡) 下山 巖 (中央) 千葉 勝也 (県南) 横田 裕幸 (県北)	菅原 壽 (盛岡) 坂本 均 (中央) 千葉 勝也 (県南) 横田 裕幸 (県北)	
監事	細川 稔 (盛岡・紫波) 吉田 義男 (岩手・花巻) 小原 善則 (和賀・二戸)	長谷川 滋 (盛岡・紫波) 白藤 茂 (花巻・岩手) 菅原 隆二 (二戸・和賀)	長谷川 滋 (盛岡・紫波) 白藤 茂 (花巻・岩手) 菅原 隆二 (二戸・和賀)	三田村 幸治 (盛岡・紫波) 田口 功 (岩手・花巻) 金田 修一 (和賀・二戸)	三田村 幸治 (盛岡・紫波) 田口 功 (花巻・岩手) 金田 修一 (二戸・和賀)	
常任理事	総務	○三浦 晃 高橋 新悦 舘澤 卓宏 澤村 憲照 篠田 宜道	○菅原 壽 舘澤 卓宏 小笠原 章 澤村 憲照 篠田 宜道	○菅原 壽 舘澤 卓宏 小笠原 章 澤村 憲照 篠田 宜道	○澤村 憲照 舘澤 卓宏 大西洋 悦 平 政光 小笠原 章	○澤村 憲照 舘澤 卓宏 大西洋 悦 平 政光 小笠原 章
	研修	○吉川 健次 小水内 邦子 山田 敦 川村 敏明 平 政光	○吉川 健次 川村 敏明 川守田 毅 林 勢津子 平 政光 小水内 邦子 篠田 宜道	○吉川 健次 川村 敏明 川守田 毅 林 勢津子 平 政光	○篠田 宜道 川守田 毅 林 勢津子 陳ヶ岡 安雄 佐賀 敏子	○篠田 宜道 川守田 毅 林 勢津子 陳ヶ岡 安雄 佐賀 敏子
	厚生	○熊谷 幸一 川守田 毅	○熊谷 幸一 鳥羽 真喜子	○熊谷 幸一 鳥羽 真喜子	○熊谷 幸一 鳥羽 真喜子	○熊谷 幸一 鳥羽 真喜子
	経理	○菅原 壽 林 勢津子	○山田 敦 山口 道明	○山口 道明 佐賀 敏子	○山口 道明 佐々木 則子	○佐々木 則子 山口 道明
事務局長	高橋 新悦	舘澤 卓宏	舘澤 卓宏	舘澤 卓宏	舘澤 卓宏	
事務局次長	舘澤 卓宏	小笠原 章	小笠原 章	大西洋 悦	大西洋 悦	

【 理事・地区会長 】

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
盛岡	西村 倬郎	西村 倬郎	佐瀬 壽朗	佐瀬 壽朗	木村 幸治
岩手	小川 春元	小川 春元	小川 春元	藤田 重治	藤田 重治
紫波	星川 英三	星川 英三	星川 英三	星川 英三	星川 英三
花巻	高橋 寛	遠藤 紀宏	遠藤 紀宏	遠藤 紀宏	遠藤 紀宏
遠野	菅沼 戊	菅沼 戊	留場 聰	留場 聰	留場 聰
和賀	佐藤 郁夫	佐藤 郁夫	照井 健	照井 健	照井 健
胆江	及川 正昭	及川 正昭	佐藤 公好	佐藤 公好	佐藤 公好
一関西	佐藤 啓司	佐藤 啓司	佐藤 啓司	藤堂 隆則	佐藤 捷雄
一関東	和賀 成夫	和賀 成夫	和賀 成夫	小原 雪男	小原 雪男
気仙	佐藤 善士	佐藤 善士	佐藤 善士	佐藤 善士	千葉 勝也
釜石	佐々木 寅夫	佐々木 寅夫	塚本 希之	塚本 希之	塚本 希之
山田	山崎 喜六	山崎 喜六	山崎 喜六	山崎 喜六	山崎 喜六
宮古	中屋 定基	中屋 定基	大森 大樹	大森 大樹	三富 保廣
岩泉	佐々木 源良	佐々木 源良	佐々木 源良	佐々木 源良	村木 登
九戸	苦米地 幹雄	苦米地 幹雄	苦米地 幹雄	苦米地 幹雄	苦米地 幹雄
二戸	柴田 俊春	高瀬 一行	高瀬 一行	高瀬 一行	柴田 孝夫

【 地区事務局長 】

	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度	令和元年度
盛岡	澤村 憲照	澤村 憲照	澤村 憲照	澤村 憲照	澤村 憲照
岩手	小原 眞澄	小原 眞澄	小原 眞澄	小原 眞澄	小原 眞澄
紫波	村上 政悟	村上 政悟	村上 政悟	村上 政悟	村上 政悟
花巻	晴山 正之	瀬川 行夫	瀬川 行夫	瀬川 行夫	瀬川 行夫
遠野	留場 聰	留場 聰	佐々木 謙	佐々木 謙	佐々木 謙
和賀	阿部 修志	阿部 修志	阿部 修志	阿部 修志	阿部 修志
胆江	菊池 宏充	菊池 宏充	菊池 宏充	菊池 宏充	小野寺 政司
一関西	千葉 彰彦	千葉 彰彦	千葉 彰彦	千葉 彰彦	佐々木 敏夫
一関東	小原 雪男	小原 雪男	小野寺 俊次	小野寺 俊次	小野寺 俊次
気仙	熊谷 勵	熊谷 勵	阿部 重人	阿部 重人	阿部 重人
釜石	木谷 哲	木谷 哲	前川 清志	前川 清志	前川 清志
山田	濱登 長一郎	濱登 長一郎	濱登 長一郎	濱登 長一郎	濱登 長一郎
宮古	中嶋 満	中嶋 満	佐々木 敏夫	佐々木 敏夫	巖 敏雄
岩泉	村木 登	村木 登	村木 登	村木 登	村木 登
九戸	日沢 利光	日沢 利光	日沢 利光	日沢 利光	日沢 利光
二戸	横田 裕幸	戸来 鉄男	戸来 鉄男	戸来 鉄男	戸来 鉄男

【 理事・地区会長 】

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
盛岡	木村幸治	木村幸治	木村幸治	吉川健次	吉川健次
岩手	藤田重治	小原眞澄	小原眞澄	小原眞澄	小原眞澄
紫波	星川英三	星川英三	星川英三	村上政悟	村上政悟
花巻	下山巖	下山巖	下山巖	下山巖	坂本均
遠野	菊池健次	菊池健次	菊池健次	菊池健次	佐々木謙
和賀	照井健	深澤瞭	深澤瞭	深澤瞭	深澤瞭
胆江	佐藤公好	佐藤公好	佐藤公好	高橋清融	高橋清融
一関西	佐藤捷雄	佐藤捷雄	佐藤捷雄	千葉彰彦	千葉彰彦
一関東	小原雪男	小原雪男	小原雪男	小原雪男	皆川修
気仙	千葉勝也	千葉勝也	千葉勝也	千葉勝也	千葉勝也
釜石	塚本希之	前川清志	前川清志	前川清志	前川清志
山田	山崎喜六	山崎喜六	山崎喜六	山崎喜六	山崎喜六
宮古	三富保廣	宮城忠芳	宮城忠芳	宮城忠芳	宮城忠芳
岩泉	村木登	村木登	村木登	村木登	村木登
九戸	苦米地幹雄	苦米地幹雄	苦米地幹雄	日沢利光	日沢利光
二戸	柴田孝夫	柴田孝夫	柴田孝夫	横田裕幸	横田裕幸

【 地区事務局長 】

	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
盛岡	澤村憲照	澤村憲照	澤村憲照	平政光	平政光
岩手	目時雄二	目時雄二	小野寺仁	小野寺仁	小野寺仁
紫波	村上政悟	村上政悟	村上政悟	小原眞一	箱崎悟
花巻	瀬川行夫	瀬川行夫	瀬川行夫	瀬川行夫	今野充雅
遠野	佐々木謙	佐々木謙	佐々木謙	佐々木謙	多田功一
和賀	阿部修志	澤藤耕平	澤藤耕平	澤藤耕平	澤藤耕平
胆江	小野寺政司	小野寺政司	小野寺政司	菅原博	菅原博
一関西	佐々木敏夫	佐々木敏夫	佐々木敏夫	佐藤毅	佐藤毅
一関東	田中繁	田中繁	田中繁	田中繁	櫻井博勝
気仙	阿部重人	松村仁	松村仁	松村仁	松村仁
釜石	前川清志	柳田正人	柳田正人	千葉伸一	千葉伸一
山田	濱登長一郎	濱登長一郎	濱登長一郎	福士久雄	福士久雄
宮古	裊岩敏雄	裊岩敏雄	裊岩敏雄	山名秀樹	山名秀樹
岩泉	村木登	村木登	村木登	村木登	村木登
九戸	日沢利光	日沢利光	日沢利光	鎌田和也	鎌田和也
二戸	戸来鉄男	戸来鉄男	戸来鉄男	森川和彦	森川和彦

5 平成27年度～令和6年度までの県研修・親睦会及びブロック研修

○県研修・親睦会

年度	周回	主管地区会 期 日	開 催 地 講演演題・講師・見学場所	参加者
平成 27	42	盛 岡 9/11	盛 岡 サンセール盛岡 演 題 「環境世界が培う力」 講 師 東京学芸大学名誉教授 佐島 群巳 氏 岩手県公立学校退職校長会結成50周年記念大会	184
28	43	気 仙 9/15、16	大船渡 大船渡プラザホテル、大船渡市立博物館 演 題 「震災時の医療と地域医療」 講 師 国保二又診療所所長 (前岩手県立高田病院院長) 石木 幹人 氏 見学研修 大船渡市立博物館 (東日本大震災大津波写真展、津波映像)	230
29	44	一関東 9/14、15	一関市 東山地域交流センター、平泉ホテル武蔵坊 演 題 「ILCと人類の未来～ILCの目指す物理、 そのためのツール・超伝導加速器とは」 講 師 高エネルギー加速器研究機構 (KEK) 教授 早野 仁司 氏 見学研修 石と賢治のミュージアム、東北砕石工場	250
30	45	遠 野 10/4、5	遠野市 遠野市民センター、あえりあ遠野 演 題 「おんな大名・清心尼と遠野」 講 師 遠野文化研究センター副主幹 前川 さおり 氏 見学研修 遠野市立博物館、とおの物語の館、 遠野城下町資料館	203
令和 元	46	岩 手 9/12、13	雫石町 雫石町中央公民館野菊ホール 雫石プリンスホテル 演 題 「宝塚の華 未完の大女優 園井恵子の生涯」 講 師 岩手県芸術文化協会会長 柴田 和子 氏 見学研修 小岩井農場	188
2	47	宮 古 9/24、25	新型コロナウイルス感染症拡大により次年度に延期	——
3	47	宮 古 9/14	新型コロナウイルス感染症拡大により中止	——
4	48	和 賀 9/15	北上市 北上市文化交流センター「さくらホール」 演 題 「地方創生時代の北上市の挑戦」 講 師 北上オフィスプラザ専務取締役 (前北上市商工部長) 石川 明広 氏 見学研修 北上市産業支援センター、 北上コンピュータアカデミー	219

年度	周回	主管地区会 期 日	開 催 地 講演演題・講師・見学場所	参加者
5	49	一関西 9/14、15	一関市 一関文化センター 巖美溪温泉「いつくし園」 演 題 「世界遺産 平泉・毛越寺」 講 師 毛越寺貫主 藤里 明久 氏 見学研修 毛越寺、平泉世界遺産ガイダンスセンター	233
6	50	気仙 9/19、20	陸前高田市 陸前高田市民文化会館 奇跡の一本松 ホール、キャピタルホテル1000 演 題 「この地に生きる ～大震災からの復興・創生～」 講 師 株式会社八木澤商店 代表取締役 河野 通洋 氏 見学研修 陸前高田市立博物館、旧吉田家住宅主屋	208



陸前高田市 奇跡の一本松

○ブロック研修

年度	主管地区会 期 日	開 催 地 講演演題・講師	参加者
平成 27	Bブロック：主管遠野 (花巻・遠野・和賀) 期日 7/16	遠野市 遠野市立博物館、あえりあ遠野 演 題 「清心尼公とその周辺—女殿様出現の背景—」 講 師 遠野文化センター運営委員会副委員長 大橋 進 氏	69
	Cブロック：主管一関西 (胆江・一関西・一関東) 期日 7/11	一関市 巖美溪いつくし園、骨寺村荘園交流館 演 題 「中尊寺領骨寺村の重要文化財景観について」 講 師 一関市博物館館長 入間田 宣夫 氏	117
28	Aブロック：主管岩手 (盛岡・岩手・紫波) 期日 10/21	雫石町 雫石町中央公民館野菊ホール 演 題 「いま考える 絵本のこと」 講 師 末盛 千枝子 氏	76
	Eブロック：主管岩泉 (山田・宮古・岩泉) 期日 10/11	※台風10号の被害が甚大であったため中止 (東日本大震災大津波写真展、津波映像)	—
29	Aブロック：主管紫波 (盛岡・岩手・紫波) 期日 8/19	紫波町 オガールプラザ情報交流館 演 題 「佐比内金山 隠れ切支丹物語」 講 師 佐比内公民館館長 山下 研悦 氏	115
	Dブロック：主管釜石 (気仙・釜石) 期日 7/19)	釜石市 釜石市教育センター 演 題 「幕末の一揆の特色」 講 師 岩手県文化財保護審議会顧問 金野 静一 氏 見学研修 石と賢治のミュージアム、 東北砕石工場	46
30	Eブロック：主管岩泉 (山田・宮古・岩泉) 期日 9/20	岩泉町 岩泉龍泉洞温泉ホテル 演 題 「龍泉洞の魅力」 講 師 岩手県立博物館学芸員 渡辺 修二 氏	48
	Fブロック：主管二戸 (九戸、二戸) 期日 10/23	一戸町 御所野縄文博物館 二戸ロイヤルパレスホテル 演 題 もうすぐ世界遺産～御所野遺跡の縄文文化～ 講 師 御所野縄文博物館館長 高田 和徳 氏 見学研修 遠野市立博物館、遠野物語の館	56
令和 元	Bブロック：主管和賀 (花巻・遠野・和賀) 期日 7/18	北上市 岩手中部広域行政組合岩手中部クリーン センター、藤根地区交流センター、 北上平和記念展示館 演 題 「最北の特攻出撃基地—岩手陸軍飛行場 (後藤野飛行場)の足あと」 講 師 北上平和記念展示館学芸員 高橋 源英 氏	78
	Fブロック：主管九戸 (九戸、二戸) 期日 7/20	洋野町 ひろの水産会館UNIQUE (ユニーク) 岩手県栽培漁業協会種市事業所・ アグリパーク大沢 演 題 「栽培漁業とウニ種苗生産について」 講 師 岩手県栽培漁業協会種市事業所所長 箱石 和廣 氏	48

年度	主管地区会 期 日	開 催 地 講演演題・講師	参加者
2	Bブロック：主管遠野 (花巻・遠野・和賀) Cブロック：主管一関西 (胆江・一関西・一関東)	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため延期	——
3	Bブロック：主管遠野 (花巻・遠野・和賀) Cブロック：主管一関西 (胆江・一関西・一関東)	新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため令和5 年度へ延期し、県研修会と兼ねる	—— ——
4	Aブロック：主管盛岡 (盛岡・岩手・紫波) 期日 7/16 Dブロック：主管気仙 (気仙・釜石) 期日 7/22	盛岡市 岩手県立博物館 演 題 「雑学のススメ」(笑いと頭の体操) ～中高年の皆さんと一緒に考える日本語 と名言～ 講 師 岩手県立博物館館長 高橋 廣至 氏 陸前高田市 陸前高田市コミュニティーホール、 陸前高田市立博物館 演 題 「蘇る博物館」 講 師 陸前高田市立博物館副主幹兼主任学芸員 熊谷 賢 氏	30 62
5	Cブロック：主管一関西 (胆江・一関西・一関東)	県研修・親睦会「一関西大会」と兼ねる	233
6	Aブロック：主管紫波 (盛岡・岩手・紫波) 期日 8/24	矢巾町 田園ホール(矢巾町文化会館) 演 題 「健康で長生きするために」 講 師 岩手医科大学学長兼同大学付属病院長 小笠原 邦昭 氏	125



6 新入会員の加入状況と会員数の推移

年 度 地区	平成27年度		平成28年度		平成29年度		平成30年度		令和元年度	
	新加入者数	会員数	新加入者数	会員数	新加入者数	会員数	新加入者数	会員数	新加入者数	会員数
盛岡	—	419	—	408	22	418	12	415	20	422
岩手	—	218	—	221	5	217	12	217	6	214
紫波	—	81	—	80	3	81	3	81	5	82
花巻	—	195	—	190	10	188	5	185	7	189
遠野	—	64	—	63	2	61	1	62	0	61
和賀	—	177	—	177	6	180	6	181	7	179
胆江	—	273	—	279	9	277	11	277	4	267
一関西	—	156	—	158	4	157	7	155	5	148
一関東	—	140	—	132	3	128	4	131	5	129
気仙	—	165	—	168	8	168	8	174	5	172
釜石	—	57	—	54	3	57	3	58	5	58
山田	—	24	—	24	0	23	0	22	0	22
宮古	—	102	—	107	5	109	4	110	6	111
岩泉	—	11	—	11	0	11	1	12	0	11
九戸	—	93	—	91	4	91	4	92	0	88
二戸	—	148	—	147	1	143	4	139	5	132
合 計	—	2,323	—	2,310	85	2,309	85	2,311	80	2,285
新入会員加入率	—		—		94.4%		92.4%		90.9%	

年 度	令和2年度		令和3年度		令和4年度		令和5年度		令和6年度	
地区 会員数	新加入者数	会員数	新加入者数	会員数	新加入者数	会員数	新加入者数	会員数	新加入者数	会員数
盛岡	21	429	18	435	22	438	23	443	23	450
岩手	13	219	7	211	10	213	6	209	3	207
紫波	0	74	4	71	2	71	1	67	4	68
花巻	10	194	2	189	6	194	8	193	5	188
遠野	0	56	0	54	4	54	0	51	2	49
和賀	7	176	3	172	10	179	7	177	4	167
胆江	6	263	8	254	8	256	6	253	4	249
一関西	5	146	6	147	8	152	3	147	3	147
一関東	3	128	3	125	4	114	4	111	0	106
気仙	8	169	7	170	5	172	3	168	6	167
釜石	2	55	1	51	2	50	4	49	3	51
山田	2	24	0	24	0	24	0	22	0	20
宮古	3	107	2	105	3	106	3	101	5	103
岩泉	0	11	0	10	0	8	0	8	0	8
九戸	2	86	1	80	2	80	4	77	2	76
二戸	3	131	2	12	3	118	2	116	5	115
合 計	85	2,268	64	2,224	89	2,229	74	2,192	69	2,171
新入会員加入率	87.6%		84.2%		85.6%		80.4%		90.8%	



7 財政の移り変わり

項目		年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
財政規模 = 収入総額			5,938,000	5,623,500	5,519,500	5,386,000
収入内訳	1 会 費		5,221,000	5,198,000	5,175,000	5,244,000
	2 繰越金		716,546	425,097	344,062	141,511
	3 雑収入		454	403	438	489
支出内訳	1 事務局費		800,000	770,000	750,000	760,000
	① 通信費		90,000	80,000	75,000	75,000
	② 需用費		80,000	80,000	75,000	75,000
	③ 備品費		30,000	20,000	10,000	5,000
	④ 手当		480,000	480,000	480,000	480,000
	⑤ 賃金		60,000	50,000	50,000	65,000
	⑥ 借上料		36,000	36,000	36,000	36,000
	⑦ 光熱費		24,000	24,000	24,000	24,000
	2 事業費		3,625,000	3,505,000	3,440,000	3,327,000
	① 会議費		1,400,000	1,350,000	1,320,000	1,180,000
	② 名簿費		460,000	460,000	460,000	460,000
	③ 調査渉外費		120,000	130,000	135,000	135,000
	④ 研修費		700,000	700,000	690,000	738,000
	⑤ 広報費		600,000	550,000	540,000	525,000
	⑥ 資料収集費		50,000	20,000	10,000	10,000
	⑦ 慶弔費		240,000	240,000	225,000	224,000
	⑧ 福祉対策費		5,000	5,000	5,000	5,000
	⑨ 「教育の日」推進費		50,000	50,000	50,000	50,000
	3 負担金		960,000	940,000	920,000	941,000
	4 旅費		130,000	200,000	205,000	200,000
5 積立金		400,000	200,000	200,000	150,000	
6 雑費		5,000	5,000	5,000	5,000	
7 予備費		18,000	3,500	4,500	3,000	
付記	会費額(年)		2,300	2,300	2,300	2,300
	会員数		2,270	2,260	2,250	2,280
	備考		会員数は年度当初の収支予算における概数			

令和元年度	令和2年度	令和3年度	令和4年度	令和5年度	令和6年度
5,435,000	5,359,000	5,560,700	5,592,500	5,587,700	5,238,070
5,106,000	5,106,000	5,025,500	4,991,000	4,922,000	4,876,000
328,900	252,939	535,170	601,439	665,692	362,062
100	61	30	61	8	8
655,000	630,000	715,000	700,000	690,000	617,000
75,000	65,000	65,000	100,000	90,000	70,000
80,000	70,000	155,000	105,000	105,000	73,000
5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	2,000
370,000	370,000	370,000	370,000	370,000	370,000
65,000	60,000	60,000	60,000	60,000	42,000
36,000	36,000	36,000	36,000	36,000	36,000
24,000	24,000	24,000	24,000	24,000	24,000
3,420,000	3,510,000	3,540,000	3,570,000	3,595,000	3,419,000
1,200,000	1,300,000	1,300,000	1,300,000	1,300,000	1,300,000
470,000	470,000	470,000	510,000	510,000	500,000
140,000	120,000	120,000	120,000	155,000	125,000
760,000	740,000	610,000	700,000	650,000	610,000
550,000	570,000	730,000	630,000	670,000	630,000
10,000	5,000	5,000	5,000	5,000	2,000
235,000	250,000	250,000	250,000	250,000	200,000
5,000	5,000	5,000	5,000	5,000	2,000
50,000	50,000	50,000	50,000	50,000	50,000
912,000	917,000	903,000	920,000	900,000	900,000
240,000	200,000	200,000	200,000	200,000	150,000
200,000	100,000	200,000	200,000	200,000	150,000
5,000	1,000	1,000	1,000	1,200	1,000
3,000	1,000	1,700	1,500	1,500	1,070
2,300	2,300	2,300	2,300	2,300	2,300
2,220	2,220	2,185	2,170	2,140	2,120

8 熊本地震と能登半島地震への取り組み

平成29年1月1日

退職校長会だより

第168号 (8)

熊本地震被災者への支援について

平成二十八年四月十四日、熊本県において震度七の熊本地震が発生し、甚大な被害状況が報じられた。本会では、熊本地震の重大性に鑑み、次のような対応をした。

◎熊本地震被災者支援への対応

一、理事会(各地区会長)
本会事務局では、熊本地震に関する各種の情報を収集し、五月十九日の第一回理事会に「熊本地震にかかる熊本県退職校長会への対応」を緊急提案した。

理事会では、「総会議決を前提に早急に取り組む。支援の趣意書作成、義援金、募金手順等については会長に一任する」ことが決定された。

二、常任理事会(本部事務局)

理事会決定を受け、本部事務局は①熊本県退職校長会から被災状況を聴取し、②全連退本部に熊本地震への対応を照会し、③三・一一大津波の時に各県退職校長会から本会へ寄せられた義援金の確認を行った。

それらを踏まえ、次のような「熊本地震被災者への支援」の趣意書を五月十二日、二十八年度本会定期総会へ提案した。

趣意書(要旨・原文は敬体)

去る四月十四日、熊本県熊本地方を震源とする最大震度七の熊本地震(前震)が発生し十六日には最大震度七の本震が発生し、現在も大小規模の余震が継続している。

この大地震で、熊本地方では尊い生命が奪われ、家屋の倒壊・破損、土砂災害、道路網の損傷等甚大な被害が発生している。熊本県退職校長会によると、会長の自宅の崩壊をはじめ、多くの会員が被災され、避難所生活を余儀なくされているとのこと。多くの小中学校の被害も甚大であり、正常な教育活動に戻るには相当の期間が予想され、児童・生徒への様々な影響が懸念されているとのことである。

五年前、本県は東日本大震災大津波に遭遇し、本会の多くの会員は筆舌に尽くしがたい被害を受けた。その折は各県退職校長会より多大の義援金を賜った。ついでには、本会の趣意を理解され、左記による支援活動の推進に特段のご協力を賜りたい。

《義援金を募る方法》

- ① 本会会員から義援金を募り、熊本県退職校長会へ届ける。
- ② 会員一口 千円以上とし、募金は任意とする。
- ③ 義援金の趣意書を熊本県退職校長会へ伝え、配分は一任する。
- ④ 県本部と地区会は連携を密にし平成二十八年六月三十日を目途に義援金を統括し、熊本県退職校長会へ届ける。

提案した趣意書は、満場一致で決定された。

三、地区会長、事務局長、班長
本部事務局は、総会議決を踏まえ各地区会事務局と連携を図り、義援金の募金活動を推進した。

各地区会会長・事務局長・班長は、地区会会員へ「趣意書」「払込取扱票」の配付、地区としての義援金の拠出対策等に尽力された。

義援金は、全地区会から拠出され、地区会一括が五地区会、会員の任意が十地区会で、総額二百二十万円を越す義援金(別表)が寄せられた。

◎まとめ

「熊本地震被災者への支援」を本会定期総会で決議し、支援活動を推進して六カ月が経過した。

本会理事(各地区会長)、各地区会事務局長、班長、本部事務局の相互の連携と本会会員のご理解ご協力により熊本地震で被災された熊本県退職校長会会員、熊本県

内児童・生徒へ義援金として総額二百二十万七千円を送呈することができた。

熊本県退職校長会大森勲会長から、「貴会の大切なお心は、被災を受けた会員のみならず、学校及び児童・生徒たちに役立てる。『支え合おう熊本、いま心一つに』を合言葉に県民一体となって少しずつ復興をめざして前進する」との感謝の礼状をいただいた。

五年九カ月前、東日本大震災大津波の被害に遭遇したわれわれのささやかな返礼でもあった支援活動が、実を結んだことを会員一同確認したい。

熊本県の安全と被災された皆様の一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。
お寄せくださいました会員の皆様のご厚情に深く感謝を申しあげます。

熊本地震被災者への義援金集計 (11月30日現在)

地区会	件数	金額(円)
盛岡	209	500,575
岩手	62	158,000
茨城	40	91,262
花巻	44	158,000
遠野	35	83,000
和賀	81	159,000
胆江	89	219,000
一関西	※ 1	100,000
一関東	※ 4	111,000
気釜	66	202,000
釜石	※ 2	56,000
山田	※ 2	23,000
宮古	46	107,000
岩泉	5	14,000
九戸	36	68,000
二戸	※ 2	145,000
仙台	2	11,000
東京	1	1,000
合計	727	2,206,837

説明 ①件数～「払込取扱票」1枚を1件とする。
1枚で複数人拠出の場合は1件。
②※～ 地区会一括拠出は1件。
一関東4(地区会一括+個人3件)
③合計727件(個人722件+地区会5件)
④合計金額 2,206,837円であるが、熊本県退職校長会へ2,207千円を送呈。

能登半島地震被災者へ義援金送呈

令和6年1月1日新年早々、石川県能登半島に於いて最大震度7の地震が発生し各地で土砂災害、火災、液化現象、家屋の倒壊が相次ぎ、交通網も寸断されるなど甚大な被災状況が報じられた。

本会では、この緊急事態に鑑み、次のような対応をし、義援金192万9千円を送呈した。

1 お見舞いのお手紙の送付

地震発生一週間後、石川県退職校長会宛に「お見舞い」のお手紙を送付する。この事がきっかけとなり、石川県及び石川県退職校長会の会員の被災状況を随時、把握することが出来た。

2 第5回常任理事会（1月18日）

石川県及びその会員の現状を報告。東日本大震災の際に各県退職校長会から寄せられた義援金を確認し、来る「第2回理事会」に向けて支援の仕方について協議する。

3 第2回理事会（2月15日）

5月の定期総会を待つて取組むのでは遅すぎるので、支援に係る趣意書、義援金の手順等について協議し、内容、方法等については会長に一任することを決定する。

4 第2回事務局長会議（3月1日）

地震発生から3カ月が過ぎた今の状況を伝えると共に第2回理事会で決定したことを基に、特に趣

意書の説明・配付と義援金の集金方法について協議・確認する。

5 部長会議・第6回常任理事会（3月22日）

理事会・事務局長会議での協議を基に、趣意書・義援金の手順等について協議作成する。

6 令和6年度第1回理事会（4月18日）

総会で審議する趣意書等を協議して承認する。

7 定期総会（5月8日）

左記の趣意書を承認する。
能登半島地震被災者への支援趣意書（原文は敬体である）

新年1月1日、午後4時10分頃、石川県能登半島地方を震源とする震度7の能登半島地震が発生した。その後も能登半島各地で震度5〜6の地震が頻発し、懸命な復旧作業が妨げられている。

この大地震で、能登半島を中心に多くの尊い生命が奪われ、家屋の全壊・半壊、土砂災害、道路網の損傷等、甚大な被害が発生している。

石川県退職校長会によると、2月初旬、把握しているだけで4名の会員が亡くなり、多くの会員が避難所生活を余儀なくされており、二次避難も行われていく。今なお会員との連絡が十分に取れず、状況の全容をつかめずにいるとのことだ。

また、珠洲市を中心とした小中学校の被害も甚大で正常な教育活動に戻るには相当の期間が予想され、児童生徒への様々な影響が懸念される。

13年前、本県は東日本大震災に遭遇し、本会の多くの会員は筆舌に尽くしがたい被害を受けた。その折には、全国連合退職校長会はじめ、石川県及び各県退職校長会より多大の義援金を賜ったことを忘れることはできない。

本会では2月15日の第2回理事会に於いて「能登半島地震被災者への支援を令和6年度総会に先立ち理事会で決定し、県本部は早急に支援活動を推進する」ことが決議された。

つきましては、本状の趣旨を理解され、左記による支援活動の推進に特段のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

記

① 被災された石川県退職校長会会員並びに児童生徒への義援金とする。

② 募金は任意とし、一口千円以上とする。

③ 義援金の配分は石川県退職校長会に一任する。

④ 募金切は6月30日を最終日とする。

⑤ 県本部は振り込まれた義援金を総括し、石川県退職校長会へ送呈する。

⑧ 各地区会の対応
総会で受け取った「趣意書」を地区総会等で説明、配付する。
義援金については、年会費と一緒に集金する地区会と一括拠出する地区会が見られたが、それぞれの地区の実情に即して尽力して頂いた。

◎まとめ
各地区会会員のご理解ご協力により、被災された石川県退職校長会へ義援金を送呈することが出来た。

石川県退職校長会会長からは「頂きました義援金につきましては、被災地区支部の要望や被災会員の状況等を丁寧把握して復興の支援に使ってまいりたい」との感謝の礼状を頂いた。一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

能登半島地震被災者への義援金
(令和6年7月22日現在)

地区会	件数	金額(円)
盛岡	335	420,500
岩手	地区会	100,000
紫波	55	77,000
花巻	84	119,000
遠野	37	40,000
和賀	156	184,000
胆江	224	271,000
一関西	地区会	90,000
一関東	102	102,000
気仙	127	222,000
釜石	地区会	25,000
山田	17	17,000
宮古	89	132,450
岩泉	地区会	8,000
九戸	21	21,000
二戸	地区会	100,000
合計	地区-5 1,247人	1,928,950

※合計金額1,928,950円であるが県予算の雑費から50円を拠出し石川県退職校長会へ1,929,000円を送呈。

編集後記

本誌は平成27年に発刊された本会「50周年記念誌」を受け、その後の令和6年までの10年間のあゆみを振り返るとともに、今を見つめ、これからに向けて確かな記録を残すことを趣旨として編集に努めました。とりわけ、16の地区会からは限られた字数の中でそれぞれの地区の地理的・社会的な特色を活かした創造性に富んだ貴重な活動の記録を寄せていただきました。地区会の記録には本会の抱える課題解決のヒントや提言等が随所に見られ、心を打たれました。

東日本大震災から立ち直りかけた令和元年に中国武漢市で発生して世界的な流行となった新型コロナウイルス感染症によって本会事業も多大な影響を受けましたが令和6年度になってようやく従来通りの事業を執り行うことが可能になり、本誌編集作業もマスク無しで行うことができました。

本誌編集にあたりましては会員の皆様、関係各位の方々から多大なご協力と温かなお励ましを賜りました。ここに感謝とお礼を申し上げます。



60周年記念誌編集委員会

- 委員長 篠田 宜道 (研修部部長)
委員 林 勢津子 (研修部)
” 陳ヶ岡安雄 (研修部)
” 佐賀 敏子 (研修部)
” 佐藤 精晋 (研修部)
” 館澤 卓宏 (県事務局長)
” 大西 洋悦 (県事務局次長)



会旗（平成7年8月17日制定）

岩手県公立学校退職校長会

60周年記念誌

発行日 令和7年9月18日
編集・発行者 岩手県公立学校退職校長会
会長 吉川 健次
印刷所 (有)セーコー印刷
盛岡市下の橋町2-23
電話 019-651-3606

この岩手県公立学校退職校長会60周年記念誌は、公益財団法人日本教育公務員弘済会岩手支部より、(公財)日教弘教育文化事業岩手支部奨励助成を受けて作成いたしました。

